# R E H K

## Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

**—第13号—**


《講　演》

レコンキスタからコンキスタへ。連続する歴史
…… 小林一宏 (1)

《論　文》

『血の婚礼』における色彩のシンボルに関する一考察
…… 森　直香 (19)

«Don Quijote de la Manchuria»: Salvador de Madariaga en la Sociedad de Naciones ante la invasión japonesa de Manchuria …… Keishi YASUDA (35)

《研究ノート》

ボリビアの先住民教育
—先住民に対する教育制度・教育改革をめぐって—
…… 池田玲子 (51)

英語とスペイン語のいわゆる“falsos amigos”
—語彙習得における言語干渉の克服に向けて—
…… 岡本信照・橋本和美 (61)

アロンソ・オルティスの『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』にみられる人間論について
…… 加藤さやか (73)

日本人スペイン語学習者に対するProcessing Instructionの有効性に関する実証的研究
…… 鈴木しのぶ (85)



2005年

京都イスパニア学研究会

Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto

# レコンキスタからコンキスタへ。連続する歴史

小林　一宏（上智大学）

## はじめに

歴史は教育の場を含めてしばしば古代・中世・近代といった時代区分に沿って語られ、また記憶される。これは「暗黒の中世」のイメージを生んだパルミエリ(Matteo Palmieri 1406～75)に始まり、次いでヴァザーリ(Giorgio Vasari 1511～74)が古典古代のギリシア・ローマ美術との出会いを「再生」と呼び、さらにケラリウス(Christoph Cellarius 1634／38～1707)が西ヨーロッパ史を三分割して以来の歴史を見る時の常道となっている[1]。これと共に闇の中世[2]と光のルネサンスとの対比から、その間には深い断絶があるという通念が派生した。日本でもかつて明治維新当時、政府を筆頭に多くの人士が江戸時代との訣別を説き、今日では 60 年前の敗戦を境に現在の日本はあの時までの日本とは違うと力説する声が高い。

歴史を時代で区切りその間に断絶を見るこのような立場に対して、ドーソン(Christopher Dawson 1889～1970)は中世こそがヨーロッパの創出期であり、近代ヨーロッパ文明の原点であるとして中世復権の形で両時代間の連続性を強調した[3]。明治以降の日本の近代化とその成功にしても、それが江戸時代に多くを負っていることは今日多くの研究者が認めるところである。また研究者ならずとも例えば日本人の霊性が有史以前の昔から高度科学技術の現在に至るまでほとんど無傷のままに息づいていることは、年の初めに神社仏閣を埋め尽くす数百万人もの初詣の群衆、山開きや海開きの際の安全祈願の儀式、ビルの屋上に鎮座する小さな祠など身近なところに看て取れる。反抗期の子供のようにとかく「どんな世代も前の世代を否定する事を好む」[4]が、これに惑わされて連続こそが歴史の属性であることを忘れてはならない。時代区分は歴史を大まかに捉えるための便法に止め措きたい。

イベリアのレコンキスタ（以下、再征服）とアメリカのコンキスタ（以下、征服）とは時間も空間も異なる。にもかかわらず、この二つの出来事がさまざまな点で相通じることはすでに少なからぬ歴史家が指摘してきた[5]。本稿では大西洋を跨いで双方を結ぶ糸の幾本かを手繰って見てみたい。

## 1. 海を越える中世

グラナダの陥落(1492)によって再征服は完了、一般にはこれをもってイベリアの中世は幕を閉じたとされる。事実、新たな時代の息吹きが随所に感じられた。積年の課題から解放されたフェルナンドとイサベルの両王は強い王権の確立を目指し、これを梃子に内政の刷新に取り組んで絶対主義への先鞭を付ける一方、その視野には北はフランドル、東はイタリア、南はアフリカなどイベリアの外が捉えられつつあった。また西の隣国ポルトガルの海外進出が着実に進んでいることへの焦りから、一介の外国人が持ち掛けてきた何とも結果の覚束ない企画に国の未来を賭けた。幸いにも賭けは当たり、両王の眼前に俄かに新たな"アル・アンダルス"が出現した。以後、これの領有と統治は両王の政策の優先課題のひとつとなり、近代スペイン史のエネルギーの多くが西へ振り向けられた。それはしかしまた一旦は終ったかに見えた中世が海を越えて生き続けることを意味した。

大西洋の彼方に姿を現した土地は、スペイン語圏では 18 世紀に入るまで「発見者」コロンの思い込みを引き継いで「インディアス」と呼ばれた[6]。このインディアス史の初めの段階で最も人目を惹くのはメキシコとペルーの征服(1521／1532)だが、軍事征服は所詮は一過性の出来事であり、これだけではインディアスという後の歴史体は恐らく生れ得なかった。征服の果実を定着永続させるには他の行為が必要だった。インディアスの場合、それは都市の建設・行政機構と法の整備・印刷機の導入・大学の創設といった諸制度の移植であり、また法治・宣教・混血・教育といった人間の営為だった。これら一連の行為の所以を求めれば、いずれも再征服を主軸としたイベリア中世を通して培われた伝統・思想・慣習・価値観などに行き着く。

## 2. 征服者の夢

古代の英雄譚か中世の叙事詩を地で行くようなインディアスの軍事征服[7]についてはすでに多くが知られ、ここに繰り返すまでもない。探検と征服にスペイン人を駆り立てた動機の一端が香料や真珠、分けても金銀の獲得にあり[8]、それは征服後はペルーのポトシー(1545)とメキシコのサカテカス(1546)に代表される銀山の開発に引き継がれてスペイン人の一攫千金の夢を掻き立て、インディアス渡航熱を煽り続けた。だが、征服者やその後に続いた移住者の手になる記録や手紙を読むと、金銀の陰でとかく看過ごされがちなもうひとつ別の目標が浮かんでくる。人間である。

イギリス人は無人の地を求めて入植し、先住民が疫病で死ねばこれを天の配慮と悦び、たまたま先住民と出会えば常にこれを排除していった。彼等が先住民に向ける眼は市井の英和辞典にも載っている The only good Indian is a dead Indian の一句に集約されよう。実際、米国史における先住民（近年、英語では native American と呼ばれる）の存在は限りなく小さい[9]。対するスペイン人の姿勢はこれとはまったく正反対だった。彼等は無人の地には価値を見出さなかった。後にイギリス人が入植する北米の東岸一帯はほとんど無人ゆえにスペイン人が放置していた土地に他ならない[10]。

スペイン人が最初に到達したアンティージャ諸島にはたまたま多くの人間が住んでいた。だが、遭遇が惹き起こした生活環境の激変と旧世界から持ち込まれた疫病によってその住民が間もなくほとんど姿を消してしまうと[11]、彼等は同諸島に代わる新たな土地を求めて探検に乗り出し、ユカタン半島と出会った(1517)。その住民はコロンが先に出会った大人までもが丸裸のアンティージャ諸島の住民とは違って、「木綿の上着を着、マスターテと呼ぶ幅の狭い布で恥部を覆い…道理を弁え…石造りのしっかりした建物」に住んでいた。スペイン人は「このような土地が発見できたことを大いに喜んだ」[12]。

同半島を含むメソアメリカとこの後に続くアンデス高原は当時のアメリカの中で最も多くの人口が集中した地帯であると共に[13]、その住民はいずれもスペイン人を驚かせるほどの独自の文明を築き上げていた。現在のイスパノアメリカがメキシコから南米大陸の西半分を占めるのは、スペイン人が無人の地よりも有人の地を、さらに未開人よりも文明人を求めた結果である。こうした選択の背景には文明人が居る所には金銀があるとの予想と並んで再征服時代からの伝統も無縁ではなかった。

グラナダ戦争が終った頃のスペイン人にとって理想的な人間像は騎乗の人間(caballero)であり[14]、追求すべきは周囲から一目置かれ、多くの人間を配下に従え、その労働の果実に依存し、自らは労働することなく日々を送る身分だった。すなわち、それは領地を持ち、これを耕す領民に号令する中世封建領主の暮らしだった。だが、グラナダ以後のイベリアにはもはやこのような夢を追い求める場は残されていなかった。そこへたまたま現れたのがインディアスとその先住民だった。スペイン人の眼に映るインディアスは800年に及ぶイスラム教徒との戦いへの挺身と努力に対する神からの報酬と受け止められた。一ヶ月以上もの長い航海に伴う多くの危険もインディアスの誘惑には抗し切れなかった[15]。いつかは自分も「家来持ちの身分 señor de los

vasallos」[16]になったと誇らしげに故国の親戚に書き送れる日のくることを期待して年平均4000人がセビージャから船出していった[17]。

彼等の夢の実現は偏にラス・カーサス神父が「悪魔が発案した病魔 pestilencia inventada por el diablo」と呼んで糾弾して以来、インディアス史の中で悪名だけが先走りしている感のあるエンコミエンダ[18]を手に入れられるか否かに掛かっていた。だが、これの取得は容易ではなかったし、また運よくエンコメンデーロにおさまった後もその地位は決して安泰ではなかった。王権は当初スペイン人のインディアス定住を進めるために止むを得ずエンコミエンダを認可したものの、これが監視の眼の届き難い海の彼方で新たな封建勢力の温床と化すことに神経を尖らし、廃止の機会を絶えず窺っていたからである[19]。それに何にもまして先に触れた肝心の先住民人口の激減がエンコミエンダの存続を脅かした。エンコミエンダは土地とこれを活かす労働力となる人間が一体となって初めて価値を生む制度である。労働を提供する人間を欠けばエンコミエンダはその存在意義を失った。

かつて再征服の過程でイベリア北部から充分な数の入植者の補給を期待できなかったキリスト教スペインの為政者は、占領地の無人化を防ぐために「二宗教の皇帝」[20]を自称してイスラム教徒を懐柔、その残留に意を用いた。その結果、キリスト教徒の支配下で暮らすイスラム教徒ムデーハルが生れた。インディアスで人間が住む土地を求め、征服後はエンコミエンダに執着したスペイン人の脳裏にはこのムデーハル、そしてもっと身近にはグラナダ陥落の後もスペインに残留してキリスト教徒貴族の生活を支えたイスラム教からの改宗者モリスコ[21]の姿が刷り込まれていたに違いない。だが、そのような過去の記憶を持つ彼等の不運はインディアスの先住民がムデーハルにもモリスコにもなり得なかったところにある。

### 3. 都市化

「汝(ローマ)は己の都市を世界に広げた urbem fecisti quod orbis erat」。都市らしきものがなかった西ヨーロッパに多くの都市を建てて文明化したローマの偉績を称えて五世紀にこのような一句が記された。都市の建設、つまり都市化はともすれば見落とされがちな征服のもうひとつの顔だった。無論、征服以前のインディアスが都市とは無縁だったと言うわけではない。テノチティトランやクスコの景観がスペイン人を驚嘆させるに足るものだったことは、彼等自身の手で記録されている。だが、インディアスの広さから見れば

都市は限られた地域の現象に止まっていたし、また大規模な神殿を中心としたその構造はスペイン人がそのまま自分達の居住空間として受け継ぐのには不向きだった[22]。よって、征服戦ですでに大きな破壊を蒙ったテノチティトランは征服後さらに大幅に改造されて形を変える一方、峻嶮なアンデス山脈によって沿岸部から隔絶されたクスコは外部との連絡と補給の利便上の理由からカジャオという良港を近くに控えた新設のリマに新しい首都の座を譲った[23]。

教皇庁からインディアスの領有権を認められた王権と新世界で封建領主への夢を追う移住者の双方にとって、最優先の関心事は当然ながら土地の占有と確保だった。インディアスに他のヨーロッパ人の手が延びることを警戒する王権が移住者を速やかに定住させて彼等に領土防衛の任を託す思惑を抱けば、数の上では先住民に対してまったくの劣勢に立つスペイン人にとってもまた征服の果実を守り抜くには定住する以外になかった[24]。双方の利害が一致する定住の実現には都市の建設が唯一の策だった。

定住の前提となる都市建設への動きは早くも「発見」の翌年に始まった。わずか三隻の船と乗組民が120名前後だった第一次航海とは打って変わって、コロンの第二次航海(1493)は、船数は一七隻、これに家畜・作物の種子・農具を携えて乗り込んだ移住者は1200～1500人という大規模な編成だった。彼等には土地を耕し、町を建てて最初の定住者となる期待が掛けられていた。この期待は完全に裏切られはしたが[25]、都市の建設そのものは放棄されなかった。サント・ドミンゴ(1496)[26]を皮切りに16世紀の前半だけでもインディアスの全域を覆うように40を算える都市が次々と創設されていった。サン・フアン・デ・プエルト・リコ(1508)[27]、サンティアゴ・デ・クーバ(1515)、ハバナ(1519)、パナマ(1519)、ベラクルース(1519)、グアテマラ(1524)、プエブラ(1531)[28]、グアダラハーラ(1531)、カルタヘーナ(1532)、キート(1534)、リマ(1535)、ブエノスアイレス(1536)[29]、ポパジャン(1537)、バルパライーソ(1536)、アスンシオン(1537)、ラプラタ(1538)[30]、サンタフェ・デ・ボゴタ(1538)、サンティアゴ・デ・チーレ(1541)、ラパス(1548)など今に続く都市の多くもこの時期に誕生した。これらの都市は単なる物理的な存在に止まらなかった。その内側には一定の権利を持つ市民(vecino)と彼等が参加する市会(cabildo)を核とした中世カスティージャの自治都市の伝統が受け継がれ、周辺一帯の支配と防衛の任を負った[31]。

このような都市の建設の背後には、上に述べた征服者と移住者を定住させ

てインディアスの領有と防衛に当らせるという差し迫った理由の他に、ローマ人によるイベリアを含む西ヨーロッパの都市化と再征服に附随した再入植(repoblación)という二つの歴史上の先行例があった。本項の冒頭に引用した一句にあるように、かつてローマ人は都市らしきものがなかった西ヨーロッパに「飽くなき建設欲 infinita cupiditas aedificandi」という辞句を生んだほど多くの都市を建設し、これらをローマへ通じる街道網で結ぶことによって属州のローマ化を確かなものとした。以来、イベリアを含む地中海世界では都市は政治と経済の中枢に止まらず、文明の担い手となった。都市の内と外は峻別され、都市にあって人間は初めて文明の恩恵に与り、文明化した。インディアスの都市化にはまさに 1500 年も前のこのような前例が発する力に衝き動かされた感がある。一方、再征服の裏面とも呼ぶべき再入植とは、イスラム教徒から奪回した土地にキリスト教徒が定着し、既存の都市があればこれの新たな住民となり、なければ新設して自分達の生活の場を築く行為だった。今日、スペインの地図に残る少なからぬ Villafranca[32]や Villanueva はこうして誕生した。再征服された土地がその後のイスラム教徒の新たな攻撃に耐えて守り抜かれたのは、偏に再入植という地に根を張る営みがあってのことだった。

征服に伴う混乱がひとまず収拾されると、行政司法機関アウディエンシア(Audiencia)[33]・司教座聖堂・修道院・病院・時には大学を含む教育施設などが置かれて都市は新しい文化の揺籃となって発展し、インディアスの様相を変えていった。碁盤の目状に走るまっすぐな街路、方形に区切られた居住区、公的行事の舞台や市民生活の核となる中央広場、これを囲んで立ち並ぶルネサンス様式の政庁やバロック様式の教会堂、石畳の車道とこれから区別された歩道。この構図は都市の大小を問わず、インディアスの随所で繰り返された。ギリシア・ローマの古典古代の美意識を範としたその町並みの明快な構造は、スペインの都市に今も残る狭い道路が迷路のように入り組んだ旧市街とは対照的なまでに異なっていた。『インディアス法典 *Leyes de Indias*』の文言を借りて言うならば、それは「先住民を感嘆させ」、ヨーロッパ文明の優位を誇示する展示場でもあった。今なお域外から訪れる者を少なからず感嘆させずにはおかないインディアスの都市の外観に比べれば、時には madre patria と呼ばれるスペインの町の佇まいは総じて如何にもみすぼらしかった。時代が下がって独立前後にスペインを訪れたクリオージョは、自分達の生地とのこの違いをスペインの後進性の証しと受け止めたと言われるのもあなが

ち不思議ではない。

13 世紀から 14 世紀にかけてユーラシアを席捲したモンゴル人の征服は街道の安全をもって東西交易を実現したが、遊牧民の常として都市への関心を欠いていた。その結果、俗に「風の帝国」と呼ばれる彼等の帝国は、世界地図に文明圏の変更をもたらすことなく通り過ぎていった。対照的にインディアスは、かつてイベリアが都市を介してローマ化されて地中海文明圏の構成員となったと同じように、都市とそこに根付いて時の経過と共に周辺を感化していったスペイン文化を通してヨーロッパ文明圏に組み入れられた[34]。

## 4. 政治征服

インディアスは軍事征服に続いてもうひとつの征服の舞台となった。政治征服である。この用語はまだ馴染みが薄いが、コロンの報告を受けたカトリック両王が矢継ぎ早やに進めた対応とその後の三世紀に及んだスペイン王権の一貫したインディアス統治はこれを政治征服と呼ぶのに値しよう。

ローマ教皇から逸早く新しい土地に関する領有権の授与(1493)を取り付けたカトリック両王は次いでポルトガルとトルデシージャス条約を締結(1494)してインディアス支配の外枠を固め、さらにセビージャに商務館(Casa de Contratación)を設立(1503)してインディアス政策を王権の管轄下に一元化した。その後、インディアス側にこれに対応する機関として最初のアウディエンシアがサント・ドミンゴ市に設けられ(1511)、その数はインディアスのその後の拡大に伴って増加、最後にはマニラを含めて 14 を算えた。ハプスブルク時代に入ると、インディアスの膨張と重要性の高まりに応えてインディアス諮問院(Consejo de Indias )が創設(1524)され、大西洋の対岸にはアウディエンシアを統括する上位機関として副王制(virreinato)が導入されてヌエバ・エスパーニャ副王領(1535)とペルー副王領(1542)が発足した。こうして「発見」からわずか半世紀間で整えられたインディアスの行政機構は、各地の多様な特殊事情を勘案しつつ適用されたカスティージャ法に則して独立戦争の勃発まで維持され機能した[35]。これら一連の措置はインディアスがイタリアやフランドルなどスペイン王権下の他の地域と同列に位置付けられたこと、また法的にはカスティージャと同等と見なされたことの二点を意味した。その結果、例えば先住民は王権の「自由な臣下 vasallos libres」であり、これの奴隷化は禁止された(1499)[36]。換言すれば、インディアスは後の 19 世紀流の植民地ではなく、海を越えて拡大したカスティージャだった[37]。

インディアス統治は王権の下に一元化され、これを官僚機構が支えた。この体制は外から見る限りは絶対主義を志向する新しい時代に則していた。だが、外観[38]とは裏腹にその中味となる統治の理念と目標は中世を色濃く残していた。中でも際立つのが宗教の優位、すなわち、先住民への宣教とその教化である。これはローマ教皇庁が領有権の授与に付けた条件であり、視点を変えれば教皇庁に対する王権側の約束であったが、同時に他のヨーロッパ諸国に対してスペインのインディアス領有を正当化するための唯一の論拠でもあった[39]。領有と統治は領土の開発を含意したが、これは先住民の保護・教化と両輪を成す形で進められなければならなかった。開発と宣教、この二つを両立させる難しさは人類が今日直面している開発と環境保護の関係を思えば容易に察せられる。

インディアス政策が当初から内蔵したこのディレンマは「発見」から間もなく先住民人口の急激な減少となって表面化した。アンティージャ諸島の先住民は「発見」の数十年でほとんど姿を消し、大陸部も似たような事態に見舞われた。最近の研究では死者は全体で「発見」当初の人口の75%に上ったとされる[40]。こうした事態は修道士達の注目を呼び、やがてラス・カーサス神父はこれを「インディアスの破壊」[41]と呼んで激烈な言葉で告発、いわゆる「インディアス論争　disputa indiana」の口火を切った。この告発を真摯に受け止めたカルロス1世は当時一流の頭脳を召集してバジャドリード会議(1550～51)を開いて問題の解決を目指したが、議論は白熱しても有効な策は見出せなかった[42]。王権は無論これ以前から宣教と先住民の保護を定める王令を繰り返したが、その意向はそうそうインディアスの現場で実行に移されなかった[43]。この辺の事情を伝えるのが「尊重すれど、守られず Se obedece, pero no se cumple」という周知の一句だが、これをもってインディアス法は死文であり、インディアス史は無法の300年であったとするのは軽率というものであろう[44]。300年もの無法に耐える社会は果たしてあるのかという素朴な疑問が湧く。インディアスはそれなりに法治社会であったと考える方が理に叶っていよう。ともあれ、先住民の保護と改宗を最優先する初期の姿勢は、時代に合わなくなったハプスブルク体制に代わる新体制を志向し、インディアスをそれまでの reinos[45]に代わって colonias[46]と呼び始めたブルボン王朝の下でも変わらなかった[47]。むしろ法規の一層の遵守への努力が払われた。

西ヨーロッパではマキアヴェッリ(Niccolò Machiavelli 1469～1527)が政

治と倫理を分離して政治に国是(razón de Estado)を唯一の指針とする独自の道を提示する一方、長引く宗教戦争でキリスト教が著しく威信を低下させるとヨーロッパ文明はその庇護を離れて世俗化の道を辿り、信仰は公的な場を追われて個人の領域に押し込められた。こうした趨勢の中にあってマキアヴェッリがその『君主論』[48]の中で讃辞を惜しまなかったフェルナンドとその後継者の政策では彼が提唱する政治と倫理の分離は起こらず、キリスト教は依然として重きをなし続けた。前述のバジャドリード会議はこれの具体的な現れのひとつだった。

スペインは新しい政治の在り方を唱えるマキアヴェッリを受け入れなかった。「黄金の世紀」を通じてスペイン政治とキリスト教は良きにつけ悪しきにつけ不可分に結び付き、その間の境界線は限りなく不明瞭だった。王権が教会保護制度(Patronato Real)によって教会を自らの管轄下に置けば、教会は倫理を楯に政治のあらゆる面に介入し、分けても修道士の批判には遠慮がなかった[49]。半ば現代の国際基準とされる政教分離に逆行する政治と宗教が複雑に絡み合った 16～17 世紀スペイン、スペイン史ではこの状況をEstado–Iglesia[50]と呼ぶが、その原型を求めればこれまたサンティアゴ信仰に支えられた再征服期のキリスト教スペインにまで遡る。

### 5. 魂の征服

宣教はキリスト自身の言葉[51]によって教会が負わされた終りなき任務であると同時にヨーロッパ史を他に類のないダイナミックな歴史に仕立てた[52]。ローマ帝国、ゲルマン人、そしてスラヴ人の改宗を経てヨーロッパの宗教となったキリスト教はインディアスの宣教で一気に世界宗教の地位に登り詰めた[53]。三つの先行例と比べる時、インディアスのキリスト教化はその規模で他を凌ぎ、征服と統治を正当化する唯一の論拠を具体化して世俗権力を援け、その熱狂において軍事征服と肩を並べた。それはリカール(Robert Ricard 1900～1984)の著書 *Conquête spirituelle du Mexique* (1933)以来、宣教や布教といった従来の用語に取って代わったかに見える「魂の征服 conquista espiritual」の名に相応しく、軍事征服と政治征服に続く第三の征服だった[54]。

「発見」に先立つ幾世紀もの間、キリスト教世界はユーラシアの西の一角を占める弱小な存在に過ぎなかった。7 世紀後半に始まったイスラムの膨張は東ローマ帝国からアフリカや小アジアなど広大な領土を奪い、西方ではイ

ベリア半島を制圧してキリスト教世界を地中海から引き離して内陸部に封じ込めた。数世紀後、この封鎖は十字軍(1096～1270)によって衝き崩された。だが、その逸脱と暴走は東ローマ帝国を衰退させ、最後は十字軍そのものが失敗に終ったのみならず、オスマン朝トルコの台頭という負の結果を招いた。このイスラムの新たな覇者の逆襲は凄まじくコンスタンティノープルを攻略(1453)、モハッチの合戦でハンガリアを降し(1526)、遂にはウイーンの城外に迫って(1529)ヨーロッパを震撼とさせた。他方、中世を支える柱である教会は 14 世期中葉に西ヨーロッパを襲ったペストに起因する社会変動の最中に「アヴィニョン幽囚」(1309～77)と「西方教会の大分裂」(1378～1417)という連続して一世紀以上にわたる醜態を演じ、内部からの激しい批判の声に揺さぶられていた。このような時に相次いでもたらされたグラナダの開城とアメリカの「発見」の朗報は西ヨーロッパを覆っていた暗雲を吹き払う解放の光だった。西ヨーロッパは安堵し、自信を取り戻した。インディアスの宣教はこのヨーロッパの立ち直りを追風として始まった。その第一歩は先に第三項で触れたコロンの第二次航海のために王権が作成した指導書に次のように書き記された。「彼地の住民は何等の宗教も持たないがゆえに容易に我等の聖なるカトリックの信仰に帰依すると見えたとのことを両陛下は悦ばれ…よって両陛下は我等の聖なるカトリックの信仰が広められるようにとの願いから…信仰篤きブイル修道士を他の修道士と共に派遣される」[55]。

「発見」による反応はこれだけに止まらなかった。そもそも「発見」に先立ってコロンの企画に新たな宣教の可能性を素早く読み取って積極的に王権との仲介役を買って出たのはフランシスコ会士だった。エラスムスの『愚神礼讃 *Laus stultitiae*』(1509)では規律の乱れと無知を痛烈に揶揄非難された修道会だが、その内部ではすでに改革がヨーロッパの各地で相応の成果を上げて多くの修道士が本来のあるべき姿を取り戻していた。だからこそ征服の途上にあったコルテースは先住民の改宗を念頭に逸早く繰り返しカルロス 1 世に修道士の派遣を要請したし、間もなくインディアスの地を踏む修道士の中にフランドル人やフランス人もいたのである。

魂の征服の初期の段階で主役を務めたのは 13 世紀に創立されたフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティヌス会の三大修道会で、これに 16 世紀の後半からイエズス会が加わった。彼等魂の征服者も軍事征服者に劣らず冒険家であり理想を追う人達だった。違いは彼等がインディアスの言葉は無論、その社会・宗教・文化などについての一切の予備知識も持たない、無防備の

征服者だったことだった。彼等の唯一の武器は宣教に懸ける情熱だった。中でもフランシスコ会士は 12 世紀の神秘思想家ジョアッキーノ・ダ・フィオーレ(Gioacchino da Fiore c.1132～1202)の歴史観に基づく終末論から間近に迫った世界の終りまでに全人類の改宗を達成しなければならないという切迫した思いに衝き動かされ[56]、イエズス会士はプロテスタント革命によってカトリック教会がヨーロッパで失ったものをインディアスで取り戻そうという使命感に燃えていた。さらにトマス・モアが「発見」に触発されて『ユートピア』を構想したと同じく、すべての修道会がインディアスに世俗の利害と結び付く以前の、またヨーロッパの諸悪とは無縁の原始キリスト教社会を再現する理想を共有していた[57]。

宣教はともすれば教会の独占領域のように見られがちだが、インディアスでは必ずしもそうではなかった。コロンの航海日誌に見られるように、宣教は広く社会全般に共有された関心事だった[58]。元よりインディアスの現場にあっては世俗の富と名誉を目指す軍事征服者と先住民の保護と改宗を最優先する修道士との間ではしばしば利害が対立し、衝突が繰り返された。それでも軍事征服者もまた時代の子である以上、当時のスペイン社会を覆っていた強烈な宗教感情とまったく無縁ではあり得なかった。殊更に宣教を意識せずとも自分達の戦いが神の義に叶うものであり、それゆえ自分達は神の加護の下にいて、勝利はすべて神の御業と受け止めた[59]。さらには神父がいなければ代わって説教をするなど[60]、彼等は宣教の一端を担っているという意識さえ持っていた。コルテースの部下だったディーアス・デル・カスティージョの次の言葉はこうした彼等の心性の率直な表明である。「我々真の征服者は・・・確かに皆等しく富を求めてこの国へ渡ってきた」。「それは神と陛下とにお仕えし、いまだ神を知らずに闇の中をさ迷う者にキリストの光をもたらすためだった」。そしてこのような「我々こそは修道士方を含む誰よりも先にこの国の住民を発見して、彼等を征服し、その偶像を打ち砕いて代わりに聖なる教えを説き聞かせた」[61]のであると、メキシコの征服後はグアテマラに落ち着いたこの老兵は言い切る。彼にとって「真の征服者 verdaderos conquistadores」とは聖俗兼備の条件を満たす者だった。

そもそも征服者の一隊には必ず聖職者の姿があったし[62]、士気が低下すれば指揮者は神の正義に訴えることで部下を励まし結束を固め、合戦の前には死に備えて告解の秘蹟を受けてミサに与り、戦場にあっては再征服期以来の鬨の声である¡Santiago!を合図に敵に切り込んだ。そして征服後、都市を建

てるに際しては天の加護を願って聖母や聖人の名を付けた[63]。また目指す富を手にした後で一切を捨てて修道生活に入る者さえいた[64]。前項で触れた国家レヴェルでの政治と宗教の不可分な結び付きはこうしてそのまま個人の内面にも移行し、聖と俗のどちらが優先するとは決め難い形で両者は表裏一体を成していた。

## おわりに

以上、征服者の夢・都市化・政治征服・魂の征服の四面からイベリアの再征服とインディアスの征服とを結ぶ糸を略述した。いずれも往時のインディアス、そして今日のイスパノアメリカを知ろうとする者に有益な示唆を少なからず与えてくれる。

歴史の前後を結ぶ糸と同時に、「創造主(キリスト)の誕生とその死を除いて、天地創造以来最大の出来事」[65]であると評されたアメリカの「発見」には明らかに新時代の開幕というもうひとつの側面がある。聖書とアリストテレスの説く地球像の崩壊、数々の航海の実績から導き出された経験主義の勝利、イスラム教徒以外の異教徒の存在、ヨーロッパの相対化、人類の一元性と人類文化の多様性、戦争の勝敗などに左右されない人間の権利と尊厳。いずれも近代を特徴付けるこれらの価値はすべて「発見」の所産であり、よって「発見」を近代の起点とすることができよう。ただこの近代の開幕をその一方では中世との断絶と見るか、それとも超克と見るかという別の問題がある。これについて一言述べたい。

カルロス1世の登場と時を同じくしたルターの抗議運動に端を発した宗教革命[66]を経て西ヨーロッパはカトリック・ヨーロッパとプロテスタント・ヨーロッパに分裂した。この情勢の中でスペインは前者の側に立ち、その先兵となって戦った。彼等の士気を長期にわたって支えたのは中世との訣別(ruptura)ではなく、超克(superación)の信念だった。それは国民主権国家という新時代の国家形態を受け入れる一方で、共通の信仰による精神的な統合という中世以来のヨーロッパの在り方を守ろうとする熱い思いだった。これに対してピレネー以北のヨーロッパは中世に背を向けようとしていた。確かに北にとって十字軍に失敗し、統合の要である教会の大分裂という醜態を招いた中世は守るに足る価値を欠いていた。一方、再征服の最後をグラナダ奪回の勝利で飾ったスペイン人の中世は逆に守り続けるに値するものだった。この違いがピレネーの南北を分け隔てた。

16 世紀の初頭からウェストファリア条約(1648)までの 150 余年に及んだ宗教戦争でスペインが敗れると、その後は精神的な統合を捨て、マキアヴェッリの教説を受け入れ、力の均衡(balance of power)の原則に立つ近代ヨーロッパが世界史の先頭に立った[67]。しかし、それは世界中を舞台にしたヨーロッパ人同士の果てしない戦争の歴史であり、その挙句の果てにヨーロッパは自らが 20 世紀の二度の大戦の戦場と化してそれまでの優位の座を失った。すでに予言されていたこの没落[68]を前にした時、国民国家をひたすら信奉してきたそれまでの誤りと 350 年前に捨てた価値の大きさに気付いたヨーロッパはようやく域内の戦争を放棄し、あれほど固執した国家主権までもその相当部分を互いに削除してヨーロッパ連合(EU)の道を選択した。そしてこれを最も深い次元で支える価値を共通の精神的伝統に求めた[69]。幸いにヨーロッパにはこの求めに応じるものがその歴史の中にあった。

精神的な価値を礎石とするヨーロッパの統合(integración)――それは決して統一(uniformidad)ではない――、EU の最終目標。その原型は今から 500 年近くも前の 1536 年 4 月 17 日、カルロス 1 世がローマ教皇パウロ 3 世の前で行なった有名な演説にすでに言い尽くされている[70]。生来の騎士道精神とスペインに残る再征服の余韻の相乗作用によってスペイン化したカルロス 1 世は中世の超克をもって近代の挑戦に立ち向かった。この中世ヨーロッパ最後の皇帝とそのスペインが目指したヨーロッパの統合図と今日 EU が達成しようとしているそれとを並置する時、この二つはその原理において容易に重なる。国民国家という在り方の限界を知った現代ヨーロッパが描く未来図は、どうやら往時カルロス 1 世の描いたそれを追いつつあるかに見える。

かつてメネンデス・ピダール(Ramón Menéndez Pidal 1869～1968)は「黄金の世紀」のスペインの文芸と思想の特性を語るに際して、中世とルネサンスとの関係を巡って対峙する断絶説と継続説とを融合させる形で「中世の晩果 fruto tardío de la Edad Media」という有名な解釈を提唱した[71]。近代にずれ込んだ中世とも言い換えることもできよう。ヨーロッパの皇帝としての使命感からヨーロッパの統合を目指したカルロス 1 世とこれの達成に国力を傾けた「黄金の世紀」のスペインの努力は時期尚早ゆえに実るには至らなかった。それは一見、時代に乗り遅れたかに見えて、その実、時代の先を行き過ぎていた。これをもうひとつの「中世の晩果」と見なすことは飛躍に過ぎようか。

[1] 日本史では古代・中世・近世（江戸時代）・近代（明治以降）の四分割が通例となっている。

[2] ケラリウスは「中世 medium aevum」の命名者とも言われる。

[3] ドーソン、クリストファー：『中世のキリスト教と文化』、新泉社、1969、pp. 19－21.

[4] ブローデル、フェルナン：『文明の文法』、1巻、みすず書房、1995、p. 56.

[5] DURAND, José: *La transformación social del conquistador.* México, 1953, p. 23. TOVAR, Antonio: *Lo medieval en la conquista y otros ensayos.* Madrid, 1981, pp.13－25. SÁNCHEZ ALBORNOZ, Claudio: *La Edad Media española y la empresa de América.* Madrid, 1983.

[6] コロンは『航海誌』の10月11日付けで先住民を「インディオ」と呼び、17日付けで「このインディアスへ到着以来・・・」と書いた。

[7] 征服者は自分達をしばしば古代の英雄や騎士道物語の主人公になぞらえた。ディーアス・デル・カスティージョ、『メキシコ征服記』、岩波書店、1986－87、126章、212章。

[8] 「自分は金を獲りにきた」と言うコルテースやピサーロの証言(HANKE, Lewis: *La lucha española por la justicia en la conquista de América.* Madrid, 1959, pp.25／128)がある一方、イギリスの歴史家エリオットは金銀への渇望よりも「ルネサンス人の好奇心・蘇生した十字軍精神・台頭しつつあった西ヨーロッパ近代国家間の競争心」の三点に重きを置いている。 ELLIOTT. J.H.: "Europa y América en la época moderna" en: *La incorporación de las Indias al mundo occidental en el siglo XVI.* Granada, 2000, pp. 25－28.

[9] 例えば、猿谷要の『検証アメリカ500年の物語』、平凡社、2004、『現代のアメリカ』、大修館、2004を参照。双方の「アメリカ」が「米国」であることは断るまでもない。

[10] イギリス人やフランス人の関心は通商にあり、17世紀に入るまで彼等は土地の占拠には関心を持たなかった。因みに、それぞれの最初の定住地はジェームスタウン(1607)とケベック(1608)だった。

[11] CHAUNU, Pierre: *L'Espagne de Charles Quint.* Paris, 1973, vol.2, p. 415.

[12] ディーアス・デル・カスティージョ、前掲書、2章。

[13] SUNDEL, Alfred: *A History of the Aztecs and the Mayas.* New York, 1967, pp. 10－11.

[14] 中世にあって馬は富と権力の象徴だった。なお、理想的な男性像を表す単語が英語では中世の knight から近代の gentleman へ、仏語でも chevalier から gentilhomme へ移行したのに対して、西語では gentilhomme を模倣した gentilhombre は語意が特化して caballero に取って代わらなかったのは、ピレネーの南と北で中世が持つ重みの違いを示唆して興味深い。

[15] カルロス1世の治世の一時期を除いて王権は外国人・ユダヤ教徒・イスラム教徒・犯罪人・異端者・売春婦などのインディアスへの侵入ないしは逃亡を防ぐために渡航を許可制としたが、元より密航者は防ぎ切れるものではなかった。

[16] OTTE, Enrique: *Cartas privadas de emigrantes a Indias 1540－1616.* México, 1993, p. 360.

[17] ELLIOTT, J.H.: *España y su mundo 1500－1700.* Madrid, 1989, p. 32. なお、渡航者の年平均数に付いては異説がある：BENNASSAR, Bartolomé: *La América española y la América portuguesa. Siglos XVI－XVIII.* Madrid, 1980, p.192; DOMÍNGUEZ ORTIZ, Antonio: *España, tres milenios de Historia.* Madrid, 2001, p. 188.

[18] 当初 repartimiento de indios encomienda と呼ばれたエンコミエンダはコロンが王権の許可なしに最初に実施(1499)、王権はこれを一旦廃止(1502)したものの、ニコラース・デ・オバンドの現地からの要望を受けて認可した(1503)。ラス・カーサス神父がエンコミエンダをインディアスの諸悪の元凶として指弾して廃止を王権に迫ったことは周知の通りだが、その是非と功罪を巡っては修道士を含む当時

の当事者の間にも、また今日の研究者の間にもさまざまな見解がある。

19 ラス・カーサス神父などの努力によってエンコミエンダの事実上の廃止を定めた「新法令 Leyes Nuevas」(1542)がペルーで激しい反乱を惹き起こして撤回(1545)を余儀なくされた後も廃止に向けた王権の姿勢は変わらず、課税の対象(1687)、新設禁止 (1717)、次いで相続人がない場合は王室への返還が決まった(1718)。なお、法律上の推移とは別にエンコミエンダの実態は地域差が大きく、例えばヌエバ・エスパーニャでは 16 世紀末にすでに意味を失った。

20 旧都トレードを奪回したカスティージャ王アルフォンソ 6 世 (在位 1065～1109) は「二宗教の皇帝」を称し、再征服をコルドバやセビージャにまで進めたフェルナンド 3 世 (在位 1217～52) は「三宗教の王」を称した。MENÉNDEZ PIDAL, Ramón: *La España del Cid.* Madrid, 1956, p. 321, p. 632.

21 イスラム教徒が 1502 年にカスティージャから、次いで 1525 年にアラゴン連合王国から追放されたのに対して、モリスコの追放は 1609 年でその数は約 30 万人とされる。モリスコの追放が 17 世紀にまでずれ込んだ理由のひとつは、農民だった彼等の労働に依存する貴族の反対だった。

22 先スペイン期のアメリカの都市が研究者の間で「祭祀センター」と呼ばれることからもその性格・機能・形態が推測される。

23 数の上でスペイン人をはるかに上廻る先住民に対する警戒心も理由のひとつだった。

24 征服後に予想される反乱に対しては、定住して都市を防衛拠点とするのが最善の策と考えられた。これを反映して初期の教会堂は砦の様相を備えた。

25 エスパニョーラ島に着いた一行は最初の都市イサベーラを建てたものの間もなく食糧不足に悩まされ、慣れない気候のために病人が続出した。加えて行政官の資質を欠くコロンはもっぱら金探しにかまけて事態を混乱させ、人望を失った。

26 前註のイサベーラは立地条件が悪く放棄された。

27 Caparra の名で創設(1508)、後に王令で Puerto Rico に改名、1521 年に現在の位置に移って現在の名称になった。

28 メキシコ市とベラクルースを結ぶ街道のほぼ中間に位置する要衝に Puebla de los Ángeles の名でスペイン人がヌエバ・エスパーニャに建てた最初の都市。MOTOLINÍA: *Memoriales. Libros de las cosas de la Nueva España y de los naturales de ella.* México. 1971, pp. 263－264 に建設時の記述がある。

29 Santa María de los Buenos Ayres の名でなされた最初の創設は先住民によって破壊されて失敗、1580 年に再建された。

30 Chuquisaca、Charcas とも呼ばれた。現在の Sucre は 1839 年以降の名称。

31 カビルドは後にクリオージョ勢力の拠点として独立戦争の口火を切った。

32 Villafranca は王権が入植と定住の推進策として一定期間租税を「免除した村」。

33 アウディエンシアはスペインでは国王臨席の最高裁判所だったが、インディアスでは行政機関をも兼ねた。

34 『文明の衝突』の著者ハンティントンはイスパノアメリカをヨーロッパ文明圏の構成員とは認めない。『文明の衝突』、集英社、1998、pp.60－61.

35 スペイン統治時代の法令は『インディアス法典 *Leyes de Indias*』として編集されて 1681 年に刊行された。

36 周知のように、先住民の法的な位置付けと実際に彼等が置かれた状況の間には大きな隔たりがあった。この点については 19 世紀初めに書かれた JUAN, Jorge ／ ULLOA, Antonio de: *Noticias secretas de América.* Argentina, 1953 が貴重な第一次史料となる。

37 この点については LEVENE, Ricardo: *Las Indias no eran colonias.* Buenos Aires, 1951 を参照。『インディアス法典』では reinos de Castilla と reinos de Indias が共にひとつの王権の下にあるとされ、またフェリーペ 2 世はスペインとインディアスを並置して Hispaniarum et Indiarum rex と称した(DOMÍNGUEZ ORTIZ,

op.cit., p. 186)。註 45 を参照。

38 実際はアウディエンシア・諮問院・副王制は新設の制度ではなく、いずれもすでに中世に存在していた。

39 ただし、この論拠は「インディアス論争」の過程で否定された。つまり、スペインはインディアス領有を正当化する当初の論拠を自らの手で葬り去ったのである。

40 VALDEÓN, Julio et al.: *Historia de España*. Madrid, 2003, p. 215.

41 ラス・カーサスの主張はその著作の中で最も有名な『インディアスの破壊に付いての簡潔な報告』、岩波書店、1976 で陳述されている。なお、同書は通常、*La brevísima* と略称される。

42 バジャドリード会議に関してはハンケ、ルイス:『アリストテレスとアメリカ・インディアン』、岩波新書、No.889、1974 に詳しい。

43 すでに 16 世紀後半には「インディアスにいるスペイン人に法令を発するのは野に戸を立てるに等しい」(MENDIETA, Gerónimo de: *Historia eclesiástica indiana*. México, 1971, p. 527)と法令の不履行を嘆く声があった。

44 マドリードで作られる法令と広大な現地の実情との間には自ずから避け難い開きがあり、法令の内容をそのまま実施することはできない場合が多かった。王権も予めこれを見越して副王に修正または実施保留の権限を与えていた。従って、法令は原文通りではなく、妥協の産物として施行されたと見ることができよう。なお、こうした状況を汚職の横行と同一視してはならないだろう。法令の不履行と汚職は次元を異にする。

45 インディアスは再征服期以来の伝統に従って当初から reinos de Indias と呼ばれた。この呼称はインディアスがイベリアの reinos と同等であることを意味すると同時に(註 37 を参照)、いわゆるスペイン帝国が王権の下に統合された諸王国から成る連合体であることを表した。因みに、reinos の他にも dominios ／ provincias ／ repúblicas が使われた(LEVENE, op.cit., p. 85)。

46 ハプスブルク期の 6377 の法令を集めた『インディアス法典』での唯一の使用例は「住民」を指し (LEVENE, op.cit., p.50, n.1)、また 1789 年の王令では「入植地」を意味する (LEVENE, op.cit., pp.86－87)。

47 インディアス関連の立法はブルボン期に入ってからも続いた。また『インディアス法典』の最後となる第五版は 1841 年に刊行された。

48 『君主論』の 21 章を参照。

49 遠慮のない批判の一例にフランシスコ会士メンディエタがフェリーペ 2 世に宛てた書簡がある。*Nueva colección de documentos para la historia de México. Cartas de religiosos de Nueva España*. México, 1941, pp. 31－45. なお、これの拙訳は 『上智大学外国語学部紀要』、1977、pp. 207－227 に掲載。

50 参考までに定義の一例を紹介する：una organización política que se enfeuda a la finalidad trascendente de la Iglesia y que trata de combinar sus facultades de orden humano con la misión religiosa(ZAVALA, Silvio: *Ensayos sobre la colonización española en América*. México, 1972, p. 41)。

51 マタイによる福音書、28 章、19－20 節とマルコによる福音書、16 章、15－18 節を参照。

52 註 8 を参照。

53 16 世紀のインディアスは 17 世紀に約 2 倍に拡大、18 世紀にはさらにその 2 倍に広がった(DOMÍNGUEZ. ORTIZ, op. cit., p. 187)。因みに、フェリーペ 2 世時代の実効支配圏は 250 万平方キロだった(BAUDOT, Georges: *La vida cotidiana en la América española en tiempos de Felipe II. Siglo XVI*. México, 1983, p. 47)。

54 「魂の征服」という表現は MENDIETA, op.cit. p.186 に espiritual conquista の語順で見出せる。

55 KONETZKE, Richard: *Colección de documentos para la historia de la formación social de Hispanoamérica 1493－1810*. 1953－62, vol. 1, pp. 1－2.

56 「Los Doce」の名で知られる最初のフランシスコ会公式宣教団に向けられた上長の言葉に「すでに世界の終りが近いいま…」とある(MENDIETA, op.cit. p. 204)。

57 最も有名かつ成功した例はパラグアイを中心とした地域でイエズス会士が16世紀末から同会士の追放(1767)まで展開した reducción の名で知られる教化村事業だが、メキシコでもトマス・モアの『ユートピア』に倣ってミチョアカンの初代司教バスコ・デ・キローガ(Vasco de Quiroga 在位 1535～65)が同じ趣旨の事業を展開した。

58 16世紀スペインは1391年の迫害運動以降のユダヤ教徒、1496年に征服が完了したカナリア諸島の住民(guanches)、グラナダ占領後のイスラム教徒という三つの異教徒集団を抱えており、彼等の改宗は同化への第一歩として政治と社会の両面で重要な意味を持っていた。

59 LAFAYE, Jacques: *Los conquistadores*. México, 1970, p. 28.

60 DURAND, op.cit., p. 47.

61 ディーアス・デル・カスティージョ、前掲書、208章。

62 聖職者の同行は1526年に王令によって義務付けられた。

63 現在の呼称はしばしば簡略化の結果である：Guatemala<Santiago de los Caballeros de Guatemala／Caracas<Santiago de León de Caracas／Quito<San Francisco de Quito／La Paz<Santiago de La Paz／Los Ángeles<Santa María de los Ángeles, etc.中でも頻出する Santiago は再征服と征服とを結ぶもう一本の糸である。

64 ディーアス・デル・カスティージョ、前掲書、205章。

65 LÓPEZ DE GÓMARA, Francisco: *Historia general de las Indias* (1551－52)に付けられたカルロス1世への献辞の冒頭の一文。

66 通称は「宗教改革」だが、これが歴史にもたらした影響からドーソンは「宗教革命 religious revolution」と呼ぶ。DAWSON, Christopher: *The Dividing of Christendom*. New York, 1965, p. 4, p. 143.

67 今日の国際関係論はウェストファリア条約を出発点としている。

68 第一次世界大戦を跨いで書かれたシュペングラーの『西洋の没落』(1918~22)がウェストファリア以来の近代ヨーロッパの終焉の予言の書と呼ばれ、大きな反響を呼んだ。

69 先に EU 憲法がフランスとオランダでの国民投票で否決されたことに関連して、2005年9月27日付けの読売新聞に「憲法案の間違いはキリスト教のルーツに言及しなかった点にある。このため、欧州統合の経済的側面だけが強調され、文化的側面が軽視された印象を持っている」というイタリア文化相のコメントが掲載されていた。

70 この有名な演説はこれまでにもさまざまな本で紹介されてきたが、最近では PALACIO ATARD, Vicente (ed.): *De Hispania a España*. Madrid, 2005, pp. 224－225 に載っている。

71 MENÉNDEZ PIDAL, Ramón: *Los españoles en la historia y en la literatura*. Buenos Aires, 1951, pp. 225－229.

# 『血の婚礼』における色彩のシンボルに関する一考察

森　直香

## はじめに

フェデリコ・ガルシア・ロルカの『血の婚礼』は農村三部作の第一作であり、ロルカに劇作家として大きな商業的成功をもたらした作品である。この作品を書く以前に、ロルカは『ジプシー詩集』の出版によって既に詩人としての名声をゆるぎないものとしていたし、また、学生劇団「ラ・バラッカ」の監督としても活動していた。しかしながら、演劇の分野で商業的成功を収めるというのはロルカの悲願であった。

当時の演劇界は、19世紀後半から続く危機的状況に苦しんでいた。劇場では演劇作品が多数上演されていたが、文学レベルは低いものが多く、観客動員の減少は著しいものであった。多くの作家が、この演劇の危機を克服しようと努めていた。ロルカも例外ではなく、この状況を打破しようと様々な試みをした。まず、彼はシュールレアリズムに表現方法を求め、『五年経ったら』『観客』等の作品を執筆する。しかしながら、ロルカ自身が認めている通り、この作品は上演不可能なものであった。シュールレアリズムの手法に限界を感じたロルカは、次第に悲劇に目を向けるようになる[1]。

そのような背景のもとに書かれた三大悲劇はいわばロルカの芸術活動の集大成であり、彼の舞台監督としての経験が大いに生かされ、黄金世紀の戯曲の影響も多く見られる。また、以前の作品でも用いられていた技法がいくつも成熟した形で現れている。例えば、三大悲劇の中には、以前の詩作品で用いていた表現である詩的言語[2]が多く用いられ、詩的言語と戯曲の融合がなされている。詩的言語の中でも、意味上の効果と美的効果の二つの役割を果たすシンボルは特に多く登場する。本稿では、シンボルの中でも特に色彩に関するものを取り

---

[1] ロルカは1934年9月3日のインタビューの中で自分が悲劇という形式に取り組むことの重要性についてふれている。様々な形式の戯曲を執筆した後、ロルカは悲劇こそが自分の意図を表現するのに最も適していると考えるようになった。Federico García Lorca, *Obras completas III*, p. 536 参照。

[2] 本稿では、詩的機能、つまり伝達内容そのものより伝達表現、言い換えればどのような形でメッセージを表現するかに重点をおいた言葉という意味合いで「詩的言語」という語を用いる。

上げて、三大悲劇の第一作『血の婚礼』の中で色彩がシンボルとしてどのように使用されているか、またそれぞれの色が持つ二次的意味について論じることによって、成熟期にあったロルカがどのように詩的言語と戯曲を融合しようとしたかについての考察を試みる。

1. 登場人物と色彩

『血の婚礼』の主要な登場人物は、レオナルド、花むこ、花嫁、母親の四人である。レオナルド以外は、固有の名前を持っていないが、それにはレオナルド以外のキャラクターに個性を与えず、どこにでも存在しうる典型的な人物（arquetipo）として描く狙いがあると思われる。彼らは伝統的な思想や習慣が強い影響力を持つ社会の中で特定の概念を代表する原型的なキャラクターである。

花嫁は以前、レオナルドと恋人同士であったが、今は花むこと結婚間近である。物語はこの三人の三角関係を中心に進んでいく。花むこの母親は、自分が暮らす共同体の伝統を代弁する立場にある。彼女は結婚を、子供をもうけて血筋を繁栄させるための手段と捉え、息子の結婚を心待ちにしている。その一方で、花むこの結婚によって自分が一人になってしまうことや、花嫁が以前フェリクス家のレオナルドと付き合っていたことが気にかかっている。母親にはフェリクス家の人々に長男と夫を殺された過去があり、今でもフェリクス家への恨みと残された息子である花むこまで失ってしまうのではないかという恐れを常に抱いて生きている。そのため、彼女にとって息子が結婚して孫が出来、自分の血統が続くのを目にすることは悲願である。花むこは母親の考えを受け入れ、従う。彼も、母親同様、共同体の伝統を守ろうとする存在である。

レオナルドは、既に花嫁のいとこと結婚して一児をもうけている。その上、彼の妻は二人の目の子供を身ごもっているが、レオナルドは花嫁のことが忘れられず、夜中に密かに花嫁に会いに行っている。彼は、母親と花むこが象徴する伝統的な思想に反抗し、個人的な欲望をかなえようとする存在である。

花嫁は二人の対照的な男の間で揺れ動く人物である。はじめはレオナルドへの思いを断ち切って花むこと結婚することで共同体の伝統に従おうとするが、結局欲望を抑えられず、レオナルドと駆け落ちす

る。彼女はいわば伝統と個人の欲望の間で悩み、苦しむ存在である。

これらの登場人物たちは黄色と金色、赤、白、黒という特定の色と結び付けられており、各色は彼らのそれぞれが代表する概念を象徴している[3]。第一幕では、主要な登場人物の家が順番に舞台となるが、舞台装置には彼らと密接なかかわりのある色が用いられている。そして更に、各登場人物と結びついた色は物語の中で重要な意味を持つシンボルと関連付けられている。

## 2. 色彩の使用

演劇の上演は、記号論の立場からみると、「異なった協力的な諸体系に属する記号単位のネットワーク」[4]である。個々の記号は二次的な意味を有しており、それは作者の属するコミュニティに働いている社会的、道徳的、イデオロギー的価値と関係している。色彩の場合も例外ではなく、色彩の持つ二次的意味は作品のメッセージとストーリーをよりよく表現するために重要な役割を果たす。『血の婚礼』では色彩の二次的意味は物語の流れ、登場人物の性格と彼らが象徴する抽象概念をよりよく表現するのに役立っている。

『血の婚礼』の中の色彩の使用の方法は、大きく二つに分けられる。一つ目は、以前の詩作品の中にも見られた方法で、色彩的なイメージの強い言葉をシンボルとして用いる場合である。この一つ目の方法は言語[5]にかかわり、登場人物の台詞（コロスを含む）の中に現れる。二つ目としては、衣装、小道具、装置、照明の中での色彩の使用であり、視覚効果をもたらすような方法で演劇特有であると言える。これは主にト書きによって指定されていて、『血の婚礼』の中にある 330 のト書きのうち、色彩に関連するものは 24 ある。この視覚に訴える形での色彩の使用は、台詞の中に現れる色彩と関係の深いシンボルの

---

[3] その他、死を象徴するキャラクターである月と結びついた色である青、レオナルドの家の中にふんだんにあるバラ色、人間に犠牲の血を流させるシンボルであるナイフのイメージと結びついた銀色も作中で重要な働きをする。

[4] K・イーラム『演劇の記号論』山内登美雄、徳永哲訳、勁草書房、1995 年、p. 7。

[5] タデウシ・コフザンは、演劇を言語、調子、顔のマイム、身振り、動き、メーキャップ、髪型、衣装、小道具、装置、照明、音楽及び音響効果（舞台裏の擬音を含む）という 13 の体系に分類した。『文学とスペクタクル』渡辺淳訳、未来社、1984 年、pp. 239 – 271 参照。

効果をさらに高める。

2.1. 黄色、金色

花むこは作中ずっと黄色と金色のイメージと結び付けられている。黄色も金色も西洋の文化では太陽を象徴する色でもある。太陽はキリスト教においては、創造者ヤハウェの力や、神の息子であるキリストを象徴するシンボルでもある[6]。また、太陽は光、つまり生命の温かさの源であり、その光は地上にそそぐ天と聖霊の影響を象徴する[7]。作品中では、黄色は豊饒、豊かさを連想させるイメージとして花むこと結びつく。そして、黄色の豊かさのイメージは、経済的豊かさ、そして子供をもうけることによる子孫繁栄という伝統的価値観を連想させ、花むこが共同体の伝統・アイデンティティを守る存在であることを示している。

第一幕第一場は花むこと母親の黄色い壁の家で始まる。

> 黄色く塗られた部屋（p. 7）[8]

そして、黄色は、作中では小麦のイメージとも結びついている。

> **母親**　確かに、お前の父さんはよくつれていってくれたわ。それが家柄のいい男ってものだし、血筋なのよ。おまえのお祖父さんはあっちこっちに息子を残したけど、あたしはそういうのが好き。男は男、小麦は小麦じゃなくっちゃね。（p. 10）

母親の考える男らしさとは、血筋の繁栄のためにたくさん子供をもうけることであり、母親は、この男らしさを黄色の小麦にたとえている。そして、花むこの家系の男らしさは、第二幕の婚礼の場面の女中の台詞からも読み取れる。

---

6 アド・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎他訳、大修館書店、1984年、pp. 612－614、pp. 704－705参照。

7 Manuel Antonio Arango, *Símbolo y simbología en la obra de Federico García Lorca*, Madrid, Editorial Fundamentos, 1995, p. 153.

8 下線部分は筆者による。本稿における本文の引用は以下の版から行う。ガルシーア・ロルカ『三大悲劇集　血の婚礼　他二篇』牛島信明訳、岩波書店、1992年。

女中　まあ、この子ったら、婆さんを口説こうってのかい？なんて粋な家系だろうね、あんたんとこは。男の中の男の集まりだよ。あたしゃ子供のころに、あんたのお祖父（じい）さんの結婚式を見たよ。あの男っぷりといったらなかったね！それこそ、山が嫁さんをもらうみたいだった。(p. 79)

小麦はすべての農業と豊饒のシンボルであり豊富、収穫という意味合いも持つ。また、永遠の命を連想させるシンボルでもある[9]。作中では小麦は自然の生命の力のシンボルでもあり、女性に子供を授ける男性の性的な力をも象徴している[10]。

一方、第一幕第二場では、レオナルドが小麦の仲買人とトラブルを抱えていることを暗示するような台詞がある。

レオナルド　小麦の仲買人たちといっしょだったんだよ。連中ときたら、目方を計るのにいつもひどく手間どるからね。
妻　（レモン水をつくりながら、やさしい声音で）　それで、いい値で買ってくれた？
レオナルド　まあ、妥当なところだ。(pp. 26 – 27)

このいさかいは、そのままレオナルドと花むこの対立をほのめかしているともとれ、大変興味深い。

第三幕第一場の最後の場面の花嫁とレオナルドのコーラスにも麦のイメージは登場する。

レオナルド　火がまた火をかき立てる。 / ほんの小さな炎でも / 二つの麦穂を殺すだろう。 / さあ 行こう！ (p.

---

9 アド・ド・フリース、前掲書、p. 684 参照。新約聖書には次のようなイエスの言葉がある。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛するものは、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」(ヨハネによる福音書 12:23 – 25)。この一節では血統の継続を通しての永遠の生のシンボルとして小麦を用いている。

10 Cf. Julian Palley,"Archetypal Symbols in *Bodas de Sangre*", *Hispania*, L, 1967, p. 78.

112)

ここでの麦穂の死は、単純に読み取ればレオナルドと花嫁の愛が引き裂かれることであるが、小麦が花むこと結びついたシンボルであることを考え合わせると花むこの死の暗示にもなりうる。このように異なった状況下で同じシンボルが繰り返し使用されることにより、シンボルは詩的言語としての役割を果たすだけでなく、自然にストーリーに溶け込み、悲劇の予兆のような抽象的な概念を観客の意識に強く訴える。

第一幕第三場で再登場する時、花婿は金色のチェーンを身に付けている。金色は太陽と火、豊饒、富や豊かさを表す色である。また、さびないために不朽不滅のシンボルでもある。雄弁の神ヘルメスの持ち物で、名誉、威厳、尊敬、富を表すこともある[11]。作中では黄色同様、花婿の経済的豊かさと母親の子孫繁栄の願いを象徴していると考えられる。金色も花むこと結びついた色である。

花むこは黒いコールテンの服を着こみ、太い金の鎖を首にかけている。(p. 33)

第二幕の婚礼歌の中でも花婿は金色と結び付けられている。

娘 2　お嫁さん / 白いお花の 冠がぶり / おむこさん / 金のリボンで 留めてあげた (p. 58)

娘 3　花むこは / まるで 黄金（きん）の花 (p. 61)

以上のように、花むこは黄色、金色と結びついているが、それは花むこの経済的豊かさと子孫繁栄への願いの暗示である。しかし、最終場で再び金の花のイメージが登場する時には、その印象はがらりと変わる。

11 アド・ド・フリース、前掲書、pp. 287－288 参照。

乞食の老婆　[...] 金の花にかけられた　汚い砂　(p. 125)

娘1　汚い砂。
娘2　金の花にかけられた。
少女　死体が　金の花に飾られて　/　小川から　運ばれてくる
(p. 125)

婚礼の場面で花むこを象徴していた金色の花は、砂で汚れた花、死体を飾る花に変わっている。楽観的な雰囲気の中で用いられていた表現が全く異なった文脈で用いられることで、花むこに起こった悲劇、すなわち彼の死の残酷さが観客により強いものとして感じられる。

2.2. 赤

レオナルドを象徴する色は血の赤である。赤色は、血、戦争、犯罪、復讐、怒り、または愛、情熱、情念、献身などにも関連した色である。またキリストの受難とも結びついた色であり[12]、このことはレオナルドの運命を象徴しているようでもある。情熱の赤と結びつくレオナルドは、自分の欲望のために共同体のルールを破る存在である。古代文化において血は重要な意味を持つ。旧約聖書には「生き物の命は血の中にある」(レビ記 17:11) と言う一節があるが、血は古代から生命を象徴していた[13]。『血の婚礼』の中では、血はタイトルにも使われている重要なシンボルで、複数の意味を与えられている。このシンボルは、家柄や血筋を意味すると同時に、暴力的な死によって流される生け贄の血、花嫁が新婚初夜に流す血などを意味する。

血という言葉は、家柄・血筋という意味合いでは、第二幕第二場の母親と父親の会話の中で用いられている。

父親　あいつは騒動を起こそうとしているんだ。どうも血がいか

12 アド・ド・フリース、前掲書、pp. 520－522 参照。
13 マヌエル・アランゴは「血は生命を媒介すると考えられている。血は生命であり、活力と聖霊を象徴する光とは対照的に生命と体の熱を象徴する。いくつかの国では血は魂を媒介すると考えられている。生け贄をささげる儀式の時に、生け贄の血を太陽光線に晒さないように注意する文化があることは、この概念によって説明できる。また、赤色のもつシンボル的な意味とも共通する面がある」としている。Manuel Antonio Arrango, *op.cit.*, p. 65.

ん。

**母親**　あの男にどんな血を望もうというんです？あの一族のあの血。人殺しをしたひい祖父（じい）さんに始まって、あの男にまで流れ続けているんですよ。空笑（そらわら）いをうかべながら、ナイフをふりまわすあの一族の性（たち）の悪い連中みんなにね。（p. 72）

物語の冒頭で母親は自分の夫、すなわち花むこの父親のことを「それが家柄のいい男ってものだし、血筋なのよ。」（p. 11）（«Eso es buena casta.» p. 417）と評しているが、この場面では、血という言葉が「血筋」（casta）と同じ意味合いで用いられている。

生贄の血の赤色のイメージは、第二幕第二場に何度も現れる。この場面では、婚礼パーティが行われ、レオナルドと花嫁のかけおちが発覚する。冒頭の婚礼歌の中には、「飛び散る血」（p. 71）のイメージが現れ、母親も父親との会話の中で「地面に流れ出た血」に言及する。

**母親**　残念ながら、そういうわけにはいかないわ。長い時間がかかるんです。だからこそ、地面に流れ出た血を見るのはおぞましいのよ。ほんの一分で流れ出る血をつくるのに、あたしたちは何年も何年もかかるんだもの。息子が殺された時、そこへ行ってみたら、あの子は通りのまん中にぶっ倒れてた。あたしは思わず、両手をあの子の血でべとべとにして、舌ですっかりなめてしまったわ。　（p. 74）

ここでは血のシンボルは、めでたい結婚式の席にあっても感じられる不吉な予感、その後起こる悲劇の予兆として機能している。ここでの血は犠牲の血のイメージで、個人の欲望を叶えるためにレオナルドが流す血であり、彼の暴力的な死を連想させる。

第三幕第一場でも赤い血のイメージは登場する。冒頭の木こりたちの台詞では、何度も血のシンボルが使われる。

**木こり 3**　血の勝利！

**木こり 1**　血の呼び声に従うべきなんだ。

木こり 2　しかし、光を仰いだ血は大地に吸いこまれてしまう。(p.92)

木こり 1　だが、その時には、すでに二人の血はまじり合い、二人のからだは虚ろな瓶、乾いた小川みたいになっているだろう。(p. 93)

木こり 2　血をジャスミンでひたせ！　(p. 94)

この場面に出てくる血のシンボルは、花嫁とレオナルドを突き動かす情熱・本能の力と同義でもある。

この場面の後に続く月のコーラスの部分でも「血の出る苦痛」(p. 95)、「赤き血潮」(p. 96)、「甘き血潮」(p. 98)、「赤き血」(p. 100)「戦慄の血の流れ」(p. 100) など、血のイメージがふんだんにある。ここでは、血は月が求める人間の犠牲の血であり、月が死の使者であることやレオナルドと花むこを待ち受ける運命を暗示している。これを受けて、月と死を象徴する乞食の老婆の登場後の木こりたちのコーラスでは血の持つ意味合いが変化する。

木こり 2　血を噴き出させるな！　(p. 104)

木こり 3　婚礼を赤い花で被うな！　(p. 105)

情熱の力を象徴していた血と赤は、人間が流す犠牲の血の象徴へ変化する。木こりたちの台詞の中の血のシンボルの意味合いが月と乞食の老婆の登場前後で変化したことは、恋人たちに起こる悲劇が次第に現実のものになりつつあることをほのめかしている。

第三幕第一場の最後の場面となるレオナルドと花嫁のコーラスにも血のイメージは使われている。

レオナルド　[...] 花嫁の髪の　銀の留めピンが　/　俺の血をどす黒く濁らせ　/　夢が　おれのからだじゅうを　/　毒草だらけにしていった　(p. 109)

ここでは再び血の意味は情熱の力へと転じているが、どす黒い血、毒草といったネガティブなイメージとともに用いることで、情熱が払わなければならない対価を観客に思い起こさせる。

最終幕で娘たちが巻き取っている赤い毛糸の赤は、背景の白とコントラストをなし、大変印象的である。

紺色の服を着た娘が二人、赤い毛糸の糸を枠（かせ）に巻きとっている。(p. 116)

ジーン・エドワードは娘たちをローマ神話の生死をつかさどる運命の三女神パルカスになぞらえ、毛糸は人間の生命と運命を象徴しているとしている[14]。そしてこの娘たちの歌うコーラスの中にも赤色のイメージが登場する。

娘1　もの言わぬ恋人と　/　真紅にそまった花むこ　(p. 119)

ここでも赤は二人の男が流した犠牲の血である。

以上見てきたように、作品中に血のシンボルに代表される赤のイメージは何度も繰り返し登場するが、その意味合いは物語の流れとともに変化する。特に第三幕で顕著で、始めは花嫁とレオナルドを突き動かす本能の力、性的なエネルギーを表していたのが、死を象徴するキャラクターである月と乞食の老婆の登場によって、死に結びついたもの、犠牲の血へと意味を転じていく。

2.3. 白

花嫁に関連した色は、前半は白、そして第二幕第一場の終盤以降は黒になる。これは、主に彼女の衣装の色に表れている。花嫁は当初白い衣装で登場するが、第二幕第一場の後半、つまり婚礼の場面以降は、黒い衣装をまとう。白は純潔、貞節、節制、処女であることを表す色

---

[14] Edwards, Gwynne, *El Teatro de Federico García Lorca*, versión española de Carlos Martín, Madrid, Gredos, 1983, p. 205.

である[15]。

第一幕三場は花嫁の家が舞台である。

> 花嫁が住む洞穴の家のなか。奥にはバラ色の花でできた大きな十字架。アーチ形の戸口にはバラ色のタッセルで束ねられたレースのカーテン。白くてずっしりとした岩の壁には、円い扇、青い壷、それに小さな鏡などが飾られている。　(p. 33)

このシーンでは、壁の白色が支配的なイメージである。花嫁は白のイメージと効果的に結び付けられている。作品全体を通して衣装に関するト書きはあまり多くないが、第二幕一場では、花嫁は白いペチコートとキャミソールで登場する。

> 花嫁が、レースやフリルで飾られ、プリーツのついた白いペチコートに、白いキャミソールといった格好で、腕をむき出しにしたまま入ってくる。　(p. 45)

純潔の白のイメージは、作中何度も登場するオレンジの花冠の白色と結びついている。その花の実であるオレンジは、その丸い形から女性を象徴する果物で、寛容、豊饒を表す。また貞節を表し、聖母マリアの持ち物でもある[16]。

> まだペチコートのままで、頭にオレンジの花の冠をのせて現れる。(p. 52)

> 女中　オレンジの花をここへ、こういう具合に挿そうかね。髪のうえで花が引き立つように。(オレンジの小枝を試しに挿してみる)　(p. 47)

しかし、花嫁は花冠をかぶるのを喜んではいない。

---

15 アド・ド・フリース、前掲書、pp. 686－687 参照。
16 アド・ド・フリース、前掲書、pp. 472－473 参照。

花嫁　（鏡に顔を写してみて）それ、ちょっとかしてちょうだい。（オレンジの小枝を手にとってしばらく眺めると、不意にがっくりと頭をたれる）　（p. 47）

彼女は花冠を女中から取り上げ、最後にはそれを放り投げてしまう。

花嫁、手にしていたオレンジの小枝を投げつける　（p. 47）

純潔の象徴であるオレンジの花冠を粗末に扱う行為は、花嫁の結婚に気が進まない気持ちを反映し、いずれ花嫁が花むこを裏切ってしまうであろうことを予感させる。この花嫁の行為はやがてレオナルドとの逃避行という形で具体化される。そして、最終幕最終場で花嫁の不貞を非難する際、母親はオレンジの花冠のイメージを用いる。

母親　[...] ほかの女があったためたベッドにもぐりこもうとして、結婚式のオレンジの花の冠を投げ捨ててしまうなんていうのは、つまらないことを考えて夜の目も寝ない、尻軽な、ぐうたら女のすることよ！　（p. 130）

再び同じ表現を用いることで、婚礼の前は単なる予感に過ぎなかったことが現実になってしまい、全てが終わってしまった後の空虚感が強調される。

婚礼歌の中でも白のイメージは何度も登場する。「雪のシャツ」（p. 57）「ジャスミン」（p. 57）「白い花」（p. 58）「純白の花嫁」（p. 59）「レモンの花」（p. 60）等、ここでも白は純潔を象徴している。

白はまた対照的に死を表す色でもある。第二幕では純潔を表していた白のイメージが死を暗示するものへと次第に転じていく。白のイメージはまず冒頭の木こりのコーラスに現れる。

木こり 2　血をジャスミンでひたせ！

純潔の象徴である白いジャスミンを情熱を意味する血でひたす行為は、花嫁が花むこを裏切ってレオナルドと逃げたことを連想させる。

次の場面の月と老婆の台詞にも「川面に映（うつ）る丸い白鳥」(p. 95)「雪」(p. 96)「白いシーツ」(p. 99)など白色と関連したシンボルが登場する。死の化身ともいえるキャラクターから語られることで、白のイメージは死を意味するものへと変わる。

レオナルドと花むこが死を迎えた後の最終幕最終場は、真っ白な部屋が舞台となる。

> アーチとどっしりとした壁からなるまっ白な部屋。左右に、それぞれ白い階段。舞台奥にも、同じ色の大きなアーチと壁。床もまた、まばゆいほど白くなければならない。この質素な部屋が、教会のごとき厳粛で、象徴的な空間となること。舞台には、よしんば遠近法上の効果のために必要なものであれ、灰色ひとつ、物影ひとつあってはならない。　(p. 116)

このシーンでは白が色である。この場面の白い壁の印象は第一幕第三場の花嫁の家の壁の白とは明らかに違う印象を与える。第一幕では白い壁を背景にバラ色の十字架やバラ色のタッセルなど暖かい色使いだが、最終幕ではまぶしいばかりの白一色である。この場面では、白は純潔を意味するものではなく、毛糸の赤、娘たちの衣装の紺、母親と花嫁の衣装の黒を際立たせる役割を果たすと同時に、死と空虚さを暗示する。白色の意味の変化はそのまま花嫁の立場の変化でもある。

そして、この最終幕最終場の台詞の中に現れる白のイメージも同じように死を思い起こさせる。

> **娘 2**　洋服を飾るジャスミン　/　ガラスのような繊維。/　四時に生まれて　/　十時には死んでいく　(p. 116)

> **乞食の老婆**　二人の目は　砕けた花　/　歯は　二にぎりの硬い白雪。/　男二人は斃（たお）れ 花嫁は戻る　(p. 124)

> **レオナルドの妻**　馬上りりしき　あの人も　/　いまでは　冷たき雪の塊　(p. 131)

作中での白のイメージの意味の変化は、赤色の場合と同じく物語の流れと連動したものである。二人の男の死という悲劇によって、白は純潔をイメージさせるものから死と空虚さのシンボルに変わる。

2.4. 黒

母親は、黒と結び付けられている。作品の中で黒は、死を連想させる色である。色が完全に消滅した状態とみなされることから死を表すとされ、西洋美術では黒は、死、改悛などを意味する[17]。母親の衣装を指示するト書きは一箇所のみだが、第一幕三場で花嫁の家を訪ねる際、母親は黒い衣装を身に着けている。

> 母親は黒いサテンの服を着て、レースのショールをかぶっている。（p. 33）

母親の衣装の黒は彼女が夫と長男を亡くしており、もう子供をもうけることが出来ない身であることを示す記号として機能している。

第二幕第一場の終盤以降、花嫁に関連した色は白から黒へ変わる。婚礼の席では花嫁は黒い衣装を身に着けている。

> 花嫁が姿を現わす。1900年代風の黒いドレスに身を包んでいる。腰当てでふくらませたスカートの裾は長くのび、そこにはひだのついた紗と糊のきいたレースが飾られている。ウェーブを額にたらすスタイルに結い上げられた髪に、オレンジの花の冠がのせられている。　（p. 63）

しかし、同じ場面で花むこは黒い靴を選ばず、花嫁がその理由を尋ねている。

> **花嫁**　どうしてその靴にしたの？
> **花むこ**　黒よりこっちの方がはなやいでいるもの。　（p. 64）

---

[17] アド・ド・フリース、前掲書、pp. 65－66 参照。

この対照的な行動が、そのまま花嫁と花むこの気持ちのすれ違いを暗示しているようでもある。

最終場に登場するときも、花嫁は黒い衣装を着ている。

> 花嫁が姿を現わす。黒いショールを被っていて、オレンジの花の冠はもうつけていない　(p. 127)

花嫁はレオナルドと花むこという二人の男の間で揺れ動く人物であるが、彼女の衣装が途中で白から黒へ変わるのは、そのまま彼女の心の動きを映し出している。花嫁の衣装が純潔を表す白から死を象徴する黒に変わったのは、彼女の状況の変化を反映している。また、彼女の衣装が母親と同じ黒になったことは、彼女も夫を失い母親と同じ未亡人の立場になったこと、そして彼女には母親同様、死を嘆きながら生きていくという未来が待っていくことを暗示している。

おわりに

本稿では、三大悲劇の第一作『血の婚礼』の中で登場人物と関係の深い色彩がどのように用いられ、各色がどのような二次的な意味を有しているかを考察することによって、ロルカがどのように詩的言語を戯曲と融合させているかについての論考を試みた。

作中では、黄色と金色、赤、白、黒の各色が豊かさ、情熱、復讐、犠牲、純潔、死など物語の流れの中で重要な役割を果たす抽象概念の象徴として用いられているが、これらは小麦、血、オレンジの花などのそれぞれ同じ意味を表すシンボル群と結び付けられて、台詞の中で繰り返し用いられている。このことによって、色彩イメージとシンボルは言語上の美的効果をあげるだけではなく、自然な形でストーリーの中に溶け込み、実体を持たない概念を観客により実感させる役割も果たしている。

また、これらの色は登場人物と深い関係を持ち、彼らの心理状態、性格、そして彼らの間にある関係を表現するのに役立っている。家族を殺した一族への復讐心を捨てることが出来ない母親は黒い衣装をまとう。黄色と金色と結びついた花むこと赤と結びついたレオナルドとの間で苦悩する花嫁は、最初は純潔の白で象徴され、二人の死後に

は黒い衣装を着る。この変化は花嫁の二人の男への気持ちの動きを暗示すると同時に、彼女が伝統と個人の情熱、欲望の間で迷うさまをも表している。また、花嫁の衣装が母親と同じ黒に変化したことは、花嫁が母親と同じ立場になり、同じ運命をたどることをも示唆している。

これらに加えて、上演されることを念頭において書かれた戯曲である本作は、言葉での色彩イメージとともに、小道具、舞台装置、衣装、照明等の視覚に訴えるような形でも色彩が効果的に用いられており、詩的言語の効果がより高められている。

このような形の色彩イメージの使用は以前に書かれた詩作品、戯曲にも見られるのであるが、演劇の改革を目指して書かれた『血の婚礼』ではこのような彼の技巧をより成熟した形で目にすることが出来る。なお、ロルカの他の作品における色彩イメージの使用については今後の課題としたい。

参考文献


Arrango L., Manuel Antonio, *Símbolo y simbología en la obra de Federico García Lorca*, Madrid, Editorial Fundamentos, 1995.

Edwards, Gwynne, *El Teatro de Federico García Lorca*, versión española de Carlos Martín, Madrid, Gredos, 1983.

_____*Lorca, Living in the Theatre,* London, Peter Owen Publishers, 2003.

García Lorca, Federico, *Obras Completas I-IV*, Miguel García-Posada (ed.), Barcelona, Circulo de Lectores, Galaxia, Gutenberg, 1997.

Kiosses, James T., *The Dyanamics of the Imagery in the Theater of Federico García Lorca*, Maryland, University Press of America, 1999.

Palley, Julian, "Archetypal Symbols in *Bodas de sangre*", *HISPANIA*, L, 1967, pp. 74 – 79.

イーラム、K『演劇の記号論』山内登美雄、徳永哲訳、勁草書房、1995年

ガルシーア・ロルカ『三大悲劇集　血の婚礼他二篇』牛島信明訳、岩波書店、1992年。

コフザン、タデウシ『文学とスペクタクル』渡辺淳訳、未来社、1984年。

フリース、アド・ド『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎他訳、大修館書店、1984年

『聖書　新共同訳』、日本聖書協会、1989年。

# «Don Quijote de la Manchuria»: Salvador de Madariaga en la Sociedad de Naciones ante la invasión japonesa de Manchuria

Keishi Yasuda

## Introducción

La España de los años treinta se inserta en una época de agitación: la que abarca el fin de la dictadura de Primo de Rivera, la Segunda República, la Guerra Civil y la dictadura de Franco hasta 1975. Aunque fugaz, la Segunda República (1931－1936) fue un período democrático y parlamentario. La vida política de esta época, sin embargo, se vio afectada por los numerosos problemas pendientes desde la etapa dictatorial de Primo de Rivera. Los cuales, al no poder ser solucionados por el régimen republicano, ejercerían una considerable influencia en el inicio de la contienda española.

En aquel tiempo, la agitación presente en España, asimismo se experimentaba en la escena internacional. El mundo de los años treinta, situado entre las dos grandes guerras, fue un período caótico. La Sociedad de Naciones, fundada en Ginebra en 1920 conforme al Pacto de Versalles, firmado tras el final de la Primera Guerra Mundial, fracasaría en la intención de mantener la paz mundial, y no podría evitar el estallido de la otra "Gran Guerra" en 1939. El principio de este fracaso fue la invasión del ejército japonés de Manchuria en septiembre de 1931. Esta infracción de orden internacional dejaba la responsabilidad de su resolución a la institución ginebrina.

Uno de los personajes que intervino de manera activa en este asunto fue Salvador de Madariaga (1886－1978), representante español de la Liga de Naciones.[1] Madariaga, gallego conocido, intelectual e historiador, desarrolló en ella una parte de su brillante carrera diplomática. En mayo de 1931, un mes después de la instauración de la Segunda República, fue nombrado embajador español en Washington. Sólo tres meses más tarde, se vio obligado a trasladarse a Ginebra bajo órdenes gubernamentales.[2] El caso de Manchuria surgió ante

[1] Quintana Navarro, 1996, p. 107.
[2] Preston, 1998, p. 187; Riosalido, 1987, p. 90.

Madariaga justo después de su ingreso en el cargo. Fue una primera difícil prueba.

Este estudio tiene por objeto aclarar la tensión diplomática en la Sociedad de Naciones provocada por la invasión de Manchuria a través de los testimonios de Madariaga. Asimismo profundiza en las relaciones de éste con los dirigentes de la República española, especialmente con Manuel Azaña, presidente del gobierno, y explora el papel realizado por la diplomacia hispana en el mundo de aquellos confusos años.

## 1. La actitud diplomática del primer bienio republicano

### 1.1. La llegada del régimen democrático

El 14 de abril de 1931 se proclamó la Segunda República en Madrid. La instauración del sistema democrático era esperada por el pueblo después de casi siete años de dictadura. Pero entonces casi nadie preveía dieciséis reemplazos de gobierno en apenas seis años de República. El cargo de ministro de Estado, actualmente el ministro de Asuntos Exteriores, cambió en diez ocasiones[3], lo cual quería decir que tanto la política interior como la exterior estuvieron llenas de dificultades.

En el primer bienio, hasta diciembre de 1933, los republicanos tomaron la iniciativa política. Manuel Azaña, de Acción Republicana, era el jefe de gobierno y sostuvo el pacifismo en política exterior. En el artículo 6 de la nueva Constitución, establecida en diciembre de 1931, se estipulaba que España renunciaba a la guerra como instrumento de política nacional.[4] Esta cláusula fue introducida conforme a la voluntad pacifista de la Sociedad de Naciones. El gobierno de Azaña tenía la intención de cumplir este propósito mediante su diplomacia. Y además también quería consolidar su posición en la escena internacional, sobre todo en Europa. Para ello, la diplomacia española se vio obligada a inhibirse de comportamientos "atrevidos" ante las grandes potencias mundiales y trató de llevarse bien con ellas. Salvador de Madariaga expresaría la actitud diplomática de España en aquel tiempo como sigue:

---

[3] Quintana Navarro, 1996, p. 107.
[4] Neila Hernández, 2003, p. 465.

"(...) en cuanto a táctica, España seguiría en Ginebra una política de colaboración con las naciones democráticas de segundo orden. Neutral ante la lucha por el poder, endémica en Europa, procuraría permanecer en estrecho contacto con Francia y con la Gran Bretaña sin por eso enfrentarse con las demás grandes potencias (...)."[5]

Como se desprende de este texto, la España republicana aspiraba a tener relaciones amistosas con los principales países democráticos, como Francia y Gran Bretaña, manteniéndose firme con los demás miembros de la Liga de Naciones. En la diplomacia española, al parecer, destacaba el pacifismo de Azaña, pero también se puede considerar que esta postura era la única opción para que España, que acababa de erigirse como República, pudiera ser reconocida como una potencia democrática más en el mundo.

1.2. El desinterés gubernamental por la política exterior

En la diplomacia del primer bienio republicano, además del pacifismo, se distingue otro aspecto: la clara falta de interés hacia la política exterior. Uno de sus factores fue la mayor dedicación en resolver problemas internos. En la práctica, el gobierno de Azaña tuvo que llevar a cabo reformas militares, educativas, religiosas y agrarias. Además, aunque existía cierto interés hacia Europa, era evidente que el gobierno de Azaña no daba tanta importancia al Lejano Oriente. Por ejemplo, España y Japón ya habían establecido acuerdos diplomáticos en 1868 y éste era una de las grandes potencias en la escena internacional, pero Azaña estaba poco interesado en la relación con este país asiático.

En diciembre de 1932, más de un año después de la invasión japonesa de Manchuria, el nuevo embajador nipón visitó en Madrid a los dirigentes gubernamentales, entre ellos Niceto Alcalá-Zamora, presidente conservador de la República y al propio Azaña. Éste describiría el estado de esta entrevista así:

"Esta semana se ha presentado el nuevo ministro del Japón. (...) El

[5] Madariaga, 1955, p. 565.

nuevo ministro, feo como un demonio, muy levantada la cúpula del cráneo, y revestido de una casaca cubierta de oro, se nos apareció en el despacho amarillo del Presidente, donde estaba todo su cuarto militar, con el general Queipo a la cabeza, que, siendo muy alto, parecía un gigante al lado del japonés. (...) Poco más tarde, el japonés, ya sin su casaca de oro, me visitó en la Presidencia del Consejo. Y en vez de limitarse a las frases de rúbrica, me habló de la Manchuria, de los intereses del Japón, de las garantías de la paz, etcétera. Me limité a contestarle cosas vagas."[6]

Azaña despachó la visita del japonés como si hubiera sido algo insignificante. Estas expresiones de Azaña demuestran que el asunto apremiante de Manchuria en la Sociedad de Naciones se tomaba en Madrid con una actitud indiferente. Dicha postura del gobierno contrastaba con la de Madariaga en plena fase de resolución en Ginebra. Entre Madrid y Ginebra comenzaban a oponerse dos posiciones hispanas en torno al problema de Manchuria.

**2. El caos en el proceso de negociación en Ginebra**

2.1. La discordia con Alejandro Lerroux

Ante el peligro de estancamiento económico a causa del crack del 29, el 18 y 19 de septiembre de 1931, el ejército japonés invadió Manchuria, haciendo explotar un ferrocarril en el sur de esta región. Este acontecimiento no tardó mucho en ser objeto de discusión en la Sociedad de Naciones. De hecho, Madariaga, uno de los delegados de esta organización, lo definiría como "el primer caso en que un Estado socio violó el Pacto de modo abierto".[7] Asimismo Santiago Méndez de Vigo, ministro de España en Tokio entre 1932 y 1943, lo consideraría "un golpe de maza que derribó el Edificio diplomático confeccionado por el Tratado de Versalles".[8] Es decir, para este sistema que aspiraba a la paz mundial, la postura japonesa era totalmente inadecuada. Sin embargo, la resolución de este asunto todavía se encontraba lejos de realizarse, puesto que las

[6] Azaña, 2000, pp. 658-659. Los diarios originales, tres tomos microfilmados, están conservados en el Archivo Histórico Nacional (AHN) en Madrid desde 1996. Para la presente investigación los originales han sido consultados.
[7] Madariaga, 1974, p. 290.
[8] Méndez de Vigo a Ramón Serrano Suñer, 18 de septiembre de 1941, AGA-AE 52 54/15903;

grandes potencias societarias[9] como Francia y Gran Bretaña vacilaron en sancionar a Japón. Madariaga describió esta situación según un refrán en inglés[10]: "el perro no come perro, las grandes potencias no comen gran potencia".[11]

De todos modos, la política exterior española debía demostrar su habilidad frente a este complicado tema en la escena mundial. Francisco Quintana Navarro enumera sus tres objetivos fundamentales en esta ocasión: a) probar la capacidad de acción de la nueva diplomacia; b) confirmar el grado de coherencia interna diplomática a la hora de afrontar dificultades serias; c) aprovechar una buena oportunidad ante Europa para traducir en iniciativas concretas las grandes ideales y las buenas intenciones.[12] Al principio, Madariaga iba a cumplir todas estas finalidades, pero poco a poco perdería esa intención inicial y empezaría a "luchar contra molinos de viento".

A esta España ansiosa del éxito diplomático se le brindó una inmejorable ocasión: ocuparse de la presidencia del Consejo de la Liga de Naciones. Este cargo lo desempeñaría Alejandro Lerroux, ministro de Estado y líder del Partido Radical. Si Lerroux resolvía el problema de Manchuria bajo su dirección, España podría cobrar cierta fuerza en el mundo. Lerroux, no obstante, contaba con una importante limitación, que le impidió asumir verdaderamente el mando del Consejo: no hablaba bien el francés; el por entonces idioma diplomático por excelencia. Madariaga había resaltado dicha limitación desde el nombramiento de Lerroux como ministro de Estado y posteriormente escribiría:

> "Curiosa elección. Aunque español de lejano origen francés, el señor Lerroux lo hablaba muy poco y lo entendía todavía menos, careciendo además del conocimiento de ninguna otra lengua extranjera."[13]

Esta desconfianza de Madariaga hacia Lerroux también procedía de otro hecho. Una vez, al final de una reunión del Consejo, Lerroux leyó una instrucción

---

Ochoa Brun, 2002, pp. 206, 292.

[9] Este adjetivo quiere decir "de la Sociedad de Naciones".

[10] Este dicho es "dog eat dog", que significa "devorarse uno a otro".

[11] Madariaga, 1974, p. 290.

[12] Quintana Navarro, 1993, p. 57.

en francés que no debía ser pronunciada en voz alta: "Ahora el presidente levanta la sesión", dijo, causando un escándalo entre otros países participantes.[14] A partir de la siguiente sesión, se vio obligado a estar junto con Madariaga, que hacía de intérprete. Y éste le quitaría el protagonismo español en el Consejo. Aunque se quedó en Ginebra hasta el fin de una serie de sesiones, era indudable que se sentía incómodo al lado de Madariaga y la relación de ambos iba deteriorándose. Desde luego, en las sesiones ni se cruzaban las miradas.[15]

La actuación de la diplomacia española en Ginebra, pese al mal oficio de Lerroux, seguía sin interesar a Azaña. Llegó a conocerla a través del informe de Madariaga, que volvió a Madrid temporalmente el 9 de octubre. En ese momento, Azaña lo consideró como el único hombre que podría cumplir con éxito la misión en la representación española en Ginebra.[16] Es decir, en aquel entonces Madariaga era valorado como uno de los españoles más apropiados en la escena internacional por el gobierno, pero esta confianza sería absolutamente pasajera.

2.2. Madariaga en apuros

El 8 de octubre, tres semanas después del inicio de la invasión, el ejército japonés adoptó medidas más rigurosas para asegurarse su dominio sobre Manchuria: emprender el bombardeo. Este suceso haría convocar una sesión extraordinaria del Consejo en Ginebra cinco días más tarde. En esta ocasión, Madariaga acudió a la sesión sin Lerroux. Se supone que éste ya no quería exponerse más públicamente.

Madariaga tenía la intención de ceder la presidencia española del Consejo a otro país miembro, puesto que pensaba que ante la gravedad del acontecimiento manchuriano, el Consejo necesitaba a una figura mundialmente conocida para facilitar el apoyo y solucionar en definitiva el problema. En consecuencia, Briand, representante francés de la organización ginebrina, fue elegido como presidente del Consejo. En 1928 Briand, como ministro de Asuntos Exteriores de su país, había cristalizado con Kellogg, secretario de Estado norteamericano, el Pacto Kellogg－Briand, por el que sesenta y dos países del mundo mostraban la

[13] Madariaga, 1955, p. 563.
[14] Madariaga, 1974, p. 293.
[15] *Ibidem.*
[16] Azaña, 2000, p. 299.

voluntad de renunciar a la guerra. Este acuerdo era el primero en el mundo en concretarse conforme a la actitud pacifista de la Liga de Naciones.[17] Por lo tanto, el francés fue recibido con los brazos abiertos como presidente. La decisión de Madariaga contribuyó a librar al cuerpo diplomático español de la tensión que le causaba su protagonismo en la escena internacional.[18] Francia, sin embargo, no mostraría gran actividad en el asunto de Manchuria como esperaba el representante hispano.

El procedimiento sobre Manchuria no hacía adelantos. Madariaga criticó esta situación en la sesión del 15 de octubre. Además, aunque España formaba parte del Comité de los Cinco con las grandes potencias europeas: Gran Bretaña, Francia, Italia y Alemania; su existencia se encontraba casi ignorada en este grupo, lo cual aumentó la irritación de Madariaga.[19] En aquellos años, Gran Bretaña y Francia evitaban intervenir en conflictos internacionales, como se vería más tarde en la formación del Comité de No Intervención (septiembre de 1936) bajo iniciativa de ambos en la Guerra Civil española. Al mismo tiempo, los dos países, en plena crisis económica, concentraban sus esfuerzos en mejorar las finanzas internas. De hecho, Gran Bretaña había llegado a suspender el sistema del patrón oro en septiembre de 1931. Por otra parte, Italia y Alemania empezaban a sentir cierta simpatía por el Japón militarista. El primero ya se hallaba bajo el régimen fascista de Mussolini y el segundo, que por fin había ingresado en la Sociedad de Naciones en 1926, contaría con el nazi como el primer partido en las elecciones de 1932. Por estas razones, los cuatro países trataron de no crispar a Japón con motivo de Manchuria. La postura de las grandes potencias atrasaría al máximo la resolución del asunto.

Madariaga, ante esta situación, tomó una actitud a favor de China y pidió la inmediata evacuación de las fuerzas niponas. La razón fundamental radicaba en que el ataque japonés a Manchuria se estimaba absolutamente "ilegal" y este acto no se correspondía con los principios societarios. Basándose en las posiciones tomadas por las cuatro grandes potencias, Madariaga buscó a tientas la coalición con otros países miembros la clave de la solución. Lo materializó mediante la

[17] El pacifismo de la Constitución española de 1931 se basaba asimismo en los principios de este pacto.
[18] Quintana Navarro, 1993, p. 63.
[19] *Ibidem*, pp. 59, 64.

creación del Grupo de los Ocho, en el que participaban Bélgica, Checoslovaquia, Dinamarca, Holanda, Noruega, Suecia y Suiza.[20]

Esa postura de Madariaga, no obstante, molestaría gradualmente al gobierno español, que favorecía siempre la de Gran Bretaña y Francia. Luis de Zulueta, nuevo ministro de Estado, y Azaña no fueron la excepción. El 19 de marzo de 1932, Zulueta, que volvió de Ginebra donde continuaba la negociación, se entrevistó con Azaña. Éste tomaría nota de la actitud de Zulueta en su diario:

> "Zulueta estima que España no puede hacer una política demasiado idealista (...)."[21]

Quien iba a optar por la política "idealista" no era nada más ni nada menos que Madariaga. El 19 de abril, el presidente del gobierno, que volvió a ver a Zulueta en la capital española, mostró una opinión más cautelosa sobre este tema. Esta vez refiriéndose a Japón afirmaba:

> "[Zulueta] Supone que el Japón está molesto, primero, por la actitud de la delegación de España en Ginebra respecto de la cuestión de la Manchuria. (...) Yo creo que exagera el enfado del Japón. De todos modos, no se enviarán las armas, y en lo de Ginebra se recomienda la prudencia."[22]

La indignación de Japón provenía del hecho de que España no sólo apoyara China, sino que también manifestara su interés por suministrarle armamento. La actitud española reflejaba la de Madariaga. De la expresión de Azaña, está clara la postura gubernamental de no llevarlo a cabo. Además, el presidente del gobierno no tomó el disgusto nipón en serio, demostrando de nuevo su apatía hacia lo que ocurría en el Extremo Oriente. Y en la última parte de su diario en lo referente a este día, escribió que Madariaga tomaba posiciones "quijotescas".[23] Fue así cómo en Madrid Madariaga fue tildado de «Don Quijote de la Manchuria». De este modo se le obligó a enfrentarse al asunto manchuriano sin el respaldo de

---

[20] Neila Hernández, 2003, p. 460; Quintana Navarro, 1996, pp. 113－114.
[21] Azaña, 2000, p. 485.
[22] *Ibidem*, pp. 501-502.
[23] *Ibidem*, p. 502.

Madrid como si también hubiera sido ese "Don Quijote", un personaje errante en la institución ginebrina.

2.3. En torno a la instauración de Manchucuo

Sin ninguna intervención importante de las grandes potencias, la situación de Manchuria se agravó. En marzo de 1932, Japón declaró la creación de Manchucuo, por lo que construyó por la fuerza un "enclave" suyo en China bajo su hegemonía. Este hecho resaltaba el "tipo de imperialismo" japonés, que definiría Madariaga posteriormente.[24] De ahí que el Grupo de los Ocho, organizado por países no muy potentes, y entonces conducido en mayor parte por el suizo Motta, descalificara ese acto nipón.[25]

El mismo mes se estableció también el Comité de los Diecinueve, dirigido exclusivamente a arreglar dicho asunto. En este grupo, capitaneado por el representante holandés Hymans, seguía destacando la presencia de países de segunda línea como Suiza, Checoslovaquia, Colombia, Portugal, Hungría y Suecia, además de España.[26] Aunque asimismo intervenían en ese Comité, las cuatro potencias no se atrevieron a detener la actuación japonesa mediante el uso de la fuerza militar. Respecto a esta actitud tan poco emprendedora, Akira Iriye, profesor nipón de Historia Contemporánea en la Universidad de Harvard, ha analizado cómo las grandes potencias, pese a su propósito de apelar a las acciones militares en caso de necesidad, no acertaron a comprender la crisis del Lejano Oriente desde un punto de vista internacional.[27] En resumen, el desapego del gobierno azañista hacia Extremo Oriente también se daba en estas potencias. Sin el esfuerzo de éstas, la negociación sobre el problema manchuriano no podía evolucionar, por mucho que otros países hicieran todo lo posible. Madariaga se lamentaba, desde hace tiempo, de esta posición "poco impetuosa" no sólo de su país, sino también de otros.

---

[24] Madariaga, 1974, p. 291.
[25] Quintana Navarro, 1993, p. 73.
[26] *Ibidem*, pp. 73-74.
[27] Iriye, 1966, pp. 117-118.

### 3. Hacia la definitiva solución del conflicto asiático

#### 3.1. El informe Lytton

En septiembre de 1932 cuando todavía el asunto manchuriano no estaba aún resuelto, volvió a Ginebra la Comisión Lytton que la Sociedad de Naciones había enviado a Manchuria. Esta expedición se había realizado a petición de China en la organización ginebrina. El contenido del informe, según Madariaga, "resultó ser excelente, tanto que por sí ya bastaba para reivindicar los procedimientos ginebrinos aun tan defectuosos como lo habían sido en este caso".[28] A saber, ponía de manifiesto la violación del Pacto por parte de Japón, como esperaba Madariaga. A partir del mes de octubre, se inició la discusión de dicho informe. Dirigió este proceso Benes, delegado checo en el Grupo de los Ocho. Madariaga se pondría en contacto frecuentemente con éste, que detallaría tres argumentos para sancionar a Japón: a) no había habido ocasión para legítima defensa; b) Manchucuo no era creación espontánea de Manchuria; c) no se podía reconocer al Manchucuo. Además, en el caso de que Japón rechazara la negociación, pensaba reclamarle con firmeza la evacuación de su ejército, el resarcimiento a China y un embargo de armamento.[29]

La idea de Benes fue aceptada en el Comité y se llevó a cabo la negociación con el representante japonés los días 6, 7 y 8 de diciembre. Madariaga señalaría que este asunto de Manchuria ya no se desarrollaba entre Tokio y Pekín, sino entre Ginebra y Tokio.[30] El nipón que participó en la negociación era Yosuke Matsuoka, a quien Madariaga calificó de "un delegado de primera categoría".[31] Matsuoka sostuvo la supremacía absoluta de Japón en Asia[32], que defendió con rotundidad durante la negociación. Insistió en refutar totalmente las propuestas realizadas por Benes y expuso su disposición a retirarse de la Sociedad de Naciones. Para con esta actitud japonesa, Drummond, representante británico y secretario general de la organización ginebrina, mostró la prudencia que se suponía.[33] A través de esta intervención nipona se haría más grande el abismo existente entre las grandes potencias y el grupo de Madariaga.

---

[28] Madariaga, 1974, p. 312.
[29] *Ibidem*, p. 313; Quintana Navarro, 1993, p. 81.
[30] Madariaga, 1974, p. 312.
[31] *Ibidem*, p. 313.
[32] Iriye, 1966, p. 136.

3.2. Más problemas con Azaña

Al igual que con los cautelosos representantes en Ginebra, Madariaga intensificó el antagonismo de opiniones con Azaña en Madrid. El 8 de diciembre el presidente del gobierno, que supo la actitud de Madariaga en la negociación ginebrina, anotaría en su diario lo siguiente:

> "Madariaga procede en Ginebra como si fuese el portavoz y el apóstol de la Sociedad de Naciones, y olvidándose demasiado de que cuanto él diga lo dice España. Pretende que la política seguida en Ginebra aumenta la autoridad y el prestigio de nuestro país, pero eso tiene un límite, y yo no he visto a ningún Estado que, por defender los principios del pacto, se indisponga con otro. (...) Padece una especie de misticismo en el asunto de la Manchuria. Bien está sostener una política elevada y moral, pero llevarla a tales extremos sólo puede producirnos conflictos por cuestiones que no afectan directamente a los intereses de España."[34]

Se ve claramente que Azaña estaba en total desacuerdo con la actuación de Madariaga. Además, en esta ocasión, sin referirse al sobrenombre de "Don Quijote", criticó duramente su postura, alegando que buscaba su propio protagonismo como "el portavoz" o "el apóstol" de la institución ginebrina.

Esta indignación de Azaña también provenía de la preocupación por la relación con Francia. En noviembre de 1932, Herriot, presidente galo y dirigente del gobierno de izquierda, había visitado Madrid, de manera que España estableció contactos de amistad con una de las potencias más importantes del mundo. Por añadidura, Francia era un Estado que Azaña respetaba especialmente, porque la reforma militar puesta en práctica por él siguió el ejemplo de la Tercera República gala (1871－1940). A pesar de todo ello la visita de Herriot había sido planeada por Madariaga, que entonces estaba en contra de la postura de Francia en Ginebra.[35] Por eso, resultó normal que Azaña se

---

[33] Quintana Navarro, 1993, p. 81.
[34] Azaña, 2000, p. 648.
[35] Egido León, 2000, pp. 200, 203.

molestara con la intervención de Madariaga. Ángeles Egido León define la situación opuesta de los dos, como si hubieran vivido en dos mundos diferentes, en los términos siguientes:

> "Madariaga, imbuido del ambiente ginebrino y quizás algo deslumbrado, y halagado por el papel que sin duda podría desempeñar —y desempeñó— en él, cree que España puede ocupar un puesto destacado y va, sobre todo en los primeros momentos del nuevo régimen, más allá de lo que el propio régimen está dispuesto a ir. Azaña, más consciente de las carencias de España y de los inconvenientes que acarrearía no serlo, se resiste a profundizar en el contexto ginebrino. Más consciente también, como Jefe de Gobierno, de las limitaciones de España, se retrae a la hora de adquirir compromisos concretos y, menos aún, tan imprecisamente delimitados como éste."[36]

Si conceptuamos a Madariaga como "idealista" a favor de los principios societarios, Azaña sería "realista" conforme a la situación española en el mundo. Lógicamente España, que había experimentado la dictadura, intentaba disipar de manera apremiante esta imagen negativa a través de un éxito diplomático. Pero en este proceso no debía irritar a Francia, para no arriesgar su posición en la escena internacional. Además Madariaga, para Azaña, no era más que un representante, y no era nada raro que le disgustara que no fuera fiel a sus órdenes.

### 3.3. La resolución final

Tras la intensa negociación, el último juicio sobre el asunto de Manchuria se dejó en manos del Comité de los Diecinueve. Sin embargo, éste tardaría todavía dos meses en decidirlo. El 9 de febrero de 1933 Madariaga pidió al Comité que recordara nuevamente a Japón la soberanía china en Manchuria. Aunque esta

---

[36] *Ibidem*, pp. 203－204. Igualmente Egido León destaca la trascendencia de dos libros de memorias de Madariaga para captar el contexto diplomático de aquella época, arguyendo que: "Hasta hace poco, sus *Memorias* y sus obras, especialmente su libro *España. Ensayo de historia contemporánea*, eran los únicos testimonios de la acción exterior de la República" (*Ibidem*, p. 195).

propuesta de Madariaga fue aceptada por esa junta, Matsuoka, representante nipón, le contestó que "el mantenimiento y el reconocimiento de la independencia de Manchucuo era la única garantía de paz en el Lejano Oriente".[37]

El 24 de febrero se pronunció la sentencia definitiva. En ésta, constaba que la invasión japonesa era ilícita y no se admitía de ninguna manera la creación del Manchucuo. Es decir, el resultado dio preferencia a la voluntad de los países de segunda línea. Pero Madariaga describiría más tarde este desenlace como "deplorable", ya que este remedio tomado para la paz mundial resultó un auténtico fracaso y terminaría llevando al estallido de la Segunda Guerra Mundial.[38] En la práctica, Japón, que se quejó mucho de la sentencia societaria, se separó de la institución ginebrina el 27 de marzo, por lo que continuaría su invasión en China desvergonzadamente y ocasionaría la guerra chino-japonesa en julio de 1937.

Al fin y al cabo, en este proceso, la Sociedad de Naciones reveló su incapacidad, puesto que debido al antagonismo interno retrasó el momento de la resolución un año y medio. Esta negligencia contribuyó a fortalecer el militarismo japonés, e incluso ante la ininterrumpida invasión nipona, no pudo tomarse ninguna medida eficaz contra ella. Se supone que Madariaga, en aquel entonces, se lamentó no sólo de la ulterior situación internacional, sino también de esta incompetencia y dejadez societarias. Lógicamente estos dos elementos arruinarían la institución ginebrina.

## Conclusión

La diplomacia del primer bienio republicano español y la de las grandes potencias europeas tienen puntos comunes: prudencia e indiferencia. A cada país le apremiaban problemas internos y económicos, así que no se llegó a tener interés por la política exterior, más bien se eludió "intencionadamente". Esta palmaria apatía diplomática le hizo guardarse de sus actos más osados en la escena internacional y le empujó a intervenir en la institución ginebrina con cautela. En este sentido, estos dos aspectos se correlacionan. Además, Extremo Oriente se hallaba demasiado lejos para estos países y el asunto de Manchuria no

[37] Calleja Díaz, 1991, p. 90; Quintana Navarro, 1993, p. 85.
[38] Madariaga, 1974, p. 316.

sirvió para acortar esa distancia, lo cual aceleró y engrandeció la indiferencia.

Para las grandes potencias de Europa, la actitud de los delegados societarios procedentes de los Estados modestos, como Madariaga, suponía una especie de "rebelión". Ya que éstos profesaban el "idealismo", que intentaba castigar a Japón, una de las principales potencias internacionales en aquella época, en defensa de China conforme al objetivo de conseguir la paz mundial. Esta postura "idealista" era totalmente opuesta a la política mucho más "realista" de dichas potencias europeas.

Después de todo, quedaba claro que existían dos posiciones diferentes en la escena internacional de aquella época: idealista y realista. De considerar a los primeros, ejemplificados por Madariaga, como «Don Quijote», los segundos como Azaña serían, por decirlo así, «Sancho Panza de la Manchuria». El antagonismo entre estas dos actitudes causó la tardanza de casi un año y medio en solucionar el problema en la Sociedad de Naciones, y facilitó el posterior estallido de la Segunda Guerra Mundial pese a su resolución por la paz.

El sobrenombre de Madariaga lo sugiere su "idealismo", frente al "realismo" imperante tanto en Madrid como en Ginebra. La sociedad internacional bajo la dirección de la institución ginebrina, sin calmar nunca esta rivalidad, siguió el camino hacia su ruina. En consecuencia, la diplomacia española, que asimismo experimentó esta oposición, principalmente entre Madariaga y Azaña, colaboró irónicamente en romper la paz mundial, en contradicción con su pacifismo.

**Fuentes documentales**

Archivo General de la Administración (AGA), Sección Asuntos Exteriores (AE), Alcalá de Henares.

Archivo Histórico Nacional (AHN), Sección Diversos, Fondo Azaña, Madrid.

**Bibliografía**

AZAÑA, Manuel, *Diarios completos. Monarquía, República, Guerra Civil*, Barcelona, Crítica, 2000.

CALLEJA DÍAZ, María Estrella, "El conflicto de Manchuria en la Sociedad de las Naciones (1931－33)", *Cuadernos de Historia Contemporánea* (Madrid), 13, 1991, pp. 73－96.

EGIDO LEÓN, Ángeles, "La dimensión internacional de la Segunda República: un proyecto en el crisol", en TUSELL, Javier, AVILÉS, Juan y PARDO, Rosa (eds.), *La política exterior de España en el siglo XX*, Madrid, Biblioteca Nueva, 2000, pp. 189－220.

IRIYE, Akira, *Nihon no gaikou (La diplomacia de Japón)*, Tokio, Chuoukouronshinsha, 1966.

MADARIAGA, Salvador de, *España. Ensayo de historia contemporánea*, Buenos Aires, Hermes, 1955.

—, *Memorias (1921－1936). Amanecer sin mediodía*, Madrid, Espasa－Calpe, 1974.

NEILA HERNÁNDEZ, José Luis, "El proyecto internacional de la República: democracia, paz y neutralidad (1931－1936)", en PEREIRA, Juan Carlos (coord.), *La política exterior de España (1800－2003)*, Barcelona, Ariel, 2003, pp. 453-474.

OCHOA BRUN, Miguel Ángel, *Historia de la diplomacia española. Apéndice I*, Madrid, Ministerio de Asuntos Exteriores, 2002.

PRESTON, Paul, "Salvador de Madariaga, un Quijote en la política", en *Las tres Españas del 36*, Barcelona, Plaza & Janés, 1998, pp. 177－207.

QUINTANA NAVARRO, Francisco, *España en Europa, 1931－1936*, Madrid, Nerea, 1993.

—, "Salvador de Madariaga, diplomático en Ginebra (1931－1936). La película de la política exterior de la II República", *Historia Contemporánea* (Bilbao), 15, 1996, pp. 107－124.

RIOSALIDO, Jesús, "El expediente diplomático personal del embajador don Salvador de Madariaga", en VV. AA., *Salvador de Madariaga, 1886－1986*, Ayuntamiento de La Coruña, 1987, pp. 89－96.

# ボリビアの先住民教育
## —先住民に対する教育制度・教育改革をめぐって—

池田　玲子

### はじめに

中央アンデスに位置するボリビアは、ラテンアメリカの中でも先住民人口比率が高い国々の一つに数えられる。スペイン入植以降、長く疎外状況に置かれてきた先住民に対する教育の提供が法的に認められたのは、1994年に行われた教育改革においてである。これは、ボリビアと同様に高い先住民人口比率を示すメキシコ、グアテマラ、エクアドルにおいて 1920 年代に先住民教育が法的に保証された時期に、約半世紀遅れてのことであった[1]。

しかし、ボリビアの教育システムや教育法の公布といった制度上の進歩に反し、先住民の教育状況が急激に発展したと認められるような結果は出ておらず、ただ緩やかな識字率の上昇を示しているのみである。先住民の教育水準の発展を表す指標の一つである「識字率」を例に挙げると、2001 年に行われた最新の国勢調査によれば、ボリビア全体の識字率は 86.7%である[2]。また国連開発計画のデータによると、ボリビア全体の識字率はラテンアメリカ主要諸国の中においては最下位に近い数値を示している。一方、ラテンアメリカ全体の識字率は世界第３位に位置しているため、一見数字上では憂慮の必要がないと見なされがちである（表２・３参照）[3]。しかし、ボリビアの場合、実際の教育水準は国内全体を総括した識字率には正確に反映されない。なぜなら地域別に識字率が分散しているためである（表１参照）。特に都市部と比較した場合、農村部における識字率の低さは目を見張るものがあり、これは教育分野の一問題点とな

---

[1] MOYA, Ruth (1998), "Reformas educativas e interculturalidad en América Latina". En: *Revista iberoamericana de educación*, Madrid, OEI, pp.105-188.

[2] ボリビアにおいては約 10 年ごとに国勢調査が行われており、今回参考にした 2001 年の国勢調査の一つ前は 1992 年のものである。1992 年のデータによると、ボリビア全体の識字率は 80.0%であり、2001 年までの約 10 年間の間に全体の識字率は 6.7%上昇した。表１参照。

[3] 世界の五大陸を「東・中央ヨーロッパ」、「東アジア・太平洋」、「ラテンアメリカ・カリブ」、「アラブ」、「アフリカ」、「南アジア」の６地域に分類した場合。

っている。

都市部と農村部を結ぶ交通機関の発展や、先住民側による商業機会の拡大に対する需要に伴い、頻繁に先住民が都市部へ移動する姿が見られるようになった。この人口流動に準ずる形で、彼らがボリビア国家全体の第一公用語であるスペイン語を用いる機会は急増したのである。このような両地域間における交流機会の拡大により、共通言語の習得は彼らの生活発展に向けた基礎的な必須条件となった。しかし農村部の識字率の低さは一向に大幅な改善が見られないままである。この点にはボリビア各地、各分野に共通して見られる「多様性」という特徴が根底にあると考えられよう。その中でも、第一に民族の多様性、第二に地理状況の多様性、第三にこれらの現状に伴う言語の多様性、第四に文化の多様性が挙げられる。つまり上記の国家的特長が要因となり、とりわけ先住民の発展プロセスに関してボリビアが抱える問題は、より一層複雑化するのである。

本稿では、上記の国家的特徴の一つである、民族の多様性を考慮し、初めて先住民教育を法的に認知する記述がなされた1994年教育改革の成果に関して、識字率を一指標として用いた考察を行う。

## 1．　ボリビアにおける先住民の様相

ボリビアは地理学的に「アンデス地域（オルロ、ポトシ、ラパス、コチャバンバの一部）」、「アルティプラノ・チャコ地域（チュキサカ、コチャバンバ／タリハ／ポトシ／ラパスの一部）」、「アマゾン地域（サンタクルス、パンド、ベニ、タリハ／チュキサカ／ラパス／コチャバンバの一部）」の三地域に分類される。「アルティプラノ」は首都ラパス近くに広がる高原地域を、「チャコ地域」はボリビア・パラグアイ・アルゼンチンに広がる平原地域を指す。また、「アンデス地域」と「アルティプラノ・チャコ地域」の境界は重なっている部分がある。その点を考慮し、本稿においては地理学的、人類学的分類を統合し、「アンデス系（約400万人）」と「アンデス系以外（約20万人）」に分類する。更に細かく分類すると、ボリビアの先住民グループの数は、両グループを含め現在約36に上る（表4参照）。彼らが普段の生活の中で用いる言語の内、話者の多いものから大別すると、アンデス地域では、「ケチュア語（約250万人）」、「アイマラ

語（約160万人）」である。アンデス以外の地域では「グアラニー（約7万人）」、「チキターノ（約5万人）」が話者数の多い言語となっている（表4参照）[4]。

もともと、先住民の多くは都市部からの遠隔地にあたる地方の農村部出身である。しかし近年、生活の糧を獲得する目的により拡大した商業活動は更なる広がりを見せ、これに伴い彼らの都市部への人口流動が急増している。しかし都市部へ移り住む大半の先住民の生活は不安定なまま、農村部と都市部間を暫時移動しながら生活する、もしくは都市周辺部に貧民居住地域を構成して半永久的に居住するようになる。

この社会状況に従い、主に都市部において公用語として用いられるスペイン語習得への需要が高まり、20世紀後半、彼らの教育機会の拡大が公的に図られるようになった。

## 2．先住民教育の公的認知

20世紀に入り、1955年と1994年に政府による教育改革が実行されたが、先住民を含めたボリビア国民の多様性が初めて公式に認められたのは後者の1994年の教育改革においてである。この取り組みに拠り発布された教育改革法には、国家が抱える四つの多様性(民族・地理・言語・文化)を法的に保証する記述に並び、あらゆる民族への教育保証に関する記述が見られる。1994年の教育改革法が施行される以前には、先住民の存在は教育制度上では重視されておらず、この時代に学齢期であった現在の成人、特に先住民女性は教育機会に恵まれなかった[5]。

そのため、彼女らが成人になった現在、先住民女性の文盲率の高さが問題視されている。この流れを受け、1994年に教育改革法が施行された。その結果、政府だけではなく国内外の非政府組織、カトリックやプロテスタントの宗教団体、個人レベルでの技術・経済支

[4] ここに挙げた先住民人口は表4の数値を合計したものであるが、表内では20人以上の住民を含むグループに関する数字は、一の位が0で統一されているため概数と見なす。

[5] 学齢期：ボリビアの義務教育期間は、前期中等教育年数を初等教育に含めた8年間であり、年齢に置き換えると6歳から14歳までの生徒を対象としている。しかし、遅れて入学する者や、留年者が多いことから、在学者の年齢や終了年齢には、かなりのばらつきが見られるのが現状である。

援や先住民自らの学習に対する意識の高揚が見られるようになった。その結果、数字上では国全体の識字率は徐々に上昇してきている[6]。

### 3．地方の過疎化と教員不足

先住民教育の重要性に対する一般国民の理解が高まる傾向に反し、過疎化が深刻化している農村部の教育状況は、都市部と比較すると明らかに教育改善に対する取り組みが遅延している。一般的に都市部の教育制度の改善を優遇視する傾向があるためである。つまり、1994年教育改革の狙いと、その対象である先住民を取り巻く現実との間にずれが生じているのである。

例えば、地方においては教育機関の不足により、都市部の師範学校を卒業した教員免許取得者が、学校設備や生活面において都市部の生活の利便性とは明白にかけ離れた地方での勤務を受け入れない傾向がその一つとして挙げられよう。そのため、地方の教員不足の現状を打破することを目的とし、1994年の改革以降、先住民の学齢期児童に対する公教育政策の一環として、「異文化間バイリンガル教育」が定められた。また当分野においては、先住民の中から専門教員を養成することを目的として「INS－EIB」が設立された[7]。

しかし、このような制度改革と旧態依然の様相を留めた先住民の現状との矛盾から、地方の中でも特に先住民居住地域である農村部においては、未だ教員養成機関の発展はあまり望めず、一方でこのような人口流動の悪循環は繰り返されるばかりである。

### 4．先住民の生活サイクルと教育制度の不一致

ボリビアの公教育部門においては、初等教育段階までが義務教育と定められている。しかし、先住民共同体においては、通学の形態

---

[6] ボリビアの先住民居住地域が直面する地理的疎外状況を配慮し、ラジオを用いた「遠隔教育」が実行されたことは、新しい教育形態の導入例の一つとして特筆すべき点である。

[7] INS－EIB：異文化間バイリンガル教育専門高等学校(Instituto Normal Superior de Educación Intercultural Bilingüe)。ボリビア教育文化スポーツ省(Ministerio de Educación, Cultura y Deportes－MECyD)と GTZ (Cooperación Técnica Alemana)によって設立された。GTZ はボリビア政府からの養成を受け、先住民教育普及活動への技術支援を開始したドイツ政府によって結成された。ボリビアにおいては、主にケチュア語・アイマラ語圏に設立された。

を取る学習制度に重きを置いた生活が歴史的に営まれてきたわけではない。先住民共同体において、子供は社会の労働財産であり、先住民の子弟が各家庭の労働に従事し、経験から仕事を学ぶことが第一の学習方法として重視されてきたのである。特に先住民女性に対する教育が同じく男子に対するものより軽視されてきた事実は、決して高いとは言い難い現在の先住民女性の教育水準に反映されていると言えよう。

そのため、彼らの多くは一度入学しても、学校システムと生活サイクルのずれから順応出来ず、義務教育年限の早期において何年も留年を繰り返した結果、中途退学に至るのである。この現状が、多くの文盲を生み、さらに農村部における教育機関の不足事態を生み出すのである。近年、こうした因習的な先住民の思考傾向は徐々に変化の兆しを示しつつある。学齢期を教育機関に所属せずに過ごしてきた現代の成人先住民の間で、都市部とのアクセスを保ち、生活の糧を得ながらも更なる能力の発展を目指し、再学習を望む声も多く聞かれる。

## 5．先住民専門教育分野の誕生

1994年に行われた教育改革の影響を受け、教育制度とその受益者でなければならない先住民の生活サイクルとの間に見られる矛盾点を考慮し、15歳以上の成人に対しては、公教育とは別枠に定められた「代替教育」の一環である「成人教育」分野において「識字教育」部門が確立された。一方、成人教育領域に年齢が達していない先住民の子弟に対しては、「公教育」の一環として「異文化間バイリンガル教育」部門が確立されたのである[8]。

識字教育部門の場合、公教育と別の領域で計画が実行されることから、政府が直接関わる機会以上に、前述の国内外の援助機関が教育提供を担っていることが多い。その点から、教育分野だけではな

[8] ボリビアにおいては「Educación Intercultural Bilingüe (EIB)」、隣国のエクアドルやペルーにおいては「Educación Bilingüe Intercultural (EBI)」との呼称がなされている。「Bilingüe」と「Intercultural」の順列には、文化と言語のどちらに重きを置いて活動するかということを反映していると言われる。(筆者の個人的なインタビュー経験より)

く、政治・経済などの教育政策分野を専門に担当する団体から、建築や技術指導などを専門とする数々の団体まで、多様な専門分野を担当する援助機関により、ボリビアの識字教育分野は支えられているといえよう。

他方、先住民の子弟に対する「異文化間バイリンガル教育」は、ボリビアの第一公用語であるスペイン語のみを用いるのではなく、各先住民言語をスペイン語と並行して用いる事により、国民全体の識字率の向上を狙いとするものである。当分野は公教育の一環として定められているために、政府が直接関与することが多い。ボリビアにおいては、1994 年の改革以降、ペルーの試みを受け継ぐ形で、「異文化間バイリンガル教育」の支援活動経験を持つ「ドイツ技術協力公社（GTZ)」の協力を得て開始された。これは、1980 年代に「異文化間バイリンガル教育」分野が発展した隣国のペルーから影響を受けて開始されたものである。現在、当分野はコチャバンバ県サン・シモン大学に本部を置く PROEIB－Andes によって、計画と実行が続けられている。今日 10 年余りが経過したことになるが、この影響は徐々に国全体の識字率上昇に反映されつつある[9]。

## おわりに

1994 年以降、ボリビア政府によるものだけではなく、国内外の各援助機関の専門分野やそのレベルに応じ、実に広範囲に渡る取り組みが行われてきた。これは先住民教育が法的に認められてから、比較的短い期間において見られる教育分野の一成果と認めるべき事実である。なぜなら、20 世紀の後半まで、長く法的に疎外されてきた先住民の教育状況の改善は、同時に彼らの生活保証に関係してくるからである。確かにボリビアにおける教育状態は全ての国民の需要を満たすことから程遠い状態にある。しかし、国全体の識字率の向上は、少なくとも教育発展の結果を反映していると言えよう。

一般的にスペイン語のみが用いられていると誤解されがちなボリビアの中に約 36 の民族が共生している事実は、ボリビアの様々な社

[9] PROEIB－Andes : Programa de Formación en Educación Intercultural Bilingüe para los Países Andinos (アンデス諸国異文化間バイリンガル教育形成プログラム)。

会問題の源ともなっており、時に政策発展の妨害要因と見なされる傾向にある。この点を考慮すると、一元的且つ包括的な評価基準だけでは、多様性を基盤とした当国家の現状を測る事は不可能とも言えよう。つまり、全体を把握するだけの識字率調査のみでは、1994年の教育改革法に記載されているような、民族・地理・言語・文化の多様性までも評価しきれているとはいえないのである。

また、ボリビアにおける先住民に対する活動、特にNGOによるものは現在300を超える(2003年現在)[10]。その活動対象とされる民族言語に偏在があることは明白であるが、数の上からは決して不足しているとは言えない。しかし、「『スペイン語』対『民族言語』」のような話者人口に関する対照的な関係が各民族言語間にも存在し、同じく各民族言語が所属する民族グループは、内包される人口に応じ、大規模なものと小規模なものに分類される。これにより、必然的に36の民族言語の内、話者の多い民族に対する教育政策が優先される状況が国家全体に見られるようになる。

また、成人を対象とする「代替教育」は学習者自らが内容を選択することが可能である上、年齢や性別による制限もなく、比較的柔軟な特徴を持っている。しかし逆にこの部門においては、義務教育のような各個人の能力を測る指標が少なく、流動的な特徴をもっている。一方で、この「柔軟性」は当分野の利点ともなり、時に弱点ともなりうるのである。この二面性を効率良く先住民自身の発展に近づけるためには、彼ら自身が一定の基準を用いて自らを評価するシステムを作り出すことが課題となりうるのではないだろうか。

民族・地理・言語・文化の多様性に従い生み出されてきたボリビアの先住民教育システムの柔軟性に並び、一定の評価基準がなければ、現在ボリビアの先住民教育の根底にある、基本的な悪循環が無限に繰り返されるばかりである。自ら活きる力と自信を彼らが手に入れることが出来れば、彼らの生活は活性化し、生活サイクル自体も潤滑に回るように変わるはずである。つまりボリビアの民族・地理・言語・文化に関する多様性に準じた取り組みの利点と欠点の二面性を国民が認識しつつ、柔軟な教育プロセスを実行することが求

[10] 国家統計局（INE）のホームページ(http://www.ine.gov.bo)より。

められるのである。

ボリビアにおける先住民に対する現在までの教育政策は未だ日が浅く、他国の取り組みや協力の下で実験段階にある。彼らの存在を認知する教育法の施行から約10年余り経つことになるが、システムの進歩と先住民の生活との均衡が保たれるまでは先住民教育に対する取り組みの過渡期であることを踏まえ、これから先の動向に注目したいところである。

**表1　ボリビア各地方の識字率**

(%)

| | 1992 | | | 2001 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 合計 | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 |
| ボリビア全体 | 80.0 | 91.1 | 63.5 | 86.7 | 93.6 | 74.2 |
| チュキサカ | 60.5 | 70.5 | 51.6 | 73.0 | 81.6 | 65.2 |
| ラパス | 83.1 | 91.5 | 75.3 | 88.6 | 95.2 | 82.4 |
| コチャバンバ | 78.8 | 87.4 | 70.9 | 85.5 | 92.6 | 78.8 |
| オルロ | 84.6 | 94.1 | 76.1 | 89.4 | 96.4 | 82.7 |
| ポトシ | 61.8 | 76.5 | 49.2 | 71.6 | 84.6 | 60.0 |
| タリハ | 78.8 | 87.3 | 70.7 | 85.9 | 92.1 | 79.9 |
| サンタクルス | 88.9 | 92.8 | 85.1 | 92.7 | 95.7 | 89.7 |
| ベニ | 87.2 | 91.0 | 83.0 | 91.1 | 93.8 | 88.1 |
| パンド | 79.0 | 82.1 | 74.5 | 89.6 | 92.1 | 86.3 |

出所：INE（国家統計局）のホームページ（http//www.ine.gov.bo）をもとに筆者作成。
対象：15歳以上の男女

**表2　主なラテンアメリカ諸国の識字率（2002）**

(%)

| | | | |
|---|---|---|---|
| ウルグアイ | 97.7 | コロンビア | 92.1 |
| アルゼンチン | 97.0 | エクアドル | 91.0 |
| キューバ | 96.9 | メキシコ | 90.5 |
| コスタリカ | 95.8 | ボリビア | 86.7 |
| チリ | 95.7 | ペルー | 85.0 |
| ベネズエラ | 93.1 | エルサルバドル | 79.7 |
| パナマ | 92.3 | グアテマラ | 69.9 |

対象：15歳以上

出所：UNDP（国連開発計画）のホームページ（http//www.hdr.undp.org）をもとに筆者作成。
※ペルー全体の識字率はボリビアより下回るが、人間開発指数はペルーの方が上回っている。
また、その他の国の識字率は人間開発指数の度合いに比例する。

表３　世界各地域の平均識字率（2002）

（%）

| | |
|---|---|
| 東・中央ヨーロッパ諸国 | 99.3 |
| 東アジア・太平洋諸国 | 90.3 |
| ラテンアメリカ・カリブ諸国 | 88.6 |
| アラブ諸国 | 63.3 |
| アフリカ諸国 | 63.2 |
| 南アジア諸国 | 57.6 |
| 発展途上諸国 | 76.7 |
| 極貧諸国 | 52.5 |

対象：15歳以上

出所：UNDP（国連開発計画）のホームページ（http//www.hdr.undp.org）をもとに筆者作成。

表４　ボリビアの先住民族グループ

（人口／人）

| アンデス地域 | | yuracare | 3500 | machineri | 150 |
|---|---|---|---|---|---|
| quechua | 2.500.000 | joaquinianos | 2500 | yuki | 140 |
| aimara | 1.600.000 | weenhayek | 2500 | moré | 100 |
| uru | 1500 | caviños | 2000 | araona | 90 |
| アンデス以外の地域 | | masetén | 1300 | tapiete | 80 |
| guaraní | 70000 | loretano | 1300 | guarasugwe | 45 |
| chiquitano | 50000 | ayoreos | 1000 | huaracaje | 40 |
| moxeno | 25000 | cayubaba | 900 | pacahuana | 20 |
| guarayos | 8000 | chácobo | 800 | maropa | 12 |
| movimas | 7000 | baure | 600 | leco | 9 |
| chimanes | 6000 | canichana | 600 | | |
| itonama | 5500 | esse-eja | 600 | | |
| tacana | 5500 | sirionó | 500 | | |
| reyesano | 4500 | yaminahuas | 200 | 計：36グループ | |

出所：*La Educación de jóvenes y adultos indígenas en Bolivia Informe Final*, 2000. pp.8～11をもとに筆者作成。

参考文献

ALBÓ, Xavier (2000), *Iguales Aunque Diferentes－Hacia unas políticas interculturales y lingüísticas para Bolivia*－, La Paz, HISBOL.

-------(2002), *Educando en la Diferencia－Hacia unas políticas interculturales y lingüísticas para el sistema educativo,* La Paz, EDOBOL.

D'EMILIO, Lucia (2002), *La educación indígena en Bolivia*, La Paz, Plural.

LÓPEZ, Luis Enrique (2000), *La Educación de jóvenes y adultos indígenas en Bolivia. Informe Final*, Cochabamba, PROEIB Andes.

MOYA, Ruth (1998), *"Reformas educativas e interculturalidad en América Latina"*. En: *REVISTA IBEROAMERICANA DE EDUCACIÓN*, Madrid, OEI.

VALDA CALDERÓN, Choque y LÓPEZ MARIACA, Conde (1994), *DATA － Revista del Instituto de Estudios Andinos y Amazónicos,* La Paz: Patrocinio de la Universidad Andina Simón Bolívar.

JICA:『国別貧困情報－ボリビア』, JICA, 2003.

教育改革法 1565 号
(http//www.minedu.gov.bo/pre/ley/ley1565.html)
(2005 年 5 月 11 日参照).

ボリビア憲法 (1995 年制定, 2002, 2004 年改正)
(http//www.georgetown.edu/pdb/Constitutions/Bolivia/consbolivl615.html) (2005 年 5 月 11 日参照).

国連開発計画 (http//www.hdr.undp.org) (2005 年 4 月 28 日参照).

国家統計局 (http//www.ine.gov.bo) (2005 年 4 月 28 日参照).

# 英語とスペイン語のいわゆる“falsos amigos”
## —語彙習得における言語干渉の克服に向けて—

岡本　信照
橋本　和美

### はじめに

一般に外国語習得の過程において「語法」の問題には学習者の多くが直面するであろう。目標言語の語彙の中に母語または既知の外国語と共有する語彙が多ければ、当然、語法上の問題は軽減される。しかし場合によっては、異言語間で語彙が似ているがゆえに、かえって習得の妨げになることが起こり得る。例えば、すでに英語を学習済みのスペイン語学習者が、スペイン語の idioma「言語」、etiqueta「ラベル」、copa「グラス」といった語の意味を英語の idiom、etiquette、cup からの類推で「熟語」、「礼儀」、「カップ」と決めつけて記憶してしまうケースが少なくないのである[1]。

応用言語学では、異言語間で共有される同族語(cognados)が異なった意味で具現化する語彙群のことを“falsos amigos”（英：false friends、仏：faux amis)「偽りの友」と呼んでいる[2]。前述のような学習者が犯す誤りは、まさしくこの falsos amigos に起因する言語干渉の例と言えよう。

筆者は数年前より、主としてスペイン語中級者を対象とした語彙教授法の構築を目指している。今述べた英語とスペイン語の falsos amigos による言語干渉は、学習者が語彙習得において直面する興味

---

[1] 和文西訳の際に、例えば Asiste a la fiesta.「パーティに出席する」とすべきところを*Atiende a la fiesta.とする学習者は例年少なくない。明らかに、英語の attend the party の類推から来る誤用である。英西間での共通語彙に意味のずれがある場合の誤用は、筆者の経験から、和文西訳において顕著になる。

[2] もちろん、falsos amigos は英西間に限らず、ロマンス諸語の間でもよく見られる。イタリア語の guidare、màcchina は語源的にはそれぞれスペイン語の guiar「案内する」、máquina「機械」に対応するが、guidare una màcchina といえば「車を運転する」の意味になる。フランス語の rompre は明らかにスペイン語の romper と同族語だが、後者とは異なり、「(関係・契約などを)断絶する、遮る」といった抽象的な用法しかなく、物理的な意味での「壊す、割る」といった意味はない（その場合は casser または briser)。

深い事例の一つである。それゆえ、本稿では、主として中級レベルのスペイン語学習者に必要と思われる語彙の中で、英語語彙とのいわゆるfalsos amigosについて考察し、今後の語彙教授法の資料としたい。

## 1. falsos amigosの定義と考察対象

田中他(1988)によると、falsos amigosは「形態が似ているが、意味が異なる同族語」と規定されている[3]。例えば、英語のignore「無視する」とスペイン語のignorar（またはフランス語のignorer)「知らない」のような場合や、「不快」という漢語が日本語では「不愉快」の意味であるのに対して中国語では「速くない」という意味で使用される場合などがその典型である。

小池他(2003)では、「異言語間で形態か発音が似ていながら、意味が異なる語句の一対を言う」と定義した上で、①類似形態の場合((独) Kind「子供」—（英）kind「親切な」)、②類似発音の場合（(日）銭—（米）cent）に分類している[4]。

ここに引用した定義に準拠すれば、(英）saber「サーベル」と（西）saber「知っている」、(英）once「一度」と（西）once「11」のような偶然の形態的一致も含まれることになる。つまり、falsos amigosと認定される異言語間での形態的類似（または一致）が、1)同一の語源を共有するためか、2)借用によるためか、3)偶然によるものかといった歴史的理由は一切問われないことになり、これは純粋に共時的な辞書学の用語であると言える。

しかしながら、すでにある程度の英語の知識を持ったスペイン語中級レベルの学習者を対象とするのであれば、英西間で語形が偶然一致する語彙を集めたところで、特に教育的価値があるとは思われない。それゆえ、語形が偶然一致するものはここで考察の対象外とし、同一の語源を共有することによる必然的類似の場合のみに限る。

必然的な語形の類似と言えば、英西間で比較的近代になってから借用されたfalsos amigosも含まれる。例えば、スペイン語のwáter

---

[3] 田中春美他編『現代言語学辞典』成美堂、1988、「false friends」の項目参照。

[4] 小池生夫他編『応用言語学事典』研究社、2003、「フォールス・フレンズ」の項目参照。

「トイレ」は英語の water からの借用語であり、英語の俗語語彙 vamoose「ずらかる」はスペイン語の vamos に由来する。しかし、(西) wáter、(英) vamoose といった語が、英語における water やスペイン語における vamos と同等の重要性を持っているとは考え難い。つまり、本稿で対象とする falsos amigos は、スペイン語中級学習者にとって、英西ともに同等の重要性が認められるものに限定すべきであろう。

次に問題になるのは、英西間における意味の相違の度合いである。例えば、(英) notorius「悪名高い」と (西) notorio「周知の、有名な」のような意味上の相違はどう扱うべきであろうか。両者とも [+一般的知名度の高さ] という意味素性は共通だが、前者には常に負の価値評価が加わるのに対し、後者は [±価値評価] という特徴に関して中立的である。いずれも厳密には両者を同義と扱うことはできず、むしろこれは語彙教育上、重要な意味の相違と見なすべきであるため、ここでの考察対象となる。

英西間で語源を共有する基礎語彙であり、辞書の第一義も同じだが、派生的意味に差異が生じるという場合もある。例えば、スペイン語の flor は「花」の他に「お世辞」の意味でも使用されるが、英語の flower にその意味はない。厳密には flower = flor とは断定できないために、この場合も falsos amigos に含まれることになる。しかし、いかなる語彙にもその言語内部で独自にコンノテーション (含意) が発達することは珍しくなく、その派生的意味が教育的見地からどこまで重要と見なすかは場合によると言わざるを得ない。英語の collocate とスペイン語の colocar(se)を比べてみると、両者とも「配置する」という意味を共有し、通時的にもラテン語の collocare「据える、配置する」に由来するが、スペイン語の colocar(se)には「就職させる (する)」という意味もあり、しかもこの派生的意味の方で使用される可能性が高い。それゆえ、この場合の派生的意味は教育上重要視しなければならない。したがって、英語とスペイン語のペアのうち、いずれか一方に派生的意味があり、他方にそれがないという falsos amigos の場合は、あくまで派生的意味の頻度が重要な鍵となる[5]。

[5] 英語 elevator「エレベーター」に対応するスペイン語 elevador は、スペイン本国では「昇降機」を指し、意味にずれがあるため falsos amigos と見な

## 2. 同族語としての透明性

falsos amigos と見なされる語彙の中には、同族語であることが明らかなものと、同族関係が不透明なものが含まれる。本節では、こうした英西間の同族関係の透明性について考察してみたい。

例えば、(英) idiom「熟語」－(西) idioma「言語」、(英) compromise「妥協」－(西) compromiso「約束、責任」といったペアは、即座に同族語だと認識するのが容易な falsos amigos である。(英) applied と (西) aplicado の場合、後者は「勤勉な」の意味で使用されることが多いのに対して前者にこの意味はないため、やはり falsos amigos である。しかし、両者とも「応用の」という意味を共有している上に語形が類似しているため、同族関係の透明性は高い。

それとは反対に、(英) chant「聖歌」－(西) canto「歌」や[6]、voyage「航海」－viaje「旅行」といったペアの場合、意味は僅差とはいえ、学習者にとっては語形から即座に同族語だと認識し難いのではないだろうか。(英) exit「出口」－(西) éxito「成功」のように、語形がきわめて似ていても意味が大きく異なるものは、やはり同族関係に気づき難い。ましてや、(英) joke「冗談」－(西) juego「ゲーム、賭博」、(英) travel「旅行」－(西) trabajo「仕事」のように、語源を共有しているにもかかわらず、語形・意味とも大きなずれがあるペアは同族関係の透明性がさらに低くなる。さらには、(英) magazine「雑誌」－(西) almacén「倉庫」のようなアラビア語起源の語彙群の場合、アラビア語の冠詞に由来する形態素 al-の有無により、透明性は一層低くなる。

以上のことから、同族関係の透明性は語形の類似性のみならず、意味の類似性も大きく関与していることが明らかとなる。そこで、この

---

せるが、ラテンアメリカでは英語と同じ意味になる。同様の例に car－carro（スペインでは「荷車」、ラテンアメリカでは「自動車」）がある。しかし、本稿では、意味に地域差があるものは対象外とする。

[6] falsos amigos ではないが、change－cambio、chain－cadena などはいずれも同一起源である。英語の方はいずれもフランス語 (change、chaîne) からの借用語である。フランス語は母体となるラテン語の語頭子音/k-/に母音の/a/が後続すると yod が発生して硬口蓋音化し、k＞kj＞ʧ＞ʃ という音変化を経た。英語で ch を[ʧ]と発音するのは、11 世紀のノルマン征服時に大量のフランス語語彙が英語に入った際の発音が[ʧ]の段階であったためである。一方、イベロ・ロマンス語でこの変化は起こらなかった。その結果、スペイン語学習者にはこれらのペアが同族語であると認識し難くなっている。

ことを図式化すると次のようになるであろう。

| 透明性 | 英 － 西 | 形態 | 意味 |
|---|---|---|---|
| 高 | applied － aplicado | 類似 | 一部相違 |
| ↑ | idiom － idioma | 類似 | 僅差 |
| | chant － canto | やや類似 | 僅差 |
| | exit － éxito | 類似 | 大差 |
| ↓ | joke － juego | 大差 | 大差 |
| 低 | magazin － almacén | かなり大差 | 大差 |

次節では、この同族関係の透明性を基準として、スペイン語中級者レベルで必要と思われる語彙の falsos amigos を分類してみたい。

### 3. 英西間の falsos amigos の分類

次に掲げる一覧表は、スペイン語中級者にとって必要と思われる語彙のうち、英語と語源を共有しながら意味が異なる（あるいは一部異なる）例を筆者が独自に集めたものである（ゴシック体は英西間で共有されない訳語）。左列は英語、中央列がスペイン語で、右列には語源となる語を参考までに付記した（L=Latin; VL=Vulgar Latin; LL=Late latin; ML=Middle Latin; Gr=Greek; F=French; OF=Old French; It=Italian; Gmc=Germanic; Ar=Arabic)。ただし、これまで述べたことに基づき、語形が偶然類似するものや、一方における独自の派生的意味の頻度があまりにも低いと思われるもの、あるいは英語から直接借用されたものは敢えて除外した。分類方法は、英西間における意味の共有部分の有無でまず大きく区分し、意味の共有部分がないタイプについては同族関係の透明性によってさらに下位区分するというものである。

#### 3.1. 英西間で意味の一部を共有するタイプ

① 英語・スペイン語とも第一義は共有するが、スペイン語の方にのみ派生的意味があり、しかも派生的意味で使用される可能性が高いペア（ただし、派生的意味が共有され、一方が第一義を欠く場合も含む）［英≦西］:

| | | |
|---|---|---|
| assist 助ける・手伝う | asistir 助ける・手伝う・(+a)出席する | (L)assistere そばに身を置く・近づく・助力する |
| aprove 是認する | aprobar 是認する・合格する | (L)approbare 是認する・賛同する |
| applied 応用の | aplicado 応用の・勤勉な | (L)applicatus 貼り付いた |
| career 経歴・生涯・職業 | carrera 経歴・生涯・職業・競争・街路 | (ML)carraria 運送(路)＜(L)carrus 荷馬車 |
| collocate 配置する | colocar 配置する・就職させる；(～se)就職する | (L)collocare 置く・据える・嫁がせる |
| conduct(*v*)導く・指揮する・運営する | conducir 導く・指揮する・運転する | (L)conducere 結合させる・賃借する・雇う |
| conference 会議・協議 | conferencia 会議・協議・講演・長距離通話 | (L)conferentia(-m)集会 |
| creature 創造物・生き物 | criatura 創造物・生き物・子供・幼児 | (L)creatura(-m)被造物・生き物 |
| dormitory 寮 | dormitorio 寮・寝室 | (L)dormitorium 寝室 |
| education 教育・教養 | educación 教育・しつけ・礼儀作法 | (L)educatio(-nem)教育 |
| effective 効果的な・有効な・実際の | efectivo 効果的な・有効な・実際の；(*m*)現金 | (L)effectivus 実際的な |
| entertain 楽しませる・もてなす | entretener 楽しませる・引き止める・長居させる | (VL)*intertenere 保持する |
| embarrass 邪魔をする | embarazar 邪魔をする・妊娠させる | (VL)*imbarratiare 邪魔をする |
| firm 商会 | firma 商会・署名・記名 | (L)firmare 確信する |
| logical 論理的な | lógico 論理的な・当然の | (L)logicus 論理的な |
| metallic 金属(製)の | metálico 金属(製)の；(*m*)現金・硬貨 | (L)metallicus 金属の |
| opposition 反対(派)・対立・抵抗 | oposición 反対(派)・対立・抵抗・採用試験 | (L)oppositio(-nem)対置・対立・反論 |
| oration 演説 | oración 演説・祈祷・文 | (L)oratio(-nem)発話・修辞・祈祷 |
| ponder 熟考する | ponderar 重さを量る・賞賛する・熟考する | (L)pondere 重さを量る・熟考する |
| precise 正確な・緻密な | preciso 正確な・的確な・必要な | (L)praecisus 切り離された・短い・簡明な |
| pretend ふりをする・仮定する | pretender ふりをする・目論む・主張する | (L)praetenddere 前に伸ばす・口実とする |
| procure 獲得する | procurar 獲得する・～しようと努める | (L)procurare 留意する |
| professor (大学)教授 | profesor (一般に)教師・(大学)教授 | (L) professor(-em) 教師 |
| proper 適切な・正式の・ふさわしい・固有の | propio ふさわしい・固有の・自分自身の | (L)proprius 恒常的な・本来的な・独自の・固有の |
| remove 取り除く・移動させる | remover 取り除く・移動させる・かき混ぜる | (L)removere 運び去る・取り除く |
| repair 修理する | reparar 修理する・(+en)気付く | (L)reparare 再供給する・更新する・補充する |
| retire 引退する・退職する | retirar 引退する・退職する・取り除く・片付ける・引き出す・撤回する | re-再び+tirare(?)引く(起源不詳) |

| | | |
|---|---|---|
| sane 正気の | sano **健康な・無傷の**・正気の | (L)sanus 健全な |
| seal 封印 | sello 封印・**切手・印紙**・消印 | (L)sigillum 印・封・秘密 |
| service サービス・奉・公共事業・施設・勤務・兵役 | servicio サービス・奉仕・公共事業・施設・勤務・兵役・**トイレ** | (L)servitium 隷属 |
| sort 種類・性質・方法 | suerte **運**・くじ・種類・方法 | (L)sors(-tes)くじ・運勢 |
| tend (+to)傾向がある | tender (+a)傾向がある・**広げる・伸ばす・干す** | (L)tendere 張る・広げる・伸ばす・向ける |
| value 価値・価格 | valor 価値・価格・**勇気** | (L)valor(-em)価値 |

②英語・スペイン語とも第一義は共有するが、英語の方にのみ派生的意味があるペア（すなわち①の逆）[英≧西]：

| | | |
|---|---|---|
| appear 現れる・**～のように見える** | aparecer 現れる | (L)apparere 現れる、明瞭になる |
| apply 適用する・くっつける・充当する・(+for)**志願する** | aplicar 適用する・くっつける・充当する | (L)applicare そばへ置く、上陸させる・結び付ける |
| associate 参加(入会)させる・関連付ける・**連想する**・(+with)**交際する**・**提携する** | asociar 参加(入会)させる・関連付ける | (L)associare 組み合わせる・結社する |
| attend 注意を払う・世話をする・**出席する** | atender 注意を払う・世話をする | (L)attendere 伸ばす・注意を向ける |
| commit 委任する・(過ちを)犯す | cometer(過ちを)犯す | (L)commitere 組み合わせる・犯す・委ねる |
| concern(v)関係する・**心配させる** | concernir (+a)関係する | (LL)concernere 関係する<(L)con-共に+cernere 区別する |
| fix 固定させる・(視線などを)じっと向ける・決める・**修理する**・**支度する** | fijar 固定させる・(視線などを)じっと向ける・決める | (L)figere 結び付ける・固定している・締める |
| letter **手紙**・文字・文学 | letra 文字・文学 | (L)littera(-m)文字・文学 |
| manage(v.)経営する・管理する・操縦する・(+to do)**うまくやり遂げる** | manejar 操縦する・経営する・管理する | (VL)*manidiare (馬を) 御する<(L)manus 手 |
| office **事務所**・**官職**・任務・聖務日課 | oficio 職務・役割・聖務日課 | (L)officium 職務・好意・実直 |
| present(v.)提出する・紹介する・発表する・上演する・**贈る** | presentar 提出する・紹介する・発表する・上演する | (LL)praesentare<(L)praesens(-tis)出席の |
| sentence 判決・**文** | sentencia 判決 | (L)sententia(-m)見解・決議・判決・金言 |
| specific 特殊な・特定の・特効性のある・**明確な**・**具体的な** | específico 特殊な・特定の・特効性のある | (LL)specificus 特殊な<(L)species 種 |

③英語・スペイン語とも部分的には共通の意味（必ずしも第一義では

ない）を有するが、相互に異なった派生的意味が見られるペア［英＝西；英≠西］：

| | | |
|---|---|---|
| accord(*v*)一致する・調和する・(許可などを)与える・(敬意などを)示す | acordar 一致する・調和する・決定する・(～se)思い出す | (VL)*accordare 調和する＜(L)ad-～へ+cor(des)心 |
| apology 弁護・謝罪 | apología 弁護・賞賛 | (L)apologia(-m)反論・言い訳 |
| assume(任務を)引き受ける・想定する・～を本当だと思う・装う | asumir(任務を)引き受ける・容認する・達する | (L)assumere 引き受ける・達する・わが物とする |
| college 専門学校・協会・(単科)大学 | colegio 専門学校・協会・(一般に)学校 | (L)collegium 官僚・団体 |
| conductor 車掌・案内人・指揮者 | conductor 運転手・指揮者 | (L)conductor(-em) 請負人・雇い主 |
| dispose 配置する・(+of)処分する・譲渡する | disponer 配置する・(+de)所有する・自由に使える | (L)disponere 配分する・整頓する |
| excuse(*v*)言い訳する・許す | excusar 言い訳する・～しないで済ませる | (L)excusare 弁護する |
| expedient(*adj*) 好都合の；(*n*)急場しのぎの方策 | expediente 関係書類・審査・経歴(証明書)・急場しのぎの方策 | (L)expediens(-tes)＜expedire 自由にする・救い出す・解き明かす |
| fine 細かい・薄い・純度が高い・精巧な・上質の・元気な・晴れた | fino 細かい・薄い・純度が高い・上質の・熟練した・礼儀正しい | (LL)finus きめ細かい・純良な＜(L)finis 目的・極度 |
| gracious 好意的な・親切な・趣味の良い・上品な | gracioso 好意的な・親切な・滑稽な；(*m*)道化 | (L)gratiosus お気に入りの・人気のある |
| master 達人・師匠・親方・雇い主・修士 | maestro 達人・師匠・親方・先生・作曲家 | (L)magister(-trem)長官・指導者・師匠 |
| note 覚書・通達・注釈・音符・注目・特色 | nota 覚書・通達・注釈・音符・成績・伝票 | (L)nota(-m)印 |
| paper 紙・書類・新聞・論文 | papel 紙・書類・役割・役柄 | (L)papyrus パピルス紙＜(Gr) papyrus |
| parade パレード・誇示 | parada(軍の)パレード・停止・停留所 | (L)paratus 装備した＜parare 準備する |
| party 政党・部隊・パーティ | partido 政党・管轄区・試合 | (L)partitus＜partiri 分割する |
| picture 絵画・写真 | pintura 絵画・塗装 | (L)pictura 絵画 |
| presume 推測する・(+to do)敢えて～する | presumir 推測する・(+de)自惚れる | (L)praesumere 先取する推測する・敢えて～する |
| prevent 予防する・妨げる | prevenir 予防する・準備する | (L)praevenire 先んじる・妨げる |
| realize 実現する・換金する・悟る・実感する | realizar 実現する・換金する・実行する | ＜(LL)realis 実物の・現実の+-are＜(L)res 物 |
| romance ロマンス語・恋愛小説 | romance ロマンス語・ロマンセ(8音節の叙事詩) | (VL)*romanice ロマンス語で書かれたもの |
| table 食卓・食事・(一覧)表 | tabla 板・(一覧)表 | (L)tabula(-m)板・絵画・法典 |
| treat 扱う・待遇する・処理する・交渉する・論ずる・治療する・みなす・おごる | tratar 扱う・待遇する・処理する・交渉する・論ずる・治療する・～しようと努める | (L)tractare 引き回す・取り扱う・処理する・待遇する・論ずる |

3.2. 英西間で意味の共有部分がないタイプ

④英語とスペイン語で同族関係の透明性は高いが、意味は完全に異なるペア（中にはあまりにも意味の相違が大きいために、同族関係を認識し難いものも多少含まれる）[英≠西]:

| | | |
|---|---|---|
| actual 実際の | actual 現在の | (L)actualis 活発な・現在の |
| addict(+to)中毒になる・夢中になる | adicto(+a)(思想などに)賛同している・(麻薬を)常用している | (L)addictus ＜addicere～にふける |
| affection 愛情・愛着・好意 | afección 疾患 | (L)affectio(-nem)影響・性質・意向・愛着 |
| agenda 協議事項・忘備録 | agenda 手帳 | (L)agenda すべきこと ＜agere 駆り立てる |
| basement 地階 | basamento(建築の)基礎 | (L)basis(-em)基礎・土台 +-mentum |
| billion 10 億 | billón 1 兆 | (Fr)billion 1 兆 |
| blank(*adj*)白紙の・無表情な;(*n*)空白 | blanco(*adj*)白い;(*m*)白・空白・標的 | (VL)*blancus ＜(Gmc)*blankaz 白い |
| camp キャンプ・野営 | campo 野原・畑 | (L)campus(-um)畑 |
| carpet 絨毯 | carpeta ファイル・文書ばさみ | (It)carpita 敷き物 ＜(L)carpere 刈る |
| collar 襟 | collar ネックレス | (L)collare(-m)首輪 |
| compromise 妥協 | compromiso 責任・約束 | (L)compromissum 含意・協定・和解 |
| contest 論争する・奪い合う | contestar 答える・反論する | (L)contestari 証言する |
| cup 茶碗・カップ | copa グラス | (L)cupa 大桶・樽 |
| deception 欺き・まやかし | decepción 失望・落胆 | (L)deceptio(-nem)欺瞞・失望 |
| disgrace 不面目・恥 | desgracia 不幸・不運・災難 | (VL?)*des-～を欠いた+gratia 優美・好意・感謝 |
| dispense 分配する・(+with)～なしで済ます | dispensar 許す・免除する | (L)dispensare 分配する |
| equipage 装備・装身具 | equipaje(旅の)手荷物 | (Fr)equipage 装備・乗組員 ＜(Gmc)skipa 船(員) |
| etiquette 礼儀・作法 | etiqueta ラベル・レッテル | (OF)estiquette ラベル ＜(Gmc)*stikkan 貼る |
| eventual 結果として起こる・いつかは生じる | eventual 偶発的な・(仕事などが)臨時の | (L)eventum 結果・出来事・運+-al～な |
| exit 出口 | éxito 成功 | (L)exitus 外出・出口・成果 |
| fabric 布地・織物 | fábrica 工場 | (L)fabrica(-m)工場 |
| factory 工場 | factoría 在外商館 | (LL)factorium 搾油機 |
| flagrant 目にあまる・破廉恥な・極悪の | flagrante 現行犯の・一目瞭然の | (L)flagrans(-tes)燃えている・熱い・性急な |
| German ドイツ人・ドイツ語 | germano ゲルマン人 | (L)germanus ゲルマニア人 |
| idiom 慣用句 | idioma 言語 | (LL)idioma(-m)特異性 ＜(Gr)idioma |
| ignore 無視する | ignorar 知らない | (L)ignorare 未知である |

| | | |
|---|---|---|
| joy 喜び | joya 宝石 | (F)joie<br>＜(L)gaudium 喜び |
| language 言語 | lenguaje 言語活動 | (VL)*linguaticum<br>＜(L)lingua 舌・言語 |
| large 大きい・広い・多量の | largo 長い・多い・気前のよい | (L)largus 気前のよい・豊かな |
| lecture 講義・説話 | lectura 読書 | (ML)lectura(-m)読書 |
| library 図書館 | librería 本屋 | (VL)*libraria 本棚 |
| notorius 悪名高い | notorio 周知の・明らかな | (L)notorius 世に知らせる・公然の |
| parent(s)(両)親 | pariente 親戚 | (L)parens(-tes)(両)親・先祖 |
| pendant ペンダント | pendiente(*m*)イアリング；(*f*)坂；(*adj*)未解決の | (L)pendens(-tes)ぶら下がっている |
| phrase 句 | frase 文 | (L)phrasis 表現 |
| quiet 静かな・おとなしい・穏やかな・内密の | quieto 不動の・じっとした・穏やかな | (L)quietus 平穏な・平和な・休戦の |
| quit 中止する・手放す | quitar 取り除く・脱ぐ | (L)quietus 平穏な+-are |
| record(v.)記録する | recordar 思い出す・覚えている・思い出させる | (L)recordari 思い出す |
| reply 返事する | replicar 反論する・口答えする | (L)replicare 応答する・反射する |
| retain 保留する・保持する | retener 引き止める・天引きする | (L)retinere 確保する |
| sophisticated 洗練された | sofisticado 気取った・わざとらしい | (Gr)sophistes 詭弁家 |
| stamp 切手・印紙・消印 | estampa 版画 | (Gmc)*stampojan 叩きつぶす |
| success 成功 | suceso 出来事 | (L)successus(-um)接近・成果 |
| ultimate 究極の・最終の | último 最後の・最近の | (L)ultimus 最も遠離の・最終の |

⑤同一語源で意味が異なり、語形からは同族関係の透明性が低いペア

［英≠西］:

| | | |
|---|---|---|
| achieve 成し遂げる・(好結果を)獲得する | acabar 終える・仕上げる・(+de)～したばかりである | (VL)*ad～へ+caput 頭・端+-are |
| advise/ advice 助言(する)・勧め(る) | avisar/ aviso 知らせ(る)・警告(する) | (VL)*advisare<br>＜(VL)*advisum 見解 |
| boutique ブティック | bodega 酒倉・食料貯蔵庫 | (L)apotheca(-m)貯蔵庫<br>＜(Gr)apotheke |
| chair 椅子 | cadera 腰 | (L)cathedra 肘掛椅子<br>＜(Gr)kathedra |
| chant 聖歌・唱歌 | canto 歌 | (L)cantus(-um)歌 |
| card カード・券・はがき | carta 手紙 | (L)charta(-m)用紙<br>＜(Gr)khartes |
| cheer 元気な | cara 顔 | (LL)cara 顔＜(Gr)kara |
| intend 意図する | entender 理解する | (L)intendere 伸ばす・注意を向ける・志す |
| hazard 危険・冒険・運 | azar 偶然・(不)運 | (Ar)al-zahr さいころ |

| | | |
|---|---|---|
| joke 冗談 | juego ゲーム・賭博 | (L)jocus 冗談・からかい |
| magazine 雑誌・火薬庫 | almacén 倉庫・デパート | (Ar)al-makhzan 倉庫 |
| people 人々・国民 | pueblo 国民・町・村 | (L)populus 国民 |
| target 標的・目標 | tarjeta カード・はがき・名刺 | (OF)targette 小型の円盾 < (Gmc)targe 縁 |
| tent テント | tienda 店 | (L)tenta < tendere 張る |
| travel 旅行 | trabajo 仕事・苦労・論文 | (VL)*tripalium 拷問台 |
| voyage 航海 | viaje 旅行 | (LL)viaticum 長旅用の食料 |

## おわりに

すでに英語をある程度学習済みのスペイン語学習者が、その英語の知識を利用しながらスペイン語を習得する方法は、学習効率の観点から考えれば当然のことであり、何ら否定されるものではない。この英語からの類推という方法は、とりわけ語彙の増強を図る際に効力を発揮するだろう。ところが、そのことを絶対視しすぎると、本稿の冒頭で述べたような誤りに陥る危険性もあることは否定できない。そこで、学習者に対し、既成の辞書や語彙集とは別に、こうした英西対照の語彙表を予め提示することで、言語干渉を回避することが最大の狙いである。

さらには、次のような副次的効果も期待される。第一に、英語とスペイン語の共通語彙の多くは、もちろん通時的には関連していても共時体系としては所詮異なるという事実を学習者に実感させることができるであろう。これは一見自明のことのようだが、言語や文化の多様性を実感することは語学学習過程において重要なことである。第二に、使用頻度が比較的高い語彙は、多くの場合、多義的になりやすい。語彙習得過程において、頻用される語彙のさまざまな意味を覚えることは、語彙数そのものを増やすことと同程度の負担を学習者にもたらすものである。しかし、若干の語源学的な情報を加えることが意味の変遷過程を把握する一助となり、記憶の定着につながることも期待できる。またこのような作業の一つ一つが、英語とスペイン語の知識整理の好機となるのは言うまでもない。

本稿では取り上げなかったが、例えば（英）discuss－（西）discutir のように、たとえ辞書的な意味は同一でも（いずれも「討論する」）、英語の方はもっぱら他動詞であるのに対してスペイン語では他動詞と自動詞のどちらでも使用されるといった語法上の相違が見られる

場合や、3.1.の③で扱った（西）asumir は近年英語の影響で「推定する」の意味で用いられることもあり、徐々に(英)assume との falsos amigos ではなくなりつつあるという場合などがあり、こうした複雑な実情を前に今後検討の余地は大いにある。とはいえ、こうした英西間の falsos amigos を意識しながらの語彙習得法が何らかの授業方法や教材開発等に応用される可能性は一考の価値があるのではないだろうか。

## 参考文献


小池生夫他編（2003）:『応用言語学事典』研究社
小西友七他編（2001）:『ジーニアス英和大辞典』大修館書店
田中春美他編（1988）:『現代言語学辞典』成美堂
田中秀央編（1966）:『羅和辞典』増訂新版、研究社
寺澤芳雄他編（1999）:『英語語源辞典』研究社
秦隆昌他編（1990）:『西和中辞典』小学館
原誠他編（2005）:『クラウン西和辞典』三省堂
Corominas, Joan(1973): *Breve diccionario etimlógico de la lengua castellana*, 3ª ed., Gredos, Madrid.
Meißner, Franz-Josef(1996): "Palabras similares y semejantes en español y en otras lenguas y la didáctica del plurilingüismo", en Segoviano, Carlos(ed.): *La enseñanza del léxico español como lengua extranjera*, Vervuert/ Iberoamericana, Frankfurt am Main/ Madrid.
Onions, C. T.(ed.)(1983): *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford University Press.
Postigo Pinazo, Encarnación(1998): *Estudio contrastivo de los falsos amigos en inglés y en español*, Universidad de Málaga, Servicio de Publicaciones e Intercambio Científico, Málaga.
Prado, Marcial(2001): *Diccionario de falsos amigos inglés-español*, Gredos, Madrid.

# アロンソ・オルティスの『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』にみられる人間論について

加藤　さやか

## はじめに

アロンソ・オルティスは，15.世紀後半のカスティーリャ人文主義者である。同王国の人文主義の発展において彼の占める重要性はつねに，その研究の不十分さと共に研究者らによって指摘されてきた。その著『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』[1]（以下『対話』と略す。）は，1490 年代の初頭に著されたとされており，ラテン語の手稿本が現在スペインのサラマンカ大学図書館に保存されている。現代語訳としてはイタリア人研究者ジョバンニ・マリア・ベルティーニの手により 1983 年にスペイン語版が出版されたが[2]，その後本著に関する研究は，著者自身に関するものと同様十分になされてきているとは言い難い。

題名の示すところに因れば，未来の国王になるはずであったフアン王子の教育を目的として書かれたことは容易に推察されるが，その内容を見ると育児の注意点や，勉学や身体の訓練に関する忠告の羅列に終始する単なる教育マニュアルの類のものではない。対話の基盤を成しているのは「人間はいかにして善になり得るか」という問題であり，それに対する解答を見出すべくアリストテレスやキケロら古代哲学者や，アウグスティヌスやトマス・アクィナスなど中世キリスト教父をふんだんに引用しつつ論議が展開されていく，むしろ道徳哲学の書であることが分かる。

当時この「人間の善」は，「人間は現世で幸福になれるか否か」という問題と結びつき，イタリアを発祥として知識人の間で盛んに論議されたテー

---

[1] 原書は，*Liber de educatione Iohannis serenissimi principis et primogeniti regum potentissimorum Castellae Aragoni et Siciliae, Fernandi et Helisabet inclyta prosapia coniugum clarissimorum* を題名とする。

[2] ORTIZ, Alonso, *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Versión, notas e interpretaciones por Giovanni Maria Bertini (Madrid, 1983).

マであった。ルネサンスの潮流の中で，人間本来の価値を積極的に肯定し，また人間を共同体に属して生きるものと捉えた人文主義者たちは，中世以来死後に神の下でのみ到達できるとされていた「幸福」を現世の生の視点から論じようと試みた。ナポリで起こったバルトロメオ・ファツィオとロレンツォ・ヴァッラを中心とする論戦はよく知られており[3]，同論議は，15 世紀半ばフアン・デ・ルセナの著 *De vita beata*[4]によってカスティーリャにも持ち込まれ，以降多くの知識人の参加を促すこととなった[5]。

このような思想的背景の中でアロンソ・オルティスの『対話』を捉えると，人間の善と幸福という普遍的ともいえる哲学的テーマを，教育，とりわけ国王の後継者の教育という枠組みの中で論じた書として位置づけることができよう。本稿では，最初に著者アロンソ・オルティスとその著作『対話』に関し簡潔に記述した上で，本書の中でも重要かつ根幹的部分を占めると思われる，オルティスの人間論の考察に取り組み，人文主義の流れの中でその特徴を明らかにしていきたい。

---

[3] 1433 年に Lorenzo Valla がその著 *De vero bono* において示した幸福論が「エピクロス的」であるとして物議を醸した。Bartolomeo Fazio の *De vitae felicitate*（1443～1447 頃著）は Valla に対する反論とされる。両者及びその論戦についての研究に関しては，以下を参照。MARCHIORI, Claudio, *Bartolomeo Facio tra letteratura e vita*, Marzorati, Milán, 1971, pp. 71-81; GAETA, Franco, *Lorenzo Valla, Filologia e storia nell'Umanesimo italiano*, Instituto italiano per gli Studi Storichi, Nápoles, 1955, p. 182; TRINKAUS, Charles, *In our image and likeness. Humanity and divinity in italian humanist thought*. 2 vols, The University of Chicago Press, Chicago, 1970, I, pp. 200-209.

[4] 1463 年頃ローマにて執筆とされる。本著はカスティーリャでも大きな反響を呼び，1483 年サモーラ，1499 年ブルゴスと二度にわたって出版されている。

[5] カスティーリャ人文主義の研究者 Ottavio di Camillo は，戯曲『セレスティーナ』を例に挙げ，当時人間の最善と幸福というテーマが学生の間で論議されるに至るほど広く流布したことを指摘している。Cf. O. di Camillo, *Humanismo castellano del siglo XV* (Valencia: 1976), p. 245.

## 1. 著者アロンソ・オルティスと『対話』の概要

アロンソ・オルティスという人物に関し現存する記録は乏しい[6]。生年地は不詳であり，1507 年にトレドにて没したことが分かっている。サラマンカ大学で民法と教会法を修め，まだ学生の身分であった 1467 年にトレドのノンベラ Nombela の主任司祭の任命をうけ聖職者としての道を歩み始める[7]。同年及び，1473 年から 1478 年にローマ教皇庁に滞在していたことが分かっている[8]。このローマ滞在はオルティスにイタリア人文主義者との交流や書物購入の機会を与え，彼の思想形成に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。カスティーリャ帰国後，トレド司教座聖堂参事会員の職位に付き，1507 年同地で没するまでの間に王室付き主任司祭を務めたり，またメンドーサ卿やシスネーロス卿と共に祈祷書の編纂に携わったことも分かっている。オルティスの死後，その質，量ともに豊かな蔵書は彼自身の遺言によりサラマンカ大学の図書館に寄贈された[9]。

『対話』は，二十一章から成る第一巻と六十一章から成る第二巻とに分かれており，当時の著作に多く見られるように対話形式がとられている。対

---

[6] オルティス個人にまつわる記録の情報源としては，トレド司教座聖堂参事会の議事録及び Beltrán Heredia, *Bulario de la Universidad de Salamanca (1219-1549)* 3 vols. Universidad de Salamanca, Salamanca, 1966-1967, III を参照。

[7] 聖職者としてのオルティスの記録に関しては R. Gonzálvez Ruiz, "Alonso Ortiz" と "Alonso Ortiz y la edición Misal y Breviario", en *Piedras vivas, la Catedral de Toledo 1492: Mendoza y Cisnero. Dos legados artísticos y culturales* (Salamanca: 1992), pp. 41-42, 53 y 64-67 を参照。

[8] 1473 年から 1478 年のローマ滞在は，司教座聖堂参事会員の職を巡る訴訟に出席するためであった。詳細に関しては Gonzálvez の研究 "Las bulas de la Catedral de Toledo y la imprenta incunable castellana", en *Toletvm* 18, Toledo, 1986, pp. 24-25 を参照。

[9] サラマンカ大学に寄贈されたオルティスの蔵書について，Jacobo Sanz Hermida が興味深い論文を発表している。"Un capítulo oscuro de la historia de la Biblioteca Universitaria de Salamanca: la donación de libros de Alonso Ortiz", en BERESFORD, Andrew M. (ed.), *'Quien hubiese tal ventura': Medieval Hispanic Studies in Honour of Alan Deyermond*, Department of Hispanic Studies, Queen Mary and Wetfield Collage, Londres, 1997, pp. 179-192.

話者は終始「枢機卿」と「女王」の二人である。それぞれペドロ・ゴンサレス・メンドーサ卿とイサベル女王と推測され，前者が著者オルティスの代弁者として，王子の教育について心配する女王の問いかけに応え，導いていく役割を担っている。人間はなぜ善に向かえるのか，そのためには何が必要なのか，真の幸福とは何なのかという問題について，主に「枢機卿」の発言が対話の大部分を占め，「女王」に丁寧に語りかける調子で議論が展開されていく。

人間の教育論が本格的に開始される第二巻第三章で，オルティスは自分の代弁役「枢機卿」に，人間が善になるために必須の三要素として，人間の本性 Naturaleza，習慣 Costumbre そして智慧 Disciplina (Sabiduría)を提示させ，各要素について順を追って詳細に述べ，やがて「最高善への到達」論を完成させるが，本稿ではその土台を成すオルティスの人間論に焦点を絞って考察するものとする。

## 2. オルティスの人間論

オルティスの人間論の展開は，大きく五つの段階に区切って考察することが出来る。まず人間を天上の存在，つまり神と天使と比較し，その類似性と相違点について述べる。第二に人間とその他の地上の動物たちとの比較に移る。三つ目の段階で人間の身体的構造に焦点が当てられ，続いて第四に人間の起源の神聖さが証明されて，その存在は宇宙の中心であるという結論が導き出される。こうして天地両世界における人間の位置づけを明らかにした上で，最後の五段階目として人間の最も重要な特質である理性を有する魂の機能及び能力について議論される。

### 2.1. 人間の位置づけ

第一の議論は，旧約聖書の詩篇を引用し，「人間とは何か」という根本的な問いに対する答えを求める形で始められる。

枢機卿　「旧約聖書の詩篇に曰く『人間とは何ぞや，おお，わが主よ，あなたは彼らについて覚えておいでですか。当にあなたは彼らを天使に比して下なるものとした。肉体的なものを何ら有しない天使よりも彼らをわずかに下位においた。彼らを，天使と永遠なる遺産を共に所有するものとした。その本性において

天使と異なるにしても，神によって与えられた恩寵と功徳において人間はこれと同様である。』」[10]

人間は神との関係においては，当然その創造主に劣るが，天使との比較においては，理性を有するゆえに至福直観に到達できるという点において同等である。この至福直観はあらゆる霊魂が求める目的であるがゆえ，人間は最終目的において天使と同等であると言える。両者の相異は，その実現にあたって，人間は己に本来備わる能力だけでは不十分であり，神と天使の助けが必要であるという点にある。オルティスは人間の理性の価値を認めつつ，あくまで人間の限界を提示する。

この理性を所有することの意義は，第二の動物との比較論でより明らかにされる。理性こそ人間と他の動物を区別する決定的要因である。なぜなら理性によって，人間は時間の推移を考慮し行動の目的を自ら決定することが可能であるからである。オルティスは論拠としてキケロを引用する。

枢機卿　「(...), というのも，人間には，他のすべての動物たちと異なり，あらかじめ自然によって定められた目的というものもなければ，自身の目的に到達するために決められた道を歩まねばならないということもない。このことについてキケロ自身が次のように言っている。『これが人間と動物の最大の相違点である。つまり動物は，その時その時目前にあるものに向かって感覚によって突き動かされ，過去や未来の意識もなくただ現在あるものにのみ従うのである。一方人間は，理性を所有するおかげで物事の進展ということを意識することが出来る。原因というものを認識し，それに先立つ事柄及びそれによって生じる結果を無視しない。（...）』」[11]

---

[10] ORTIZ, A., *op. cit.*, p. 108.

[11] *Ibid.*, p. 109. このオルティスによるキケロの引用部分は，CICERÓN, *Sobre la naturaleza de los dioses*, Introducción, versión y notas de Julio Pimentel Álvarez (México: 1976), p. 65. Sección XIV 37-39 に見出される。

つまり，動物が過去，未来の認識も無くただ本能に従い，自然によって定められた目的のみを欲求するのに対して，人間には定められた目的は無く，因果律を意識しながら己の未来を決定することが出来る。それを可能にしているのが理性だ，というのである。オルティスは，この能力ゆえに人間は他のあらゆる動物よりも優れていると結論付ける。

第三の論点は，人間の身体構造に関するものである。他の動物に比べ，人間は自然界で生き抜くには体力的にあまりにも非力であり，その身体は敵から逃れるための羽も戦うための牙や爪も有していない。そのように人間の身体の不利点を上げた上で，オルティスはその直立姿勢に注意を促す。正面を向いた顔，額の下に並列に並んだ二つの目，背筋を伸ばして直立する身体，これらが人間特有の特徴であることを指摘し，その意義を複数の引用を用いて説明する。

枢機卿　「ところで，伝道の書に曰く，神は人間をまっすぐな姿勢に，星々を見られるように創られた。また，オヴィディウスも同じことを肯んじて曰く『動物たちが頭を下方に傾け地面を見る一方で，神は人間に，高いところを見上げ，天を見つめ，星々へ視線を注ぐことの出来る崇高な顔をお与えになった。(...)』」[12]

オルティスは人間の直立姿勢を空の星を見られることと関連付けて解釈する。15，16 世紀において天体は人間の宿命論と不可分であり，星は人間の性質や将来にどれほどの影響を及ぼすのかという問題が，知識人の間で頻繁に取り上げられていた。つまり，星を見つめるということは自身の生命や将来を凝視し考えを巡らすことを示唆し，唯一直立姿勢の保てる人間のみが可能なこととして，他の動物に対する優位を肯定する動機となったのである。

---

[12] *Ibid.*, pp. 109-110. オルティスによるオヴィディウスの引用は，OVIDIO, *Metamorfosis*, Texto revisado y traducido por Antonio Ruiz de Elvira, 2ª ed. (Madrid: 1988), pp. 9-10. Lib. I, 75-85 が引用元と思われる。

さらに，この天への視線は，四つ目の論点である人間の起源の神聖さを証明する根拠にもなった。ここでは人間は神の手によって天で創造されたとするヴェルギリウスとマルコス・マンリオの引用が用いられる[13]。

人間が天を見上げるのは，そこが自らの起源であり，またやがて戻る場所だからである。神によって創り出された人間は，また神によってこの地上のほかのすべての生き物を統治する使命を与えられているとする。

> 枢機卿　「そしてさらに（マンリオは）付け加える。『人間が天で創られたと信じる者にとって，おそらく理に適っていまいか。（...）唯一人間のみが物事の分別をつけることが出来，話す能力を有し，自身の才能を様々な形の技術に役立たせることに長けている。この人間というものは全ての創造物を治めるために創られたのだ。（...）』」[14]

この聖なる使命の完遂を可能にするのが理性であるとして，オルティスは，ラクタンシオの言を引き，この人間特有の機能によって，人は思考し，忠告を聞き，慎重に行動し，正義を実行することが出来るのであると明言する。最終的に，この正義を行える能力を備えているからこそ，人間は宇宙の中心たるに相応しい存在であると結論付けて，オルティスの人間論は一度締めくくられる。

### 2.2. 人間の魂について

人間の存在についての議論に続く人間の本性に関するオルティスの考察は，その魂に具わる機能及び能力に主な関心が向けられており，その理論の大部分はアリストテレスのそれに拠っている。人間は神や天使のような純粋理性的存在と動物のような肉体的感覚的存在の中間に位置するため，その魂に備わる機能も両者のものを併せ持つ。すなわち，植物（生物）的領域 vegetativa，感情・欲望的領域 sensitiva，知性的領域 intelectiva の三つであ

---

[13] *Ibid.*, p. 110.

[14] *Loc. cit.* MANILIUS, *Astronomicon*, (Los cinco libros astrológicos), Traducción y notas de Demetrio Santos (Valladolid: 1982), pp. 134-135. Sección 890-920 を参照。

り，意思 voluntad，記憶 memoria，知能 entendimiento (intelecto) といった人間特有の能力は最後の知性的領域に属する[15]。以上の魂の三領域の分類を踏まえたうえで，「理性的部分」には二種類あることが指摘される。

枢機卿　「魂は二つの部分に分けられる。理性を有する部分と有しない部分である。我々は理性に従わない部分を非理性的部分と見做し，これには植物的な能力や生物的能力があるとした。というのは，これらの能力はすべての生物に共通であり，理性が欠如していて不ぞろいであるからである。そして（魂には）他に，感情・欲望的部分という，理性に従う限りは何らかの仕方でこれを分有しているが，同時に理性に反対の方にも赴きうるという部分もある。それ故に，アリストテレスは非理性的部分は，植物的部分のように全く理性を有しないものと，欲情的ないし欲求的部分のように理性を聴きこれに従う限りは理性に与れるものの二様であると述べているのである。」[16]

人間の魂の「理性的部分と非理性的部分」のたて分けは，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』1102 b 28-1103 a 6 に見られる。魂には，両面を併せ持つ部分が存在する。知的領域はそのもの自身に理性を内包し，つねに理性的に働く部分であるし，植物（生物）的領域は逆に全く理性を有せず理性に従うことも出来ない部分であるのに対し，感情・欲望的領域は理性を聴きこれに従うことが出来るという意味において理性を「分有する」と言える。

以上のごとく人間の魂の機能及び理性の具わり方について理論を展開した後，オルティスは，この理性的な部分こそ，冒頭で提示した人間が善となるために必須の三要素の一つ，「人間の本性」であると結論付ける。知的領域であれ感情・欲望的領域であれ，この理性的部分の働きのおかげで，人間は徳を性向 hábito として身につけることが出来る。そして，徳を性向として

---

[15] 知能 entendimiento について，オルティスはアリストテレスの分類に従い，その二面性 (activo, posible) を指摘する。この分類はのちに「習慣」と「智慧」に論じる際に意味をもってくるが，本稿ではこれら二者を扱わないため考察には加えなかった。

[16] *Ibid.*, p. 129. Cf. ARISTÓTELES, *Ética a Nicomáquea*, 1102b 29-36.

有することが，すなわち人間が善になること，また幸福への道を歩むことなのである。こうして論議は，二つ目の要素「習慣」を導入し，魂がいかにして徳を身に付けられるかという問題に移る。

人間という存在は，オルティスによれば，その最終目的において天使とすら同等であり，この世においては，理性の所有と起源の神聖さゆえに動物たちの中で最も優れた存在，つまり宇宙の中心であると結論付けられた。彼の，天使や動物との比較論を通して見受けられるのは，人間の構造を魂と身体の二者から成るとものとして捉える視点と，その魂が所有する理性に対して繰り返される賛美である。彼の人間論の最終段階では，それゆえ，二者のうちの魂の方に焦点が絞られ，特にその理性的能力の所有に関して形而上学的とも言える理論が提示される。オルティスは「理性を所有すること」の意義を，動物のように本能に支配されず，自らの意思を持つことが出来るという点のみにとどめなかった。さらに，「正しく」振舞い，「善く」生きることを可能にすることこそ，理性の所有に見出されるべき真の意義であると考えていた。つまりオルティスは，理性的能力が人間の魂にどのように具わっているのかを理論的に明示することにより，人間が「善になり得る」唯一の生き物であることを強調しようとしたと捉えられよう。

## おわりに

本稿では，アロンソ・オルティスの『対話』を取り上げ，その教育論に見られる人間論を考察した。

彼の人間論は，人間は心身相関構造（魂 psique と身体 soma）をもつ存在であるというテーゼを基盤とし，人間に生まれながらに具わっている本性を認め，その価値を賞賛した。それは，のちに 16 世紀前半のカスティーリャ人文主義最盛期においてペレス・デ・オリーバらが「人間の尊厳」と呼び称えたものに通じると言える。ここに，15 世紀末で未だ人文主義初期にありながら，オルティスがこの思想的潮流の特徴を明らかに示していることが認められよう。

理性は人間特有の本性であり，その働きは人間を善にすることにあるというオルティスの確信は，彼を人間は理性の所有ゆえに完成可能な存在 perfectible であるという肯定に導いた。ただし，人間は「完成可能」，つまり潜在能力（理性）を有しているに過ぎず，この能力を開花させ「完成」を実現させていくことは，人間に自然によって具わる本性のみでは不十分な

のである。本稿では考察が及ばなかったが，オルティスはこのように人間の本性の限界をも認め，外的な力による援助の必要性を説いている。それが，本稿の第一章で述べた「習慣」と「智慧」にあたる「教育」であるが，これについては考察を別の機会に譲りたいと思う。ただ，この教育という外的援助があれば，すべての人間は善に向かえる資質を持つ（但し，人間がその本性を正常に具えている限り，という条件がつく）という，「人間の本性」及び「教育」の両者の可能性に対する確信は，人文主義者と呼ばれる 16 世紀の多くの著者が表している共通の特徴であることのみ指摘しておく。

最後に，オルティスにはカトリック聖職者として当時の多くの著者と同様，中世からの伝統的キリスト教思想の影響も未だ多分に見受けられることも事実である。それらは，とりわけ人間創造の起源や最高幸福（至福直観）の定義に顕著であるが，しかしまた同時に当時教会から異端と見做されていた古代ギリシャ思想を新たな方法で解釈し直し，カトリック思想との融合を図ろうとする姿勢も随所に見られる。このような点についての分析は次回の研究の課題としたい。

## 参考文献


ABBAGNANO, Nicolás: *Historia de la filosofía*, vols.1 y 2, trad. por Juan Estelrichi y J. Perez Ballestar, 4ªed., Hora, Barcelona, 1994.

ALCALÁ, Ángel: "Juan de Lucena y el pre-erasmismo español", *Revista Hispánica Moderna*, Vol. XXXIV, núm. 1, Enero-Abril, 1968, pp. 108-131.

ARISTÓTELES: *Ética Nicomáquea*, Introducción por Emilio Lledó Iñigo, traducción y notas por Julio Pallí Bonet, 5ª ed., Gredos, Madrid, 1985.

BERTINI, Giovanni Maria: "Un diálogo humanístico sobre la educación del príncipe Don Juan", en Congreso de Historia de la Corona de Aragón, *Fernando el Católico y la cultura de su tiempo*, Institución Fernando el Católico-Diputación Provincial, Zaragoza, 1961, pp. 37-62. [Reproducido en su edición de Alonso Ortiz, *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Porrúa, Madrid, 1983, pp. 1-40.]

CAMILLO, Ottavio di: *Humanismo castellano del siglo XV*, trad. por Manuel Loris, Fernando Torres, Valencia, 1976.

_____: "Humanism in Spain", en RABIL, Albert Jr. (ed.), *Renaissance Humanism. Foundations, Forms and Legacy, vol.2. Humanism beyond Italy*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1988, pp. 55-108.

CAMPS, Victoria: *Historia de la ética, 1. De los griegos al renacimiento*, Crítica, Barcelona, 1987.

GALINO CARRILLO, María Ángeles: *Los tratados sobre educación de príncipes. Siglos XVI y XVII*, CSIC, Madrid, 1948.

GARCÍA ESTÉBANEZ, Emilio: "El renacimiento en Castilla", en FARTOS MARTÍNEZ, Maximiliano y VELÁZQUEZ CAMPO, Lorenzo (coords.), *La filosofía española en Castilla y León. De los orígenes al siglo de Oro*, Secretariado de Publicaciones e Intercambio Científico, Universidad de Valladolid, Valladolid, 1997, pp. 163-175.

GONZÁLVEZ RUIZ, Ramón: "Alonso Ortiz", en *Piedras Vivas, la Catedral de Toledo 1492: Mendoza y Cisneros. Dos legados artísticos y culturas*, Cabildo Catedral Primada de Toledo, Kadmos, Salamanca, 1992, pp. 41-42 y 53.

MARTÍNEZ ARANCÓN, Ana: *Antología de humanistas españoles*, Editorial Nacional, Madrid, 1980.

ORTIZ, Alonso: *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Versión, notas e interpretaciones por Giovanni Maria Bertini, Porrúa, Madrid, 1983.

RICO MANRIQUE, Francisco: "Príncipes y humanistas en los comienzos del Renacimiento español", en VALDEÓN BARUQUE, Julio (ed.), *Arte y cultura en la época de Isabel la Católica*, Instituto Universitario de Historia Simancas y Ámbito, Valladolid, 2003, pp. 323-338.

# 日本人スペイン語学習者に対する Processing Instruction の有効性に関する実証的研究

鈴木　しのぶ

## 0．はじめに

言語習得研究が進むとともに、実証研究に裏づけされた数々の言語教育への示唆が得られている。しかし、言語教育に有用と思われるこれらの研究の成果は、言語教育の現場ではあまり認識されておらず、実際の指導法に反映されていないように思われる。

現在、スペイン語に限らず幅広く外国語教育の現場で行われているのはアウトプット中心の従来型文法指導法である。この指導法には、インプットの役割や習得の過程といった言語習得研究からの示唆が反映されていない。

一方、SLA 研究において広く認められているインプットとその理解の役割を重視する文法指導法の一つに VanPatten が提唱する Processing Instruction がある。この指導法は理論研究と実証研究の両面からその有効性が支持されており、日本人スペイン語学習者に対しても従来型文法指導法以上の効果がある可能性がある。

そこで、本研究では、日本人学習者を対象に、Processing Instruction と従来型指導法という 2 種の指導を行い、その指導効果を比較することで日本人学習者に対する Processing Instruction の有効性の検証を試みた。

## 1．従来型文法指導法の特徴とその問題点

従来型の文法指導法は、文法項目の明示的説明、動詞や名詞のパラダイムリストの提示、文法項目が使用された対話文、学習者に目標文法項目を産出させる演習問題、翻訳などによって主に構成される。これらの構成要素は、文法訳読法やオーディオリンガル・メソッドといった伝統的な教授法の指導理念を反映している。これらの伝統的な教授法は、第二言語習得もその他のもっと一般的な学習と同じように、知識と練習によって起こるものと見なし、統語規則などの知識を練習の中で繰り返し使用することによってその知識の内在化をはかろうとする（VanPatten,

1996: 3)。従って、従来型指導法の大きな特徴は、指導の目標となる文法項目を、ドリル、または翻訳といった練習の中で実際に使用させ、その項目の習得を促進しようとするアウトプット重視という点にある。また、リスニングやリーディングを通しての理解活動は行われない、または軽視される傾向にある。

母語習得または第二言語習得分野での研究の発達により、従来型指導法の効果の限界が指摘されるようになった。その背景には、言語習得におけるインプットとその理解の重要性が数々の実証研究によって示されたことがある。例えば、いくつかの研究により、言語学習の初期段階においてリスニングやリーディングによるインプット理解を集中的に行うことは、理解能力だけでなく産出能力をも発達させることが示されている（Krashen, 1989; Lightbown, 1992; Elley & Mangubhai, 1983; Asher, 1972)。また、産出活動を遅らせ、理解活動を優先させることは、第二言語の効率的な習得を促すことも明らかになっている（Postovsky, 1974; Gary, 1975)。これらの実証研究からの示唆を考慮したとき、アウトプット重視の従来型指導法の問題点が明らかになる。従来型指導法は学習者にインプット理解を十分に行わせることなく、文法項目を実際に産出させることを重視する。つまり、この文法指導に対するアウトプット重視のアプローチは、インプットとその理解が言語習得に不可欠であることを実証した最近の言語習得研究の成果を反映しておらず、この指導法が実際に習得を促進するかどうかについては疑いの余地がある。

## 2. Processing Instruction

従来型指導法とは逆に、言語習得におけるインプットとその理解の役割を重視する文法指導法の一つに VanPatten が提唱する Processing Instruction（以下 PI）がある。

### 2.1 特徴

PI は習得におけるインプットの役割を重視し、形式の産出を求めずに理解活動を通して学習者の注意を形式に向けるインプット中心の文法指導法である。PI の最大の特徴は、習得に含まれる最初のプロセスである input processing に焦点を当てていることである。input processing とはインプットからインテイクを取り出す過程のことであ

り、この過程においては様々な処理ストラテジーが働く（VanPatten, 1993: 10, Lee & VanPatten, 2003:137-138)。学習者がインプットを処理するために使用するこれらのストラテジーは、形式の習得にとって常に有用に働くわけではなく、マイナスに働くこともある。PI では、このストラテジーの性質を説明する input processing モデルに基づき、ただ理解可能で意味があるだけではなく、習得を促進するよう意図的に操作されたインプット（構造化されたインプット）を学習者に与える。

PI の指導手順としては、まず、目標文法項目についての明示的説明が行われ、インプット中の形式にどのように注意を向ければよいかについてヒントとなる情報が提示される。その後、学習者たちは、構造化されたインプットによって構成されたアクティビティに取り組む。このアクティビティの中で、学習者は目標となる文法項目を含んだインプット、つまり、文や談話を聞いたり読んだりし、その内容理解に専念する。一方、スピーキングやライティングを通して目標文法項目を実際に産出する活動は一切行われない。

### 2.2 先行研究

PI の有効性を検証する研究は VanPatten & Cadierno (1993)に始まった。この研究は、スペイン語の目的格代名詞を目標文法項目とし、アウトプット中心の指導法との比較において PI の有効性の検証を行った。その結果は、理解テストにおいて PI グループが従来型指導グループを有意に上回り、産出テストでは両群の間に有意差は見られなかった。研究者たちは、PI は理解と産出の両方に利用可能な知識を学習者に与えたのに対し、従来型指導法は産出のみに利用可能な知識しか与えられなかったとこの結果を解釈し、PI の有効性を主張した。Cadierno(1995)、Farley(2001)、Cheng(1995)ではそれぞれ、スペイン語の動詞の過去形、接続法、ser/estar が目標文法項目とされ、従来型指導法との比較において PI の有効性が確認されている。また、Buck(2000)では英語の現在進行形、VanPatten & Wong(2004)ではフランス語の使役動詞が扱われ、PI は従来型指導法を上回る効果を示した。

## 3．研究方法

### 3.1 目的

PI の有効性は先にあげた先行研究において明らかになっているが、日本人学習者を対象にした実証研究はいまだ行われていなかった。そこで、本研究では日本人スペイン語学習者を対象に PI と従来型指導法の2種の指導を行い、その指導効果を比較することにより、日本人学習者に対する PI の有効性の検証を試みた。目標文法項目には現在を表す規則動詞の1人称と3人称単数形を選んだ。

実験にあたり、次の4つのリサーチクエスチョンを掲げた。

1.PI と従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、50 語程度の対話の聴解力に差があるか？
2. PI と従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、50 語程度のテキストの読解力に差があるか？
3. PI と従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、動詞の正しい形式を文字により産出する能力に差があるか？
4. PI と従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、単文を文字により産出する能力に差があるか？

### 3.2 被験者とグループ

実験の対象となったのは第二外国語としてスペイン語を履修する大学生であった。彼らのスペイン語学習歴は1年で、過去の学習において従来型指導法を受けていた。4クラスは、PI の指導を受ける PI グループ、従来型指導法を受ける T グループに無作為に振り分けられた。2つの指導グループの学習者の言語能力の均質性を確保するため、指導の直前にプレテストが行われた。また、指導直後に学習者の授業外でのスペイン語学習状況と学習時間、さらに学習者の心理状態の違いが指導効果へ与える影響を最小限にとどめるため、指導時の集中度に関するアンケートを行った。授業外でスペイン語を学習していると答えた学習者と、指導時の集中度に関して集中できなかったと答えた学習者たちは被験者グループから外された。プレテストとアンケートをもとに学習者の選別を行った結果、最終的な被験者数は PI グループ 18 人、T グループ 18 人、計 36 人であった。

### 3.3 教材

実験に先立ち、両指導グループに共通の語彙練習教材と、各指導グル

ープのための２種類の教材が作成された。

語彙指導教材では、指導で行うアクティビティに含まれる語彙が学習者のパフォーマンスに影響を与えないよう、アクティビティに含まれる全ての語彙が提示された。指導教材で使用された語彙は全て学習者たちにとって既習のものばかりであった。この語彙練習教材は*¿ Sabías que... ?* (VanPatten, Lee & Ballman, 2004: 32-33) に基づいて作成された。

PI グループの指導教材は音声と文字の両方によるインプットを与え、理解活動を通して学習者にインプットを処理させることを目的とした。一方、T グループの指導教材では、学習者に目標文法項目をオーラルまたは文字で産出させることに焦点が当てられた。２つの教材は、学習者に理解活動を求めるか、産出活動を求めるかという点において異なった。アクティビティ１と３では、PI グループ用教材は単文を聞き、相当する絵を選ぶことでその理解を示すことを求めた。口頭または文字で動詞の活用形を産出することは含まれなかった。一方、T グループ用教材は、PI グループと全く同一の文を聞き、それを即座にリピートすることのみが求められ、意味理解を要求することはなかった。アクティビティ２と４では、PI グループの教材は単文を聞きながら読み、相当する絵を選び理解を示すよう求めた。一方、T グループの教材では、主語に適するよう動詞を活用させ書くことが求められた。与えられた単文の意味理解は要求されなかった。

両指導教材において、使用された単語やアクティビティの数などその他の要素は同一になるよう配慮されていた。それぞれのアクティビティで使用された単語や文章は全て同じで、与えられた順番も同一であった。アクティビティの数も同じで、それぞれのアクティビティにおける理解作業と産出作業の回数も同じであった。例えば、PI グループの教材のアクティビティ１の最初の問題では、学習者たちは *Usa el ordenador.* という文章を２度聞き、T グループは同じ文を１回聞き、それを１回リピートした。つまり、両グループの学習者たちがその文を聞くまたは発した回数は２回で、同一になっていた。また、両教材のアクティビティの長さはほぼ同じになるように調整され、インプット文またはモデル文を与える速度についても同一になるように最大限にコントロールされた。全てのアクティビティの指示文、インプット文、モデル文は MD に

録音されており、それを使用することによって、どのクラスにおいてもアクティビティの長さやインプット文、モデル文を与える速度は同じであった。

### 3.4 実験手順

本実験は前期の一番最初の通常授業時に行われた。4クラスの指導についてはそれぞれのクラスの担任が行った。2人の教員がそれぞれ2クラスずつ受け持っており、2クラスの一方でPIの指導を、もう一方で従来型指導法の指導を行った。2人の教員は共にPIと従来型指導法の指導をそれぞれ1度ずつ行ったことから、教員の違いが指導効果に与える影響は少ないと考えられた。

4つのクラス全てにおいて、授業の約50分が指導とプレテスト、ポストテスト1に費やされた。まず、最初にプレテストが行われた。その後、目標文法項目である現在を表す規則動詞の活用形についての説明が与えられた。次に語彙練習に入り、最初に2人の登場人物が紹介され、それぞれの絵が2人の一日の行動を表していることが説明された。次に、絵に描かれている行動を述べるそれぞれの句について教員が読み上げ、使用されている単語の意味について確認した。学習者たちはそれぞれの絵に相当する句を選ぶよう指示され、少し時間をおいてから答えを確認した。その後、予め録音されたMDを使用してアクティビティが行われた。その際、教員が余分な説明を加えたりすることはなかった。全てのアクティビティの終了後、ポストテスト1と、授業外でのスペイン語の学習状況、学習時間、指導中の集中度、指導を受けた感想についてのアンケートが行われた。1週間後の同じ授業時間の始めに、ポストテスト2とテスト時の集中度と復習時間についてのアンケートが行われた。また、同様に4週間後にもポストテスト3と、テスト時の集中度と復習時間についてのアンケートが実施された。

### 3.5 分析方法

プレテスト、ポストテスト 1,2,3 で得られたデータを SPSS（Statistical Package for Social Science）を用いて統計的に分析し、各テストのリスニング、リーディング、文法、ライティングの各セクションにおいて2グループの平均点に有意差があるかどうかを調べた。分

析方法は、最終的な被験者の人数が36人と少なく正規分布していなかったため、マン・ホイットニのU検定を用いた。

### 3.6 結果

#### 3.6.1 理解テスト

PIグループとTグループのリスニングテストの結果は、表1、図1のようになった。プレテストにおいては、Tグループが平均点においてPIグループを上回っていた。しかし、両群の間に有意差はなく、リスニング能力における両群の均質性は確保されていた（$p = 0.537$）。ポストテスト1では、PIグループとTグループの平均点にほぼ差は見られなかった（$p = 0.928$）。ポストテスト2では、TグループがPIグループを平均点で上回ったが、両グループの間に有意差はなかった（$p = 0.212$）。同じくポストテスト3においても、TグループがPIグループを上回ったが有意差は見られなかった（$p = 0.180$）。以上の結果から、リサーチクエスチョン1については、PIと従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、50語程度の対話の聴解力に差は見られなかったという答えが得られた。

もう1つの理解テストであるリーディングテストの結果は表2、図2に示された通りである。プレテストにおいては、PIグループが平均点においてTグループを上回っていた。しかし、両群の間に有意差はなく、リーディング能力における両群の均質性は確保されていた（$p = 0.776$）。3つのポストテスト全てにおいて、PIグループは平均点においてTグループより高いスコアをマークした。ポストテスト1では、PIグループがTグループをわずかに上回ったが、点数にほぼ差はなく有意差も見られなかった（$p = 0.736$）。ポストテスト2では平均点でPIグループがTグループを上回ったが、両グループ間に有意差はなかった（$p = 0.347$）。ポストテスト3でもPIグループがTグループを若干上回ったが、有意差は見られなかった（$p = 0.904$）。これらの結果から、リサーチクエスチョン2については、PIと従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、50語程度のテキストの読解力に差はないという答えが得られた。

表１　リスニングテスト結果

| | PI Group | | T Group | | 差 | *p* |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | PI-T | |
| Pre | 1.56 | 3.03 | 2.06 | 2.80 | -0.50 | 0.537 |
| Post1 | 6.94 | 6.82 | 6.89 | 6.29 | 0.05 | 0.928 |
| Post2 | 11.72 | 5.50 | 14.33 | 6.81 | -2.61 | 0.212 |
| Post3 | 5.83 | 4.18 | 8.39 | 6.25 | -2.56 | 0.180 |

*合計点：Pre - 26, Post1 - 26, Post2 - 32, Post3 - 26

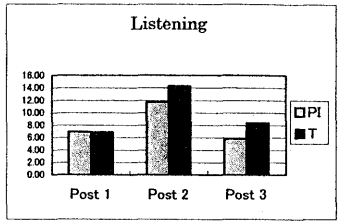



図１　リスニングテスト結果

表２　リーディングテスト結果

| | PI Group | | T Group | | 差 | *p* |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | PI-T | |
| Pre | 6.44 | 5.83 | 5.67 | 5.22 | 0.77 | 0.776 |
| Post1 | 13.00 | 6.10 | 12.94 | 4.41 | 0.06 | 0.736 |
| Post2 | 10.56 | 6.14 | 8.17 | 4.83 | 2.39 | 0.347 |
| Post3 | 17.72 | 9.79 | 17.28 | 8.50 | 0.44 | 0.904 |

*合計点：Pre - 28, Post1 - 24, Post2 - 24, Post3 - 30

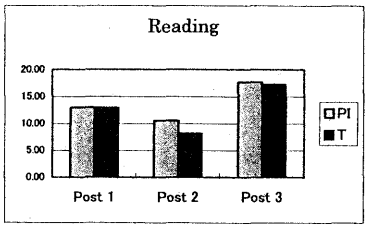



図２　リーディングテスト結果

3.6.2　産出テスト

PI グループと T グループの文法テストの結果については、表３、図３のようになった。プレテストにおいては、PI グループが平均点において T グループを若干上回っていた。しかし、両群の間に有意差はなく、両群の均質性は確保されていた（$p = 0.384$）。ポストテスト１では、両グループの平均点は全く同じで有意差はなかった（$p = 0.847$）。ポストテスト２では T グループが PI グループのスコアを若干上回っていたが、両群の間に有意差は見られなかった（$p = 0.623$）。同じく、ポストテスト３でも T グループのスコアの方が PI グループよりも若干優れていたが、有意差はなかった（$p = 0.622$）。以上の結果から、リサーチクエスチョン３について、PI と従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、動詞の正しい形式を文字により産出する能力に差はないという答えが得られた。

ライティングテストにおける PI グループと T グループの結果は、表４、図４の通りである。プレテストにおいては、PI グループが平均点において T グループを上回っていた。しかし、両グループ間に有意差

は見られず、ライティング能力における両群の均質性は確保されていた（$p = 0.669$）。3つのポストテスト全てにおいて、PIグループは平均点においてTグループより高いスコアをマークした。ポストテスト1では、PIグループの平均点がTグループより優れていたが、両群の間に有意差はなかった（$p = 0.654$）。同じく、ポストテスト2でもPIグループがTグループを上回ったが、両グループ間に有意差は見られなかった（$p = 0.813$）。また、ポストテスト3でも、PIグループは平均点ではTグループに勝っていたが、有意差はなかった（$p = 0.667$）。これらの結果から、リサーチクエスチョン4について、PIと従来型指導法という異なる指導を受けたグループの間で、単文を文字により産出する能力に差はないという答えが得られた。

表3　文法テスト結果

| | PI Group | | T Group | | 差 | p |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | PI-T | |
| Pre | 2.89 | 1.68 | 2.44 | 1.54 | 0.45 | 0.384 |
| Post1 | 4.39 | 1.04 | 4.39 | 0.85 | 0.00 | 0.847 |
| Post2 | 4.17 | 0.79 | 4.33 | 0.69 | -0.16 | 0.623 |
| Post3 | 3.28 | 1.53 | 3.50 | 1.62 | -0.22 | 0.622 |

*合計点：Pre, Post1, Post2, Post3 = 5

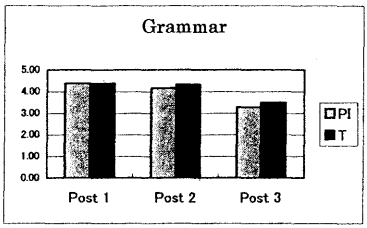



図3　文法テスト結果

表4　ライティングテスト結果

| | PI Group | | T Group | | 差 | p |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | PI-T | |
| Pre | 4.94 | 5.62 | 5.50 | 5.89 | -0.56 | 0.669 |
| Post1 | 24.06 | 12.33 | 22.67 | 12.55 | 1.39 | 0.654 |
| Pos 2 | 17.83 | 11.09 | 16.83 | 9.15 | 1.00 | 0.813 |
| Post3 | 17.11 | 12.73 | 14.22 | 10.44 | 2.89 | 0.667 |

*合計点：Pre - 45, Post1 - 47, Post2 - 45, Post3 - 47

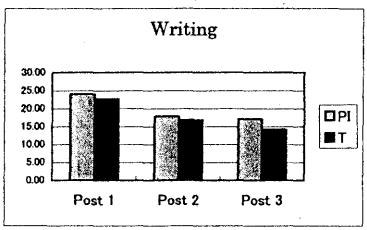



図4　ライティングテスト結果

## 3.7　考察

本研究の結果は、アウトプット重視の従来型指導法に対するPIの有効性を実証した一連の先行研究の結果と一致するものではなかった。本研究でPIの指導効果が得られなかった要因を、研究方法上の問題点、

過去の指導法の影響という２つの観点から見ていく。

### 3.7.1 研究手法上の問題点

研究を行うにあたり、様々な制約や限界があり、その方法は指導の効果を測定するのに完璧なものとは言えなかった。PI の効果が得られなかった理由として考えられる研究方法上の要因として次の 3 点が考えられる。

まず１つ目の要因は、指導時間の短さである。先行研究では 45 分間の授業が２度使用され合計 90 分が指導に当てられていたのに対し、本研究の指導時間はわずか 30 分であった。このように短い教授時間の中で指導効果を得るのは難しかったと思われる。

２つ目の要因は、評価テストの内容に関するものである。PI の被験者たちは、指導において単文の理解練習しか行っていなかったにもかかわらず、評価テストでは、リスニング、リーディングともに 50 語程度の談話の内容理解を求められた。短い指導時間を考慮すると、指導により被験者の理解能力が談話を処理できるだけのレベルにまで到達していたとは考えにくい。また、特に音声インプットの理解に関しては、被験者たちは過去の学習において、50 語程度の談話はおろか単文の理解さえほとんど行っていなかった。これらが要因となって、理解テストにおいて T グループを上回るパフォーマンスを示すことができなかったのかもしれない。

３点目は、目標文法項目が被験者たちにとって既習の項目であったことである。被験者たちは、過去の学習において、現在を表す動詞の全ての活用形を学んでいた。つまり、指導前に行われたプレテストにおいて、この項目の習得度の低さは顕著であったが、この項目について被験者たちが全く知識を持っていなかったわけではなかった。アウトプット中心の指導法のもとで学んだ知識がある状態では、PI の指導効果を測定することは難しかったのかもしれない。

### 3.7.2 過去の指導法の影響

本研究の被験者たちは、過去の学習において、文法説明を受けそれらの規則を実際に使用して翻訳や演習を行うというアウトプット中心の学習に慣れており、リスニングやリーディングを通しての理解活動には

ほとんど携わっていなかった。そのため、彼らのリスニング、リーディング能力は低かったと推測される。

また、慣れていない理解練習を行うこと自体が彼らにとって心理的負担であった可能性がある。指導直後のアンケートにおいて授業の感想を求めたところ、PI を受けたクラスにおいて、リスニングが難しかったとの記述が多く見られた。このことからも、被験者たちが音声インプットをいかに困難に感じていたかが分かる。英語学習の場合、音声インプットに不慣れな学習者はリスニング練習に拒否反応を示す傾向がある。本研究の被験者にも同様のことが起こり、学習意欲が大幅に低下した可能性がある。

PI は理解活動を中心とした指導法であるため、被験者たちの理解能力の低さと理解活動への不慣れさが指導効果が観察されなかった要因となったのかもしれない。

## 4．終わりに

本研究では、従来型指導法との比較において、日本人スペイン語学習者に対する PI の有効性は確認されなかった。しかし、日本の英語教育においては、学習時間や教材など様々な制約にもかかわらず、TPR など PI と似た性格を持つインプット中心の指導法が効果をあげており、その有効性が実証されている（黒川, 2002)。日本のスペイン語教育と英語教育では、学習時間、学習開始時の年齢、教材などの面で違いがあり、英語教育で効果的と実証されている PI などのインプット中心の指導法が、スペイン語学習者に対しても同様の効果をもたらすかどうかについては今後検証していく必要がある。

本研究の実験の考察を通して、PI に関する更なる研究課題が得られた。本研究では研究手法上の問題から PI の有効性が正確に検証されなかった可能性があるため、それらの問題点を改善した研究が求められる。今後は、指導期間を長くした場合の PI の効果、未習の文法項目を扱った場合の PI の効果についての実証的研究が必要であろう。

## 参考文献

ASHER, J. J. (1972). “Children’s first language as a model for second language learning”, *The Modern Language Journal*, 56, pp.

133-139.

BUCK, M. (2000). *Procesamiento del lenguaje y adquisición de una segunda lengua. Un estudio de la adquisición de un punto gramatical en inglés por hispanohablantes.* Tesis doctoral inédita, Universidad Nacional Autónoma de México.

CADIERNO, T. (1995). "Formal instruction from a processing perspective: An investigation into the Spanish past tense", *The Modern Language Journal,* 79, pp. 179-193.

CHENG, A. (1995). *Grammar instruction and input processing. The acquisition of Spanish ser and estar.* Tesis doctoral inédita, University of Illinois, Urbana-Champaign.

ELLEY, W. B. & MANGUBHAI, F. (1983). "The impact of reading on second language learning", *Reading Research Quarterly,* 19, pp. 53-67.

FARLEY, A. P. (2001). "Authentic processing instruction and the Spanish subjunctive", *Hispania,* 84, pp. 289-299.

GARY, J. O. (1975). "Delayed oral practice in initial stages of second language learning", en Burt, M. K. et al. (eds.), *On TESOL '75: New directions in second language learning, teaching and bilingual education,* Washington: Teachers of English to speakers of other languages, pp. 89-95.

KRASHEN, S. (1989). *Language acquisition and language education: extensions and applications.* New York: Prentice Hall International.

LEE, J. F. & VANPATTEN, B. (2003). *Making communicative language teaching happen,* 2ª. ed. New York: McGraw-Hill.

LIGHTBOWN, P. M. (1992). "Can they do it themselves? A comprehension-based ESL course for young children", en Courchene, C. et al. (eds.), *Comprehension-based second language teaching/L'Enseignement des langues secondes axé sur la compréhansion,* Ottawa: University of Ottawa Press, pp. 353-370.

POSTOVSKY, V. (1974). "Effects of delay in oral practice at the

beginning of second language learning", *The Modern Language Journal*, 58, pp. 229-239.

VANPATTEN, B. (1996). *Input processing and grammar instruction.* Norwood: Ablex.

VANPATTEN, B. et al. (2004). *¿Sabías que...?*, 4ª. ed. New York: McGraw-Hill.

VANPATTEN, B. & CADIERNO, T. (1993). "Explicit instruction and input processing", *Studies in Second Language Acquisition*, 15, pp. 225-243.

VANPATTEN, B. & WONG, W. (2004). "Processing instruction and the French causative: Another replication", en VanPatten, B. (ed.), *Processing instruction. Theory, research, and commentary*, pp. 97-118.

黒川愛子 (2002)『The application of Total Physical Response for developing listening fluency and improving communicative competence』関西英語教育学会 第5回卒論・修論研究発表セミナー

## REHK 投稿規定

(2004 年 11 月 11 日一部改定)

1. 本誌への投稿は京都イスパニア学研究会の会員に限る。ただし，本会が依頼した寄稿・講演の原稿等はこの限りではない。

2. 本会が依頼した場合を除き，執筆者は所定の印刷費を支払うものとする。印刷費の額については，その都度連絡する。

3. 原稿の種別は論文・研究ノート・書評・翻訳・資料とする。

4. 原稿は 9 月末までに＜規定 12＞の宛先に送付すること（期限厳守)。

5. エッセイ・回顧録等は記念号を除き本誌には掲載せず，会報に記載する。

6. 原稿の採否は，編集委員会が審査し決定する。

7. 提出された原稿について，編集委員会は意見を述べて修正を要請することがある。

8. 編集委員会が要請した場合を除き，提出後の原稿の書き足しや差し替えは認めない。

9. **製本は，提出原稿を使用する。従って，提出原稿は，下記の要領で清書プリントされた完成原稿でなければならない。**

記

(1) 用紙
A4 版の用紙を用い，REHK 第 1 号～第 4 号に近い形で完成させる。製本の際には，A5 版に縮小されることを念頭に置くこと。(A5 版は A4 版を 70%縮小したもの)

(2) 余白
上下左右とも 25mm とする。

(3) 書き出し
第 1 行目：タイトル（太字，センタリング)
第 2 行目：空け
第 3 行目：氏名（右詰め)
第 4 行目：空け
第 5 行目：書き始め

(4) 註
文末註でも脚註でもよい。

(5) 原稿枚数
論文：和文で，34字×33行で15枚程度
欧文で，33行で18枚程度
研究ノート：和文で，34字×33行で10枚程度
欧文で，33行で12枚程度
書評：和文で，34字×33行で3枚程度
翻訳：和文で，34字×33行で10枚程度
資料：和文で，34字×33行で10枚程度
なお，枚数には，書き出し部分，本文，註，参考文献を含む。

(6) ページ番号
原稿の最下部に通し番号を付すること

(7) 文字のタイプとサイズ
和文の場合は，明朝体で12ポイント
欧文の場合は，Centuryで12ポイント

10. 前項の規定（1）～（7）に反する原稿は原則的に受理しない。

11. 原稿送付時には，以下のものを必ず揃えて提出すること
① 完成原稿をプリントアウトしたものを3部。
② 完成原稿の入っているフロッピーディスク（Windows のMicrosoft Wordに限る）を1枚。
③ 種別（<規定3>）を明示したもの。
④ 和文の場合は，スペイン語タイトルおよびローマ字表記の氏名を明記したもの。

12. 完成原稿の送付先およびREHKに関する問い合わせ先：

〒612 - 8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学文学部　安藤真次郎研究室
Tel: 075 - 645 - 8521（研究室直通）
E-mail: shinjiro@let.ryukoku.ac.jp

以上

# 編集後記

REHK 第 13 号が刊行の運びとなりましたので、お届け致します。

京都イスパニア学研究会第 13 回大会（2004 年 12 月 5 日（日）、於京都キャンパスプラザ）では中村多文子氏（ラテンアメリカ文学）、鈴木しのぶ氏（言語教授法）、久保賢子氏（スペイン民俗学）、森直香氏（スペイン文学）の 4 名に研究発表を行っていただきました。そして、記念講演には上智大学より小林一宏先生をお迎えし、「レコンキスタからコンキスタへ―歴史の連続性―」という壮大なテーマで歴史解釈の面白さについてお話いただきました。講演内容は本誌に掲載させていただきましたので、是非ご高覧ください。

『ドン・キホーテ』前篇刊行 400 周年にあたる今年、スペイン本国をはじめとしてセルバンテス関連の催しが各地で行われ、著作物も多数出版されたことは皆様ご周知のことと思います。この 2005 年はイスパニスタにとって例年とは一味違った知的刺激を受ける機会が多かった一年だったのではないでしょうか。セルバンテスについて語る資質など全くない小生ですが、なぜか後篇のバラタリア島領主となったサンチョに次々と珍事件や難題が持ち込まれる件は妙に印象に残っています。中でも第 51 章の「橋を渡る前に目的を誓い、その誓いが真なら自由放免、偽なら絞首刑に処す」という二律背反的なお触れが出ている中で、一人の男が「橋を渡る目的は絞首刑にされること」と誓ったために監視する立場の役人がジレンマに陥り、サンチョに判決を委ねるという場面は何度読んでも飽きることがありません。論理の盲点をついた興味深いエピソードだと思います。サンチョが下した人情的でやや詭弁的な判決ではなく、この難題を法学的な見地から解決を図ると一体どうなるのだろう、などと考えてみると、より楽しくなってきます。

近年、世は日本語ブーム、IQ ブームです。コミュニケーション力や柔軟な発想が求められている結果なのかもしれません。しかし、こうした現代人が求めるもののヒントが実は古典の中に隠れていることも多いと思います。「ドン・キホーテ・イヤー」にあやかって、改めてこの不朽の名作と向き合い、独自の視点で解釈を試みながら秋の夜長を過ごすのも悪くはない気がします。

（岡本信照）

**REHK** (Revsita de Estudios Hispánicos de Kioto)
２００５年１２月４日　印刷
２００５年１２月４日　発行

発行所　京都外国語大学イスパニア語学科
〒６１５－８５５８　京都市右京区西院笠目町６

発行責任者　岡本信照
印刷所　都印刷
〒６００－８３１８　京都市下京区北小路新町西入る

# R E H K

## Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

No. 13

**Conferencia:**

De la Reconquista a la Conquista. El *antes* y el *después* en la historia ..... Kazuhiro KOBAYASHI (1)

**Artículos:**

El simbolismo de los colores en *Bodas de sangre* ..... Naoka MORI (23)

«Don Quijote de la Manchuria»: Salvador de Madariaga en la Sociedad de Naciones ante la invasión japonesa de Manchuria ..... Keishi YASUDA (35)

**Notas:**

Educación de los Indígenas en Bolivia —Sistema Educativo y Reforma Educativa para los Indígenas— ..... Reiko IKEDA (51)

Los llamados "falsos amigos" entre inglés y español: para superar una interferencia lingüística en el aprendizaje del léxico ..... Shinsho OKAMOTO y Kazumi HASHIMOTO (61)

Teoría del hombre en Alonso Ortiz: *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos* ..... Sayaka KATO (73)

El método *Processing Instruction*. Una investigación empírica sobre su efectividad en los estudiantes japoneses de español ..... Shinobu SUZUKI (85)

2005

Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto